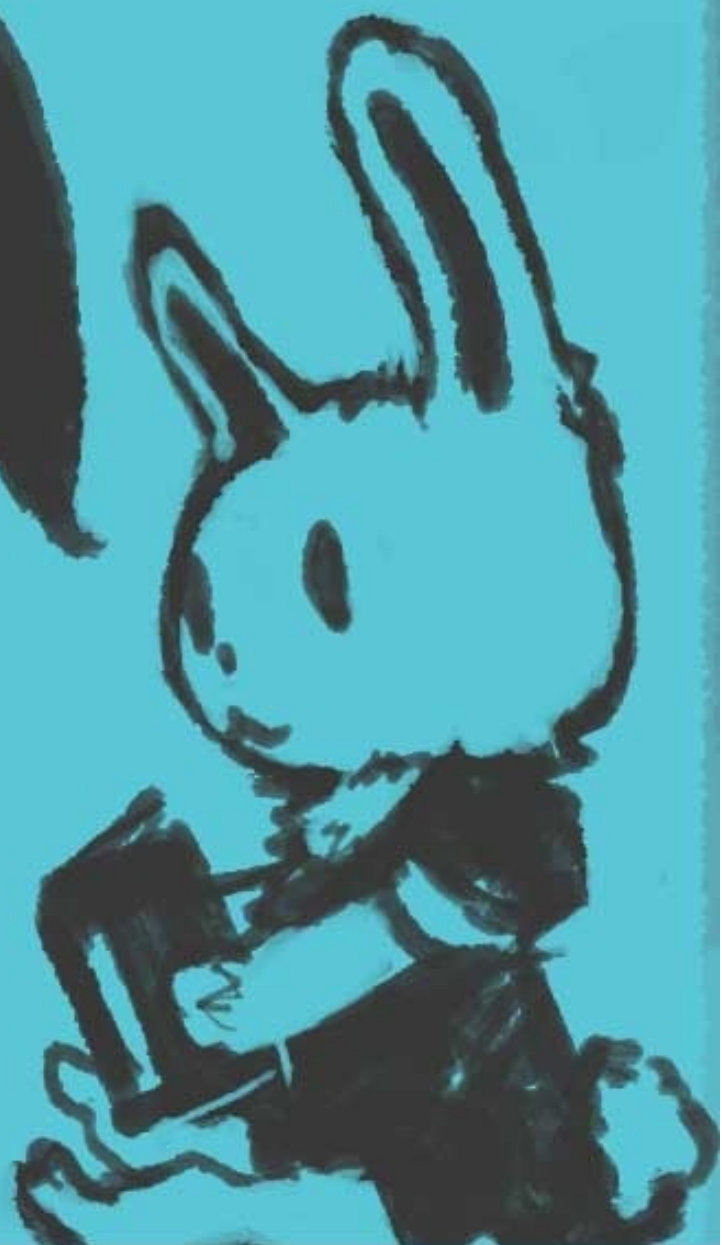


マタイによる福音書

めぐぴよんの
はじめて聖書



著者：めぐぴよん

手元に聖書がなくても
読める入門本！

はじめに。

*はじめに

マタイによる福音書は、西暦八〇年代後半に書かれたと言われています。「マタイによる福音書」とあるので、マタイという人が作者のように思われるでしょうが、これは、いわば代表者の名前をつけたようなもので、実際には、マタイを中心とする複数の人たちが、イエスの言い伝えを各地を回って集めて、編集したものです。さらに、すでに作られていた「マルコによる福音書」も資料になっていると言われています。そうすることで、イエスの教えが残っていくようにと願って書かれたのです。聖書は神様が書いた、または、イエス様が書いたと思っている方もあるようです。しかし正解は、イエスの孫弟子くらいの人たちが協力して書いたのです。

この本には、聖書の本文とその解説が交互に書かれています。左に空白があるのが聖書本文、空白なしに書いてあるのが説明です。一生懸命わかってもらうように書きました。専門的なことでなく、あくまで初心者（聖書を読んだことがない）向けですので、あえて掘り下げていない部分もあります。ご了解ください。

さあ、読んでみましょう。マタイによる福音書は、聖書の一番最初にあります。次ページのように、系図から始まっています。系図を全部読むのは面倒だと思われたら、解説から読まれてもかまいません。

《本書の凡例》

●聖書は「マタイによる福音書一章一節から二節まで」という言い方で箇所を伝えます。”節”というのは聖書の本文の中に小さな数字が書いてあります。これによって、みんなが同じ箇所を見ることができます。
(この本は聖書が手元になくても読んでいただけます)

●一章一節から二節を更に簡略化して(1:1-2)と記します。
本書では引用した部分について、このように簡略化して記します。本文で、最後に(1:1-2)のような数字が書いてあるのは聖書の中の本文です。

1章

1章

【イエス・キリストの系図】（1：1－17）

アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。

アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダはマルによってベレツとザラを、ベレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、アラムはアミナダブをアミナダブはナフシオンを、ナフシオンはサルモンを、サルモンはラハブによってボアを、ボアズはルツによってオペドを、オペドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、ソロモンはレハプアムを、レハプアムはアヤを、アビヤはアサを、アサはヨシャファトを、ヨシャファトはヨラムを、ヨラムはウジヤを、ウジヤはヨタムを、ヨタムはアハズを、アハズはヒゼキヤを、ヒゼキヤはマナセを、マナセはアモスを、アモスはヨシヤを、ヨシヤは、バビロンへ移住させられたころ、エコンヤとその兄弟をもうけた。

バビロンへ移住させられた後、エコンヤはシャティエルをもうけ、シャティエルはゼルバベルを、ゼルバベルはアビウドを、アビウドはエリアキムはアゾルを、アゾルはサドクを、サドクはアキムを、アキムはエリウドを、エリウドはエレアザルを、エレアザルはマタンを、マタンはヤコブを、ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。

こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまで十四代である。」（1：1－17）

初めて新約聖書を手にする時、いきなり名前の列挙された系図が出て来て、たいへん、後悔してしまうのではないのでしょうか。（覚えたりする必要はないのでご安心を）しかし、この福音書が書かれた時代は、生前のイエスを知る人もいなくなり、イエスの権威づけをするには、この系図がどうしても必要だったのです。イエスがダビデの子であると証明するのは、当時、大変な大事なことでした。ユダヤ人への宣教はユダヤ教からキリスト教への改宗になります。（最初はユダヤ教の一派だと思われていました）そこで、ユダヤ教のダビデ王を認めた上で、イエスへと続いて（最初はユダヤ教の一派だと思われていました）行くことが大事だったのです。「ダビデの子、イエス」と呼ばれる場面がありますが、そういうことなのです。

私たちが使う西暦は、イエスが誕生した年が基準となっていてと言われています。紀元前は「BC=ビフォークライスト」、紀元後は「AC=アフタークライスト」といって、イエスの誕生によって、世の中が変わったことを表していますが、時間がそうだったように、すべてのことは、紀元前からつながっているのです。ちなみに、正確にはイエスの生誕年が紀元元年ではないようです。

【イエス・キリストの誕生】（1：18－25）

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアとのことを表沙汰にすることを望まず、密かに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。このすべてのことは、主が預言者を通して言われていたことが実現されたためであった。

「見よ、乙女が身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」
その名は、「神は我々と共におられる」という意味である
ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおりに妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。
（1：1－17）

イエスは、「処女懐胎」で生まれて来たというのは、日本でもよく知られていることでしょう。岡山県倉敷市の大原美術館には、天使から懐胎を知らされて驚くマリアを描いた「受胎告知」（エルグレコ作）という絵がありますが、驚き、恐れ、喜びをよく表したすばらしい名画です。

母マリアは、夫となるヨセフと一度も関わることなく、一人の男の子を産んだのです。そして、夢の中で会った天使のお告げ通りに、その子をイエスと名付けました。イエスという名前は、当時、よく使われる名前でした。たとえば、日本での「太郎」と同じです。ちなみに、「イエス・キリスト」というのは、名前と名字ではありません。キリストとは救い主を意味し、「救い主であるイエス」という意味になります。名前というより、呼び方と言えるでしょう。

天使の言葉の中にカッコで囲まれた引用があります。これは、旧約聖書のイザヤ書からの引用です。このなかには「その名はインマヌエルと呼ばれる」と記されています。インマヌエルとは、「神は我々と共におられる」ということです。ここで言われている「我々」とは、イエスを救い主と信じる人であり、「神」とは、イエス自身を指しているのです。神とイエスの関係を説明するのは難しいです。イエスは受肉（じゅにく＝体を持つ）した

神の姿です。また、イエスは神の子とも聖書の中で言われます。イエスは神の子ですが、しかし、神とイエスは一つなのです。

2章

2章

【占星術の学者が訪れる】（2：1－12）

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。その時、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおられますか。私たちは東方でその方の星を観たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々もみな、同様であった。王は国の祭司長や律法学者を皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言書がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ。

お前はユダの指導者の中で
決して一番小さい者ではない。

お前から指導者が現れ、

私の民イスラエルの牧者となるからである。』

そこでヘロデは占星術の学者たちを密かに呼び寄せ、星の現れてた時期を確かめた。そして「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ、私も行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進みついに幼子のいる場所に止まった。学者はその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリア共におられた。彼らはひれ伏して幼子をあがめ、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが「ヘロデの所へ帰るな」と夢でお告げがあったの別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。（2：1－12）

さて、現代のようにインターネットもない時代、まだ、誰にも話していないのにはずなのに、生まれたばかりのイエスのところに、遠くから占星術の学者たちがやってきました。ヘロデ王を尋ねた後、また星に導かれ進んだのです。

「占星術の学者」と書いてありますが、元は本来ペルシアの祭司（ゾロアスター教）で、天文学、薬学、占星術、魔術、夢解釈をよくし、人の運命や世の動きについて神のご意志を伝える人たちでした。いろいろな記録から新約時代の地中海世界では、魔術師は珍しくなく、ユダヤにもいたことが記録されています。東方（おそらくアラビアかペルシア）からはるばるメシアを求めてやってくるこの学者たちは、当時の学問に通じたエリートの人で、この物語でイエスのメシア性が学問的にも証明されたことを示唆していると言えます。また、最初にイエスに礼拝したものが外国人だったということは重要なことです。ユダヤ教はユダヤ人のためだけの宗教だったからです。イエスの誕生でそれが変化していくのです。

学者たちは「ユダヤ人の王」と聞いてたので、当然のように、当時の為政者であるヘロデ王のもとを尋ねます。学者たちは、星が導いた存在の誕生を祝福するためにやって来たのです。しかし、「ユダヤの王が誕生した」という言葉にヘロデは、新しいメシア運動の発生ではないかと、不安を覚えずにはいられませんでした。学者たちは、旧約聖書（ミカ書5：1）を引用しました。そこで、不安を隠して、学者たちに「わたしも拝みに行くから、見つかったら知らせてくれ」と言いました。もちろん、すぐに抹殺するつもりだったのですが。

やがて、また星が導き、学者たちは幼子のイエスを探し出すことができました。彼らはイエスに高価な捧げ物をして、夢のお告げで「ヘロデの所へ帰るな」といわれたので、ほかの道から自分たちの国へ帰って行ったのです。

あれ？馬小屋で生まれたんじゃないの？と思う方もあるでしょうが、マタイ伝では馬小屋という記述はないのです。

*「乳香」数種の乳香料の分泌液を乾燥した香料。高価な者として流通された。

*「没薬（もつやく）」下剤、健胃剤として用いるミルラの木を示す。アラビアなどの固有のものだったので、パレスチナでは高価な輸入品だった。

【エジプトに避難する】（2：13－15）

占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデがこの子を探し出して殺そうとしている。」ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子呼び出し」と、主が預言者を通して言われたことが実現するためであった。（2：13－15）

ヘロデが命を狙っていることを神様から知らされて、ヨセフとマリアは産まれて間もない子どもを連れて、エジプトに行逃れたのです。

【ヘロデ、子供を皆殺しにする】（2：16－18）

さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確

かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を一人残らず殺させた。こうして、預言者エレミヤを通して言われたことが実現した。

「ラマで声が聞こえた。

激しく嘆き悲しむ声だ。

ラケルは子供たちのことで泣き、

慰めてもらおうともしない、

子供たちがもういないから。」（2：16－18）

「ユダヤの王」が生まれたという知らせに、ヘロデ王は神経を尖らせていました。しかも、帰りに寄って成果を知らせるように命じた学者たちがやって来ないことで大いに怒っていたのです。

ヘロデ王は残虐な王だと知られていました。自分自身が人民から全く尊敬されていないことを知っていて、ヘロデ王が死ぬときは、ユダヤの全世帯が家族一人を殉死させて全人民そろって王の死を悲しむべきことと命令したくらいです。しかし、残虐な心の奥に、誰も信じられない悲しい生活を見ることができるようになります。ヘロデは、自分の知っている学者たちに確かめさせ、考えられる地域の二歳以下の男の子を全員殺させたのです。天使の言葉に、夜のうちにすぐに出発してたおかげで、イエス一家は助かりました。

この虐殺は、ヘロデの残忍さを示すために引用されますが、ベツレヘムの幼児虐殺はマタイ伝以外に文献がなく、史実としては疑われています。文中の引用は旧約聖書 エレミヤ書2：16－18です。

【エジプトから帰国する】（2：19－23）

ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。「起きて、子供とその母親を連れて、イスラエルの地に行きなさい。この子の命を狙っていた者どもは死んでしまった」そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。しかし、新王アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と預言者たちを通して言われたことが実現するためであった。（2：19－23）

天使がまた夢に現れて、ヘロデが死んだからイスラエルに帰りなさいと言われたヨセフは、前のとき同様に、すぐに起きて支度をし、エジプトを出て、イスラエルに向かいました。このようなヨセフの間を空けない行動を見ていると、深い信仰を持った人なのだと感じることができます。

しかし、ヘロデの息子であるアルケラオが跡継ぎとなったと聞き、エルサレムに行くことをためらいました。するとまた、夢のお告げがあり、ガリラヤ地方のナザレという町に落ち着いたのです。

ここで、イエスは大工をする父を見ながら、やがては仕事を一緒にして覚え、ナザレを中心に仕事をしていました。大工と言っても、家を建てるのではなく、イエスたちの仕事は、寄木細工など細かい物を扱い、固定の店は持たず、巡回して仕事をしていました。

3章

3章

【洗礼者ヨハネ、教えを宣べる】（3：1－12）

そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

「荒れ野で呼ぶ者の声とする

『主の道を整え、

その道筋をまっすぐにせよ。』」

そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「虻の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思っても見るな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元におかれている。よい実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれるわたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、殻を消えることのない火で焼き払われる」（3：1－12）

洗礼者ヨハネの登場です。彼は、ほかにも大勢いたヨハネという人がいたので、分かりやすく「洗礼者ヨハネ」と呼ばれています。彼は神からイエスの先触れとなるようにと選ばれた存在です。そのころのユダヤ教は信仰的に堕落していました。様々な派閥に別れ、中には、統治しているローマの機嫌を損ねないよう、あれこれと気を使っている派閥もありました。

洗礼者ヨハネは、厳しい荒野で、「ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。」という厳しく禁欲的な生活をしていました。そのような人物の説教は、力強く、歯切れよいものだったにちがいありません。彼は、洗礼（川の中に全身を入れる方法だったと思われる）を受けることで今までの罪を洗い流し、正しく生きることを勧めたのです。

そして、自分の後には、もっと優れた方が来られると話しました。それが、イエスなのです。

【イエス、洗礼を受ける】（3：13－17）

そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。ところが、ヨハネは、それを思いとどませようとして言った「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」しかし、イエスがお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行なうのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われる通りにした。イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上から下って来るのを御覧になった。そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。（3：13－17）

ヨハネは、イエスと会うときにはどこか特別な場所へ会いに行くのだろうと考えていたでしょう。ところが、イエスは何の前触れもなく、洗礼を受けたいと自分からやって来られたのです。当時の洗礼は川に全身を浸すものだったと考えられます。今でもヨルダン川で当時のような洗礼をしているとある写真集で見たことがあります。ヨハネは恐れ多いと止めようとはしますが、イエスの決心は固く、ヨハネから洗礼を受けることになりました。そのとき、神の霊が鳩のように御自分の上から下って来るのを御覧になりました。そして、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえたのです。神様が、これからイエスが、「神様の心に適う者」となると宣言されたのです。

4 章

4 章

【誘惑を受ける】（4：1－11）

さて、イエスは悪魔から誘惑をうけるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』

と書いてある。」次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。」「『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」イエスは「『あなたの神である主を試してはならない』と書いてある」と言われた。更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』

と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。（4：1－11）

ヨハネからの洗礼をうけて、イエスが宣教を始めるところです。その前に世の人々に宣教するために、誘惑の修行をお受けになりました。

四十日間の断食と悪魔の誘惑をイエスは受けられました。四十日間の断食というと信じられませんが、四十日というのは、聖書のあちこちでよく使われる決まり文句のような数字です。実際はそれより長かったのか、あるいは短かったのかわかっていません。

イエスはここで、石をパンに変えろ、高いところから飛び降りろ、特殊な能力を見せろ、この世のすべてをやるから悪魔に悪魔をひれ伏して拝めという誘惑を受けられました。私なら、この全部に引っかかったかもしれないと思います。人間が持つ欲望に陥ることのないように、この修行をされたのです。イエスは神様に愛されているので、いつも神様（イエス）に支えられているのです。

【ガリラヤで伝道始める】（4：12－17）

イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

「ゼブルンとナフタリの地、

湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、

異邦人のガリラヤ

暗闇に住む民は大きな光を見、

死の陰の地に住む者に光が差し込んだ。」

その時から、イエスは「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。（4：12－17）

イエスはガリラヤ地方の町、カファルナウムに住まれ宣教を始められました。それは、旧約聖書の預言者イザヤが言ったことが実現するためと、エルサレムで洗礼者ヨハネが逮捕されたので、一時避難をされるためでした。イエスは「悔い改めよ。天の国が近づいた」と宣教を始められたのです。

これは、終末が間もなくやって来るから、自分で顧みて悔い改めなさいという意味の言葉です。当時のは、やがて来る終末と言う「世界の終わり」そして、その時に一人ずつ善か悪かに振り分けられる「最後の審判」を受けると信じられていました。イエスの伝道は、まず終末が来ることから始まっているのです。

ヨハネ逮捕のあとに、「天の国が近づいた」と語るイエスを、カファルナウムの住民はどのように聞いたのでしょうか。新しい預言者が来たか「ヨハネの弟子」だと思ったのでしょうか。しかし、イエスの語る天の国と、ヨハネが語る厳しい言葉は、あまりにも隔たっていました。

*当時のユダヤ人はユダヤ教の聖書（旧約聖書）に書かれている言葉が、預言者たちのことばであるから、いつか実現すると信じていました。それで、このように、聖書には預言者の予告が実現したと、旧約聖書を引用をすることが大事なのです。（もちろん、この時代には新約聖書はまだありません）

*聖書には預言者が登場しますが、これは「神の言葉を預かる者」という意味で、未来を言い当てる「予言」とは全く違うものです。

【四人の漁師を弟子にする】（4：18－22）

イエスはガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。この二人もすぐに、舟と父親を残してイエスに従った。(4:18-22)

二組の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ。イエスはこの四人の漁師をあっという間に弟子になさいました。説教を聞いたわけではなく、声をかけると付いてくるというのは、神様が選ばれた弟子たちだったからでしょう。「人間をとる漁師にしよう」とイエスは言われましたが、今、その漁師は四人の人間を獲得したイエス自身と言えるでしょう。その特徴は、その場で従ったこと、持ち物も持たず、旅の支度もせず、ついて行ったことです。「悔い改めよ、天の国は近づいた」という言葉は、急いでイエスについていくほど、切羽詰まった表現なのかも知れません。私たち日本人は、この「終末」という感覚がないので分りづらいですね。

【おびただしい病人をいやす】(4:23-25)

イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへいろいろな病気や悲しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。(4:23-25)

イエスは四人の弟子たちとガリラヤ地方を回って教え、また、病気や患いをいやされたと記されています。初めての奇蹟を行なわれたのです。その評判は瞬く間に広がり、大勢の群衆がイエスに従ったのです。これを読んで、どう思われますか。私は、イエスが人々を次々治していくということが、信じられないのです。なぜなら、イエスはいやすために天から来られたのではないと思うからです。本文の中にある「いろいろな病気や悲しみに悩むもの」は、確かにイエスに話を聞いてもらい、勇気づけてもらったでしょう。しかし、イエスのいない地方、諸国では、そのような奇蹟が行なわれていないのですから、この地方の人ばかり癒されたのでは、神様があまりに不公平だと思うからです。また、作家の遠藤周作が書いている「無力なるイエス」(イエスは奇蹟を行なわず、苦しむ人のそばにいて手当をしたり、手を握ったりしただけではないかという遠藤周作独自の考え方)の方が、心に響くのです。

聖書は疑問を持っていいのです。キリスト教徒は、聖書に取り組んで喧嘩しているようなものかもしれません。むしろ、年数とともに聖書には疑問がどんどん増えて行くような気がします。もちろん、キリスト教が愛にあふれていることは私も否定しません。

5章

5章

【山上の説教（五章一七章）を始める】（5：1－11）

イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、教えられた。
（5：1－11）

このマタイ伝で、一番代表的な部分「山上の説教」です。私たちも、草の上に座ってイエスの山上の説教に耳を傾けましょう。

【幸い】（5：3－12）

「心の貧しい人々は幸いである、
天の国はその人たちの者である。
悲しむ人々は幸いである、
その人たちは慰められる。
柔和な人々は、幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。
義に飢え渴く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。
憐れみ深い人々は、幸いである、
その人は憐れみを受ける。
心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。
平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
義のために迫害される人々は、幸いである。
天の国はその人たちの者である。
「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことで悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちにも、同じように迫害されたのである。」（5：3－12）

この内容は、かつてあったQ資料と呼ばれるイエスの語録集（現在は失われている）を中心に、各地で言い伝えられて来た御言葉などを合わせたものと言われています。1項目ずつ読んで行きましょう。

「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちの者である。」
心の貧しい人々とは、どんな人をさすのか、冒頭から戸惑ってしまいます。これは、神様の前に出たときの状態を言っているのです。神様の前に出たときに、自分はお金もない、物質的な財産もない、物乞い同然であると自分をさらけ出す人で、なおかつ、神がすべてなのだと思った人のことなのです。ここで、注意しなければいけないのは「心の」貧しい人であって、たとえ物質的に貧しくてみ前に出たとしても、心が神に向いていなければ、幸いを得ることはできないのです。

「悲しむ人々は幸いである、その人たちは慰められる。」
悲しむというの、いろいろありますが、原語では強い悲しみや嘆きを指す言葉が使われています。死者に対する悲しみ、また人の悲しみ、罪に対する嘆きなどに使われる言葉です。そのような人は天の国に優しく迎えられます。

「柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け受け継ぐ。」
柔和な人が幸いであるというのは、素直に受け止めることができます。
ここでの「柔和な人」は、最初に出て来た「心の貧しい人」と同じ意味ととってもいいでしょう。神の国で謙虚であることがこの二つの共通点でしょう。「地を受け継ぐ」とは、繁栄するという意味です。

「義に飢え渴く人々は、幸いである。その人たちは満たされる。」
義に飢え渴くとは、霊的の必要（で神様を求めたり（神の前で正しいこと）願望を現す強い現実です。それはまた、「義」である神様に従う人との意味もある。その人たちは、天の国で満たされると語られています。

「憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。」
これまでイエスは神と人との関係を消極的、受動的面で語って来ましたが、この節から積極的、能動的面から語られています。憐れみ深いとは主について用いられている言葉です。しかし、人間の隣人との関係についても、言われています。その人は、天の国で憐れみを受けるように、この世でも憐れみを受けるでしょう。

「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。」
清いは、「混ざり物のない」「水で薄められていない」と言う言葉で書かれています。一心にひたすら神をもと

めること、心情の座が分裂せず、神に誠実であることが、清いということです。「神を見る」とは、天上で神と対面するというのではなく、神と一体であるイエスに出会うということです。神とイエスの関係というのは、分かりにくいと思います。あるときは一体であり、あるときは父子の関係であり、一体神とイエスは一緒なのか別なのかとお思いでしょう。私自身、説明するにはどうしたらいいかと、頭を抱えています。でも、これが分からなくても、神の、そしてイエスの人間への愛を感じていただけたら、他の聖書の箇所も読んでいけると思います。

「平和を実現する人は幸いである。その人たちは、神の子と呼ばれる。」
平和とは、ユダヤ人にとって「シャローム」と言って、人間の最高の幸福を造り出すすべての者と理解され、この「平和」の根源は神にあります。神から送られたイエスは「平和を作る人」となられました。しかし、人間の歴史は、この世の平和がいかに不安定かを見せてくれます。そこで平和を実現しようと人たちは、天の国で神の子と呼ばれると記されているのです。

「義のために迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものである。」
当時、キリスト教会にとって最もなじみ深い言葉の一つは「迫害」でした。神を選び、その神に生きたゆえの迫害の血は、キリスト教会の初めからずっと存在したのです。イエスの死も、またそうであり、イエスは死後迫害が続くことを語っていらっしやいます。しかし、苦しんだ人たちは、天の国へ上げられるのです。「義のために迫害される人々」は最初の「心の貧しい人々」と本質的には同じだと言えるでしょう。しかし、誤っても、殉教をするような強い人間しか天には昇れないと思っははいけません。

「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことで悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちにも、同じように迫害されたのである。」（５：３－１２）

改めて迫害について語られています。違うのは、その迫害を受ける中で、「喜びなさい。大いに喜びなさい」と書かれていることです。ここでの語句は継続的にそうしなさいと言う命令調が使われています。迫害を受けて喜びなさいと言われても、何のことだかわかりませんよね。この時期は、間もなく終末がおとずれ、新しい世（神の世）に行くのだと信じられていました。だから、迫害を受けても、喜べる日がすぐにやって来るのだと考えられたのかもしれませんが。終末という考え方がない日本では理解しがたい面がここにもあります。

【地の塩、世の光】（５：１３－１６）

「あなたがたは地の塩である。だか、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味がつけられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父を崇めるようになるためである。」（５：１３－１６）

イエスの話を聞くのは、ほとんどが苦しい暮らしをしている人だったと言われています。社会的にも認められない人が多かったようです。また、徹底的な男尊女卑で、女性や子どもは、人数を数えるとき、無視されるほどでした。しかし、イエスは、「あなたがたは地の塩である。」と一人一人の価値を語られました。塩がなかったら困ります。イエスを信じることで、一人一人が価値のある者となるのです。
「あなたがたは世の光である。」ともおっしゃっています。すでに信仰によって輝いていても、世の光を升の下に置いては、真っ暗なままです。それを燭台の上に置くときに、みんな明るく照らされるのです。地の塩として、またと世の光として、この世にあるとき、それは、誰かの役に立っているのです。お互いのため、そして神様のために、地の塩、世の光であり続けることをイエスは教えておいでなのです。

【律法について】（５：１７－２０）

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためでなく、完成するためである。はっきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消え失せるまで、律法の文字から一点一画も消え失せることはない。だから、これらのもっとも小さい掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は天の国でもっとも小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするようにと人に教える者は、天の国でもっとも大いなる者と呼ばれる。言っておくが、あなたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」（５：１７－２０）

この部分は、イエスの到来は神の国の到来であり、新しい神の支配の新時代が訪れることを念頭に語っておられるのです。これ以後の、旧約聖書の教えを説くイエスの話の序論と言えるのがこの部分です。イエスは決して律法や預言者を無用にするために来たのではなく、もう一度正しく理解することによって、律法が、今と一文字も変わらぬまま、神の国の到来に備えることができると言われているのです。

【腹を立ててはならない】（５：２１－２６）

「あなたがたも聞いている通り、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。

しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』という者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』という者は、火の地獄に投げ込まれる。だから、あなたが祭壇に供え物を捧げようとして、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を捧げなさい。あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるに違いない。はっきり言うておく。最後のクアドランスを返すまで、決してそこからでることはできない。」（5：21-26）

腹を立てず、きちんと話をし、隣人と関係をよく保っておくことが教えられています。隣人と良好な関係を保つことは、大切なことです。何か反感をかうことやいさかきがあれば、たとえ神への供え物を捧げる大事なときでさえ、一時中断して、仲直りをするを教えられています。

* 1クアドランス＝ローマの青銅貨sで、1デナリオンの64分の一。
1デナリオンは、当時の一日の日当に相当する。「最後の1円まで」というニュアンスではないかと思われる。

【姦淫してはならない】（5：27-30）

「あなたがたも聞いている通り、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。もし、右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に堕ちない方がましである。」（5：27-30）

この当時、姦淫を禁じた旧約聖書の戒律とそのユダヤ教に置ける適用は、きわめて男性中心でした。姦淫を犯した男（女も）は死刑に処されることになっていますが、これは相手の女性が人妻（ないしは婚約中の女性）の場合に限られていました。人妻はその夫のものであり、姦淫は夫の権利を侵害してその結婚関係を破壊することになるというのです。従って相手が独身女性とか未成年、非ユダヤ教徒の場合には「姦淫」にはならなかったのです。それらのケースは売春とか淫行として禁じられていました。また、「姦淫」とは、既に結婚している女性との肉体関係なので、ほかの夫婦の誓約の中に割り込む罪で、自らの制約に対する背信行為、裏切りであったのです。つまり、道徳的な意味ではなく、律法（神様との約束）に背いたという考え方をします。イエスの言葉は今までの教師たちとは違っていると、人々は思ったのではないのでしょうか。イエスは、女性も一人の人間であるという立場に立っておられました。何度尾いますが、極端な男尊女卑で、子どもと女性は男性の物であり、数にすら入らない扱だったのです。姦淫の話から、いきなり目をえぐり出すとか、手を切ってしまうと激しい言葉が続きます。その前にも、淫らな思いで他人の妻を見るだけで姦淫だということを言われています。ここを読んで聖書について行けないと思う男性は多いのではないのでしょうか。イエスは、姦淫に関して、元々の律法をちゃんと守らずにいる人たちに、地獄という言葉で、生き方を改めるよう訴えられたのです。

【離縁してはならない】（5：31-32）

「『妻を離縁する者は、離縁状を渡せ』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。不法な結婚でもないのに妻を離縁する者はだれでも、その女に姦通の罪を犯せることになる。離縁された女を妻にする者も、姦通の罪を犯すことになる」（5：31-32）

男性中心であった古代社会において、この規定は本来女性を保護する意図を持って作られていました。実際には、その意図はいかせず、離縁できるのは、夫の権利であって、妻から申し立てることはできなかったのです。離縁については、ここを読むと、離縁は神が二人を結んだことゆえ、あってはならないことなのだといえは思われているようです。

私事ですが、私はいわゆるバツイチです。ここを読むと心がたつくなります。しかし、私たちは装ってイエスの前に出ても意味がないのです。このままの私でイエスと対することしか出来ないのです。

【誓ってはならない】（5：33-37）

「また、あなたがたも聞いている通り、昔の人は『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならないそこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは大王の都である。また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。あなたがたは『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは悪い者からであるのである。」（5：33-37）

昔の人、つまり今までの教えでは、「偽りの誓いを立てるな。主に誓ったことは、必ず果たせ」と命じられていますが、イエスは、誓いについてもっと激しく「一切の誓いを立ててはならない。」と教えていらっしゃいます。これは「むやみに誓いを口にすると、みだりに聖なる方の名を呼ぶな」と旧約聖書で言われているからです。誓いを立てる以前に、相手への言葉すべてが誠実でないといけません。私たちは、明確な言葉「はい（然り）」「いいえ（否）」という言葉で明確に話さなければならないのです。そして、みだりに神様の名前を口

に出して誓わないようにとされています。さらに、人間は、未来のことをしらないのだから、誓うことによって、神を侵害してはならないことが教えられています。人のすべては、神のもとにあるのです。

【復讐してはならない】（５：３８－４２）

「あなたがたも聞いている通り、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい。誰かが、一ミリオン行くように強いなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」（５：３８－４２）

冒頭にある「目には目を、歯には歯を」は、よく聞かれる言葉ですが、これは、復讐者の気持ちをなだめ、復讐の程度を定めたユダヤ教の教えです。つまり、自分がやられた以上のことを禁じているのです。それに対して、イエスは、右の頬を打つなら左の頬も向けなさいと教えられます。これを実行するには、頬を打たれても毅然としていることが要求されます。イエスの主張は、「無抵抗」ということではないかと考えます。相手が求める以上に与え、その人に背を向けないことです。相手に誠実に対するということです。正直、かなり難しいことだと思います。しかし、イエスはやさしいことに罰則を課したりしません。

* 1ミリオン=約1480メートル。

【敵を愛しなさい】（５：４３－４８）

「あなたがたも聞いている通り、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害するもののために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるだろうか。異邦人さえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」（５：４３－４８）

「あなたがたも完全な者となりなさい。」この言葉を読むと、そんなことできるわけがない。そんなことを求める厳しいキリスト教など、自分には無理だと思います。しかも、その前に「天の父が完全であられるように」と書いてあります。神様と同じぐらい完全になるなんて、できるわけはありません。これは、イエスが常に神を仰ぎ見ること、少しでも完全に近づけるように、神を愛し、その愛を周りの人にも注ぐようにと教えているのです。天の神は「悪人にも善人にも太陽をのぼらせ」とあるように、すべての人間に同じように恵みを下さいます。自分をよく思っている人を良く思ったところで、それは当たり前です。気分よく実行できることです。完全になりなさい。つまり、気に入らない人でも、自分を憎んでいる敵でも、すべての人に愛をそそぐこと、「愛」とはそこまでしなければ「愛」といえないのだと、イエスは教えているのです。

6章

6章

【施しをするときには】（6：1－4）

「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。施すときには、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」（6：1－4）

施しとは、困っている人や団体に、お金を寄付したり、物で支援したりすることです。その行為は褒められることですが、自分の施しをこれ見よがしにして他人に見せびらかすのでは、人間の目から見れば結果は同じですが、神様の目から見ると違うのだとイエスは教えておられます。つまり、これは隠れて施すべきで、右の手がすることを左の手に「知らせてはならない」と本文にあるように、イエスは徹底的に隠れて施すことを教えておられるのです。人に褒められることも、神からの具体的なご褒美を計算に入れないときに、人は神との正しい交わりに入ると語られています。

現代のことですがある青年が、祖母から帽子をもらいました。ところが彼はかぶろうとしません。理由を聞くと、それはある有名な慈善団体のロゴが入った物でした。「私は寄付をしていますと表明しながらかぶって歩くことは出来ない」と彼は言ったのでした。

【祈るときには】（6：5－15）

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときには、奥まった自分の部屋に入って、戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと宣べてはならない。異邦人は、言葉数が多いければ、聞き入れられると思いついでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、
御名が崇められますように。
御国が来ますように。
御心が行なわれますように、
天に置けるように地の上にも
わたしたちに必要な糧を今日与えてください。
わたしたちの負い目を赦してください。
わたしも自分に負い目がある人を
赦しましたように。
わたしたちを誘惑に遭わせず、
悪い者から救ってください』

もし人の過ちを赦すなら、あなたたちの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちもお許しにならない。」（6：5－15）

ここで書かれている『』で囲まれた部分は「主の祈り」と呼んで、今もずっと教会では祈られているものです。イエスから直接、私たちに与えられた祈りとして、大変大切にされています。カトリックの方が、ロザリオをくって祈られるのも、この「主の祈り」です。

イエスは、この祈りの始めの、日本語では「天におられる私たちの父よ、」と言われているところを、実際に教えられた時は「父よ」というひとりで神様と呼ばれたのではなかったかと言われている。この「父よ」という言葉も、小さな子どもがお父さんと呼ぶときに使った「アッパ（または、アッバ）」という言葉が使われています。これは、イエスが日常語として使っておられたアラム語です。このことを話題にするのは、当時はユダヤ教の祈りは、様々な神の呼称をすべて唱えなければいけなかったからです。そこへ、イエスは「パパ」「お父ちゃん」というようなひとりで、主であり、父であり、母である（本来神には性別がありません。）と分かる呼びかけをされたのです。これは、画期的なことでした。神は畏怖すべき存在であるとともに、身近な存在でもあることを示されたのです。神があなたを愛しているとイエスは言いたかったのです。

さて、「主の祈り」本文ですが、最初は、天の父に語りかけています。そして、地上の人々にも天の国のようなときが来るようにと祈っています。続いて、「私たちの必要な糧を今日与えてください」とあります。「必要な糧」とは、食べ物や飲み物のことでもあり、その日の心を励ます聖書の言葉という意味でもあります。そして、「私たちの負い目を赦してください」という言葉には「私たちに自分の負い目のある人を赦しましたように」となっています。ここは、「赦してください」のあとに、「私たちも・・・赦しましたように」と、過去形で書かれています。まず、祈る前に心にかかることがあれば、まず、それを解決し、祈りを始めるように言われているのです。そして、最後は「誘惑に合わせず、悪い者から救ってください。」となっています。自分が弱く、誘惑にあうような者であるという謙虚な気持ちの祈りだと思えます。この簡潔な祈りを私たちが祈るときのために

、イエス自らが教えられ、二千年間も多くの人に祈り続けられているのです。

*「主の祈り」も、日本語の変化の中で、何度か新しく書き換えられてきました。今、ご紹介したものと違う言葉の「主の祈り」を使用されている教会や集会もあります。ちなみに私は、文語で祈るのが好きです。

【断食するときには】（6：16－18）

「断食するときには、あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない。偽善者は断食しているのを人に見てもらおうと、顔を見苦しくする。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。あなたは断食するとき、頭に油をつけ、顔を洗いなさい。それは、あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。そうすれば、隠れたところを見ておられるあなたの父が報いてくださる。」（6：16－18）

断食を今もされる方がいるかどうかは、わかりません。ただ、これは前に出て来た「施し」とおなじで、自分の宗教心を見せるために、わざとやつれた顔で知り合いにあったり、いかにも食べていないという表情をすることをやめるようにと、勧められています。人に分からなくても、神様はすべてご存知なのです。宗教的なことを、人間的に熱心な信徒と見られるためにやるのは、愚かなことなのです。

【天に富を積みなさい】（6：19－21）

「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、錆び付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗みだしたりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うこともなく、錆び付くこともなく、また、盗人が忍び込みことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」（6：19－21）

人間が富を蓄えることは、そこに不正などがなければ、決して悪いことではないと私は思います。イエス様は、富を地上ではなく、天上に蓄えるように教えておられます。天上に積む富とはなんでしょうか。人を愛することでしょうか。その天の富のところに、あなたの心もおっしゃっています。隣人を愛する心があれば、天の富を積み、そこに心があるようにできると教えられています。

【体のともし火は目】（6：22－23）

「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」（6：22－23）

ここでは、澄んでいる目と濁っている目が、書かれています。目が澄んでいるというのは、精神的に健全であるということを示すのでしょうか。また、愛に満たされているときに澄んでいる目になるのかもしれませんが。全身の明るさが消えて濁っていると考えるとき、この目は貪欲への警戒をしています。「欲」は、それだけでは悪いことはありません。しかし、欲に目がくらんで突っ走りすぎ、目が濁ってしまったら、気がついたときには、家族もいない、友人もいない、誰も相手にしてくれない闇があなたの体を包んでいることになるでしょう。

【神と富】（6：24）

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」（6：24）

ここでは、神と富を同時に主人にすることはできないと書かれています。前にも書きましたが、富そのものは、決して悪いものではありません。ただ、自分の人生の中心に何を置くかで、大きく変わって来るのです。私は「教会にたくさん献金をして、神様に喜んでもらうために、一生懸命商売をしている」と語った人を知っています。その人は、人の目から見れば、商売熱心な人と言うだけかもしれませんが。しかし、神を中心に、地上で与えられた仕事を一生懸命やっておられたのです。今は天国で安らかな毎日を送っておられると思います。もちろん、その方は神に仕えておられたのです。

【思い悩むな】（6：25－34）

「だから、言うておく、自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また、自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種を蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値ある者ではないか。あなたがたのうちだれか、思い悩んだからと言って、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つか、注意して見なさい、働きもせず、糸もしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花一つほどにも着飾ってはいなかった。今日生えて、明日には炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ、だから『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なこと

をご存知である。なによりもまず、神の国と神の義をもとめなさい。そうすれば、これらの者はみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」（6：25－34）

思い悩むことをすべて捨てて、神様を全面的に信頼して生きることを勧めている文章です。自分の日々の生活を毎日毎日思い悩んで生きてしまうのが普通の人間ではないでしょうか。しかし、イエスは、野の花がどう育つかは神様の力であり、たった数日しか咲かず、炉に投げ込まれてしまう野の花にさえ、神様は可憐に装ってくださる。栄華をきわめたソロモン王（旧約聖書に登場する）でさえ、花一つ着飾らなかったのです。必要な物はみな、神様がご存知で与えてくださるのです。明日は何を着ようか、来年の受験は大丈夫だろうか、いつまでもこの病気が治らなかったらどうしようかとなやまなくても大丈夫なのです。神様を信じて、今日を一生懸命生きることが大切なのですと教えておられます。それでも、どうしても私たちは、先のことをいろいろ思い煩ってしまいますね。

7章

7章

【人を裁くな】（7：1-6）

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは自分の裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気がつかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』とどうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。神聖な物を犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたにかみついてくるだろう」（7：1-6）

この話は、裁くということを話題にしています。「自分の量る秤で量り与えられる」とは、量り売りで食べ物などを買う際に、実際より小さい枴に入れて量り、お客からたくさんのお金をとって得をしようとすることをイメージしています。その小さい枴を使った人は、今度は自分が、別の商人から小さい枴で量ったものを買うことになるのです。しかし、これは損得の教えではありません。自分がしたことが自分に帰ってくるということです。目の中のおが屑の話は、人のことよりも、まず自分を見つめること。そして、相手の欠点を指摘する前に、もしかしたら、自分の目にある丸太が、相手のおが屑を作っているかもしれないのです。それに気づいてはじめて「あなたの目からおが屑を取らせてください。」という行動ができ、また、お互いに積極的に赦し合うことをおっしゃっています。

「神聖な物を犬に与えてはならず」

神聖な物とは、通常、神殿の供え物の肉を示すと解釈されています。これは、祭司のみが食するよう定められている物です。

「豚」

豚と犬はユダヤ教ではともに汚れた動物であり、祭司たちが律法を知らない人を「犬」と呼んだり、異邦人を「豚」と罵った例などがあります。ここでは、私たちが親しみのある「豚に真珠」が描かれています。こんなところに出典があったのですね。

【求めなさい】（7：7-12）

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、捜す者は見つけ、門を叩く者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子どもに、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供にはよい物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物を下さるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言である。」（7：7-12）

これからの三つの項「求めなさい」「探しなさい」「門をたたきなさい」は、存在は知られているが、今は失われているイエスの語録集の中から引用されたと考えられています。この三つは神に向かって真剣に祈ることを強く進める言葉になっています。

「（あなたが）求めなさい。そうすれば、（神が）与えられる。」最初の文章はそのように補足して読むことができます。それに続く文章もそうです。神様（父）は、私たちを愛してくださる神だから、「パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。」と続いているのは、そのためです。父はその子がどんなにできの悪い子であっても、求めている物を与えるのです。神様とはそういう存在だから、私では何もできないなどと思わないで、私たちは大胆に神に向かって、求め、探し、門を叩いていいのです。神様に助けてもらわなければ、私たちが完全になることなどできないのです。

「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたもしなさい。これこそ律法と預言である」は、キリスト教の黄金律です。有名な言葉なのでどこかで聞いたことがあるかもしれませんね。私は、洗礼を受けたとき、恩師からこの聖句を書いた祝電をもらいました。隣人を、自分のように愛することで、ただ要求するのではなく、自分からそのことをすること（愛すること）が教えられています。ひとりで説明するなら、「黄金律は、愛です」キリスト教のすべての根底に、言葉にはない場合も、黄金律があるのです。黄金律は全律法の「かなめ」であり、その完成です。

ここからは、山上の説教の結びに入っていきます。

【狭い門】（7：13-14）

「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道を広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」（7：13-14）

これまでの話は、どれもみな、様々な道で二通りの方向を示しています。片方は命への、他は滅びへの道であり、第三の道は存在しません。この話を聞いて、終末の裁きを考慮に入れて、どちらの道に行くか、ここでよく見極めなさい、そして選んだ道がすぐに見えなくても、少ないが、見いだす者はいると言われているのです。（もちろん、今すぐあなたも選んでくださいなんて言いませんから安心してください）

【実によって木を知る】（7：15－20）

「偽善者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとしてあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、アザミからいちじくが取れるだろうか。すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。よい実を結ばない木はみな切り倒されて火に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」（7：15－20）

正しい道を目指していても、偽善者や偽預言者が前に立ちはだかることもあります。彼らは、羊の皮をかぶった獐猛な狼です。それを知るには、彼らがどのような実を結んでいるか見極める必要があります。

そういえば、私事ですが、園芸をするとき、雑草というのは、こちらが植える花と似た葉っぱを持つのが多く生えて来ることが多いようです。全部がそうではありませんが、そのような傾向があるのです。また、話がそれますが、私はキリスト教主義の学校へ行ったのですが、そういう子は、学校と似たキリスト教系の新宗教に誘われて入信してしまう傾向があるそうです。

さあ、話を戻しましょう。羊の皮をかぶった狼や、荒々しく、いかにも頼りがいのある偽預言者たちが出て来たら、その実をしっかり見分けるようにしなければなりません。これは、私たちにとっての警告なのです。

【あなたたちのことは知らない】（7：21－23）

「わたしに向かって、「主よ、主よ」という者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。かの日には大勢の者がわたしに「主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇蹟をいろいろ行なったではありませんか」というのであろう。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働くものども、わたしから離れ去れ』」（7：21－23）

イエスの激しい言葉です。「あなたたちのことは全然知らない。不法を働くものども、私から離れ去れ」かつて、親しく話をし、旅を共にしたかもしれない人でさえ、天の神様の御心を行なわなければ、イエスに「知らない」と言われてしまうのです。「知らない」は、「破門の宣言」の言葉としても使われていたそうです。天の国に入る時は、イエスの話を聞いただけでは意味がないのです。御心を行なったか、つまり実際に行動したかどうか問われるのです。

【家と土台】（7：24－28）

「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。大雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行なわない者は、皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」
イエスがこれらのことを語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。（7：24－28）

信じて実行する人とそうでない人を家を建てる場所のたとえによって語っておられます。岩を土台にした人と、砂の上に建てた人。災害がやって来るとその明暗はくっきりと別れます。そういえば童話の「三匹のこぶた」って、これに似た話でしたね。

8章

8章

【重い皮膚病を患っている人をいやす】（8：1-4）

イエスが山を降りられると、大勢の群衆が従った。すると、一人の重い皮膚病を患っている人がイエスに近寄り、ひれ伏して、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち、重い皮膚病は清くなった。イエスはその人に言われた。「だれにも話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めた供え物を捧げて、人々に証明しなさい。」（8：1-4）

「主よ、御心ならば」とイエスに懇願した人がいやされました。「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と、イエスの力に絶対の信頼をおいて、願ったのです。「もし出来るなら治してください」と言っていたら癒されなかったでしょう。重い皮膚病を患っている人は、隔離されて周りの人々と一緒に暮らすこともできず、本当につらい日々を送っていました。イエスにいやされて、この人は他の誰にも話さずいられたでしょうか。喜びのために話さずにはいらなかったのではないのでしょうか。

【百人隊長の僕をいやす】（8：5-13）

さて、イエスがカファルナウムに入られると、ひとりの百人隊長が近づいて来て懇願し、「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んでいて、ひどく苦しんでいます」と言った。そこで、イエスは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、その通りにします。」イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきり言うておく、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。言うておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブとともに宴会の席に着く。だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」そして、百人隊長に言われた。「帰りなさい。あなたの信じた通りになるように。」ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。（8：5-13）

百人隊長がイエスに部下の病気のことを話します。イエスは、「行って、いやしてあげよう」と言われたのに、この人は、「ひと言おっしゃってください」それで十分なのですと軍隊の指揮を引き合いに出してイエスが行くに及ばないことを話しました。イエスは感心されて、この人の部下をその場でいやし、彼のすばらしい信仰をことを褒められたのです。

私なら、そばに来て治してやってくれると言うならありがたいと思って来てもらうのではないのでしょうか。ここにおいて、本当に治せるのかという疑念を起こしかねません。凛々しくすばらしい隊長ですね。

アブラハム・イサク・ヤコブとの宴会に出れるのは、このように信じた人だけエス。御国（天）の子であっても、これほど信じる心がなければ、外の暗闇に出されてしまうのです。

【多くの病人をいやす】（8：14-17）

イエスはペトロの家に行き、その姑が熱を出して寝込んでいるのを御覧になった。イエスはその手を触れられると、熱は去り、姑は起き上がってイエスをもてなした。夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢つれて来た。イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った。」（8：14-17）

たくさんの病人をいやしたイエスに、旧約聖書のイザヤ書の言葉が添えられています。しかし、これを読むと、「彼」は患いを負い、病を担ったとなっており、病気は決してどこかに飛んで行ったのではなく、「彼」（イエスのこと）が今度はそれを負ったのではないかと考えてしまいます。正しい解釈ではないかもしれませんが、イエスはそうやって、人々の病気を自分の肩に次々と負って歩かれたのかもしれない。

【弟子の覚悟】（8：18-22）

イエス、は自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕するところもない。」ほかに、弟子のひとりがイエスに「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」（8：18-22）

イエスに従って行く道の厳しさが語られているところです。「どこへでも従って参ります」という律法学者の言葉に対して、イエスは、自分の道は、安心して眠るところもないような厳しい道だとおっしゃっています。また、弟子の一人が父親を葬りに行かせてほしいと言ってきました。イエスは、それを禁止し、死んでいる者たちにまかせなさいと言われます。なぜなら、イエスの行く道を共に行くならば、血縁を超える決断をしなければならないと教えておられるのです。しかし、これを読んでキリスト教は厳しいからイヤだと思わないでください。この時代は、十字架を前にして、敵に囲まれている状況です。人々が幸せになることこそ、キリスト教の目的であり、イエス（神様）の願いなのです。

【嵐を静める】（８：２３－２７）

イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。弟子たちは近寄って起こし、「主よ、お助けください。おぼれそうです」と言った。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖をお叱りになると、すっかり凪になった。人々は驚いて。「一体、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえ従うではないか」と言った。（８：２３－２７）

ここでは、イエスが風や湖を自在に操られる存在（神の子）であるということとそれをまだ理解していない弟子たちの姿が書かれています。弟子たちは、イエスの奇蹟を間近で見ながら「一体、この方はどういう方なのだろう。」とイエスが神の子であることを分ることができないのです。しかし、イエスは、そのような弟子たちに説明することもなく、理解できないまま、一緒に行動されています。

【悪霊に取り付かれたガダラの人をいやす】 （８：２８－３４）

イエスが向こう岸のガダラ人の地方に着かれると、悪霊に取り付かれた者が二人、墓場から出てイエスのところにやって来た。二人は非常に凶暴で、だれもその周りの道を通れないほどであった。突然、彼らは叫んだ。「神の子、構わないでくれ。まだ、その時ではないのにここに来て、我々を追い出すのなら、あの豚の中にやってくれ」と願った。イエスが「行け」と言われると、悪霊どもは二人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れはみな崖を下って湖になだれ込み、水の中で死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町に行き、悪霊に取り付かれた者のことなど一切知らせた。すると町中の者がイエスに会おうとしてやって来た。そして、イエスを見ると、この地方から出て行ってもらいたいと言った。（８：２８－３４）

向こう岸のガダラ人（異邦人）の地方へ行かれると、イエスは悪霊に取り付かれた二人の人に出会いました。彼らは「神の子、構わないでくれ」とイエスに話しかけます。そして、追い出すなら豚に移させてくれと言います。悪霊が豚に入ると、豚は群れごと崖を下って湖に飛び込んで死んでしまいます。そのようなイエスを見て、この地方の人は、あまりに大きな力に恐怖を感じ、この地方から出て行ってくれと頼んだのです。ここで、イエスを神の子だと分かっているのは悪霊だけです。ガダラ人はイエスの力に驚き恐れています。これだけのことを見ているのに、イエスの弟子は、イエスを神の子だとまだ分かっていないのでしょうか。ただ驚いて見ていたのか、発言をしていません。

【中風の人をいやす】（9：1－8）

イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰って来られた。すると、人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れて来た。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」と言われた。ところが、律法学者の中に、「この男は神を冒瀆している」と思う者がいた。イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。「なぜ、心の中で悪いことを考えているのか。『あなたの罪は赦される』というのと、『起きて歩け』というのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。そして、中風の人に、「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」と言われた。その人は起き上がり、家に帰って行った。群衆はこれを見て恐ろしくなり、人間にこれほどの権威をゆだねられた神を賛美した。（9：1－8）

イエスのところに、床に寝かせたまま担がれた中風の人 came。イエスは、ここまで担いで来た人々の「きっと、イエスなら治してくれる」というまっすぐな信仰をみて、この人をいやしました。イエスは「あなたの罪は赦される」とおっしゃったのです。この時代、病気は罪を犯したせいだと言われていました。ところがその場に居合わせた律法学者が心の中で「神を冒瀆している」と思いました。罪を赦すことができるのは、神だけだからです。イエスは、律法学者の心を見抜かれました。「あなたの罪が赦される」というのと「起きて歩け」というのと、どちらが易しいかと言われ、御自分の権威をしめして、中風の人に、今度は「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」と言われました。その人は、その通りにしました。ここでも、周りにいた人々は、イエスに権威をゆだねられた神を賛美しながらも、イエスの力を恐ろしいと思ったのです。

【マタイを弟子にする】（9：9－13）

イエスはそこを立ち、通りがかりにマタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。イエスはその家で食事をしておられた時のことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」といった。イエスはこれ聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か。行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。（9：9－13）

このころは、収税所で通行税を取る収税人は、とても嫌われていました。日常的に不正が行われて、私服を肥やしている人が多かったからです。また、異邦人は汚れていると思われていたので、異邦人に接することの多い徴税人は罪人のように嫌われていました。イエスは、マタイという収税人を弟子にされ、その家で徴税人や罪人も交えて食事をなさっていました。マタイは言われた通り何も持たずにイエスに従いました。

それを見たファリサイ派の人々は、なぜそんなことをするのかと尋ねました。イエスの「私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」周りの人が嘲ろうと、人の苦しみに寄り添われたのです。イエスの生き方がここに示されています。

【断食についての問答】（9：14－17）

そのころ、ヨハネの弟子たちがイエスのところに来て、「私たちとファリサイ派の人々はよく断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか」と言った。イエスは言われた。「花婿と一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。そのとき、彼らは断食することになる。だれも、織りたての布から布切れを取って、古い服に継を当てたりはしない。新しい布切れが服を引き裂き、破れはいつそうひどくなるかだ。新しいぶどう酒を古い革袋に入れる者はいない。そんなことをすれば、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出て、革袋もダメになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れる者だ。そうすれば、両方とも長持ちする。」（9：14－17）

ファリサイ派にとって「いかがわしい人々」と食事をするイエスに、今度は「なぜ断食しないのか」と聞いてきました。彼らにとって断食はとても大切な宗教的功績でした。それは、律法を守れば、天国に行けると信じて生活していたからです。でも、今は既にメシアを待つ時代に入っていました。そのためにイエスは来たのです。イエスは、御自分を花婿にたとえられ、花婿がいるときには食事をし、花婿が取り去られるときには断食をすることになる、とおっしゃいました。

それから二つのたとえを話されました。古い布に新しい布を継いだり、古い革袋に新しいぶどう酒をすればだめになるという話です。この意味は、イエス・キリストの福音は、全く新しい生活をするようになる。古いものに何かをプラスするのではないと言われているのです。

【指導者の娘とイエスの服に触れる女】（9：18－26）

イエスはこのようなことを話しておられると、ある指導者がそばに来て、ひれ伏して言った。「わたしの娘が立った今死にました。でも、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、生き返るでしょう。」そこで、イエスは立ち上がり、彼について行かれた。弟子たちも一緒だった。するとそこへ十二年間も患って出血が続いている女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れた。「このかたの服に触れさえすれば治してもらえる」と思ったからである。イエスは振り向いて、彼女を見ながら言われた。「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った。」そのとき、彼女は治った。イエスは指導者の家に行き、笛を吹く者たちや騒いでいる群衆を御覧になって、言われた。「あちらへ行きなさい。少女は死んだのではない。眠っているのだ。」人々はイエスをあざ笑った。群衆を外に出すと、イエスは家の中に入り、少女の手をお取りになった。すると、少女は起き上がった。この噂はその地方一体に広まった。(9:18-26)

ここでは、二つの奇蹟が描かれています。最初の訴えに、その人の家に行こうとした途中に、二つ目の奇蹟が起きています。時間に沿って読んでいきましょう。

「ある指導者」がイエスのところにやってきます。おそらく会堂を司る会堂長であったと思われます。この人は、今死んだ娘を生き返らせてほしいと、日頃の自分の肩書きも忘れて、やって来たのです。イエスが手をおけば生き返ると信じて、イエスの前にひれ伏しました。そこで、イエスは彼の家に行くことになりました。

イエスに弟子たちや大勢の群衆までがついて行くので、道は大混雑していました。その中に、十二年も出血が続いていてつらい思いをしている女性がいました。「イエスの服に触れさえすれば治してもらえる」と信じて群衆に紛れ込んだのです。彼女は、イエスの後ろから、そっと服の房を触りました。混雑の中でしたが、イエスは房を触った女性に気づきました。そして、病気は治りました。「あなたの信仰があなたを救った」というのは、女性が純粋な心でイエスの癒しを信じたことをさしています。

さて、最初の「ある指導者」の家に着くと、大騒ぎになっていました。イエスは、人々を外に出して、少女の手をとると、少女は生き返りました。これも、父親が「イエスになら生き返らせてもらえる」と信じたから起きた奇蹟でした。

【二人の盲人をいやす】(9:27-31)

イエスがそこからお出かけになると二人の盲人が叫んで、「ダビデの子よ、私たちに憐れんでください」と言いながらついて来た。イエスが家に入ると、盲人はそばに寄って来たので、「わたしにできると信じるか」と言われた。二人は、「はい、主よ」と言った。そこで、イエスが二人の目を触り、「あなたがたの信じている通りになるように」と言われると、二人は目が見えるようになった。イエスはこのことは、だれにも知らせてはいけぬ」と彼らに厳しくお命じになった。」しかし、二人は外へ出ると、その地方一体にイエスのことを言い広めた。(9:27-31)

「盲人」は、聖書の中によく登場します。生まれつきだけでなく、パレスチナ特有の厳しい暑さ、砂ぼこり、不衛生な生活環境などから失明する人も多かったようです。「ダビデの子よ」という盲人たちの呼び方は、ダビデの家系から出た正当な救世主であるということです。イエスは叫びながらついてくるこの二人を癒して目が見えるようにします。イエスは口止めをされますが、こんなうれしいことを黙っていることなどできなかったでしょう。見えない目が見えるようになるのですから。

【口の利けない人をいやす】(9:32-34)

二人が出て行くと、悪霊に取りつかれた口の利けない人が、イエスのところに連れられて来た。悪霊が追い出されると、口の利けない人が物を言い始めたので、群衆は驚嘆し、「こんなことは、いままでイスラエルで起こったためしがない」と言った。しかし、ファリサイ派の人々は、「あの男は悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言った。(9:32-34)

ここで、「口の利けない人」というのは、耳の不自由なゆえに話すことができない人を指すと思われます。それを悪霊に取りつかれていると考えられている人々の中で、イエスは、悪霊を追い出し、口がきけるように癒されました。ここでは、いやされた人の信仰などは描かれていません。ここで描かれているのは「こんなことは、いままでイスラエルで起こったためしがない」という言葉からみて、「新しい時代が来た」と人々が感じたことだと言えるでしょう。今まで長い年月の間に預言者たちがやって来たけれど、その人たちは奇蹟を行ないませんでした。だが、イエスは神的力量を発揮して、人々をいやし、敵対者の論争に勝って来ました。人々のイエスに対する期待は高まるばかりでした。

ファリサイ派が言った言葉は、イエスが神の力を使っているのではなく、悪霊の頭(ベルゼベルと呼ばれる)であるから、悪霊が言うことをきいているのだという悪口です。

【群衆に同情する】(9:35-37)

イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいや

された。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱りはて、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主に願いなさい。」（9：35－37）

様々な町や村を回って、教えたり、いやしたりされたイエスは、そこに集まってくる群衆が、弱り果てていると言われます。これは、彼らの宗教的指導者たちが、指導者としての立場を忘れて、自己の利益ばかりを追求しているために、人々が真に信じるべき神の姿を失っているということです。そこで、イエスの話を聞くことで信仰を再度取り戻した多くの人々のために、牧者となる人を送ってくださるよう、主に願いなさいとおっしゃっています。イエスが願うのではなく、弟子に願いなさいと言われているのは、今はイエスとともにいるが、先で人々を導く牧者（宗教的指導者）に育ててほしいというイエスの願いがこもった言葉だと思えます。

10章

10章

【十二人を選ぶ】（10：1-4）

イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった。十二使徒の名は次の通りである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心等のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダである。
（10：1-4）

ここに至って、イエスと旅をしたたくさんの弟子の中から十二人の弟子が選ばれ「使徒」とされました。十二という数は、イスラエルの部族の数からきています。

【十二人を派遣する】（10：5-15）

イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。行って『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。病人をいやし、死者を生き返らせ重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。帯の中に金貨や銀貨や銅貨を入れて行ってはならない。旅には袋も二枚のシャツも、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人は誰かをよく調べ、旅立つときまで、その人とのもとにとどまりなさい。その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようともしない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落とさなさい。はっきり言っておく。裁きの日には、この町よりもソドムやゴモラの地の方が軽い罰で済む。」
（10：5-15）

イエスは、弟子の中から選んだ十二人の使徒に、旅に出て宣教をするように命じられました。ここでは、異邦人でなくイスラエル人のところへ行くようにとされています。それは、神の民であるイスラエル人が、まず、悔い改めなくてはいけないということと、異邦人のなかに入ることは危険が多いことも理由だったでしょう。旅には、余分な物を一切持って行かぬように言われます。私たちから見ると、最小限どころか、本当にその身ひとつで行きなさいと言われてるように思います。自らが天に帰る日を思って、イエスは弟子たちを厳しく教育されたのです。

*ソドムとゴモラ

旧約聖書に登場する町。神の怒りによって罪と罰の町として今に語り継がれている。

【迫害を予告する】（10：16-25）

「わたしはあなたがたを遣わす。それは狼の群れに羊を送り込みようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。また、わたしのために総督や王の前に引出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。実は、話すのはあなたがたではなく、あなたの中で語ってくださる、父の霊である。兄弟は兄弟を、父は子を死にやり、子は親に反抗して殺すだろう。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶものは救われる。一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい。はっきり言っておく、あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る。

弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。家の主人がベルゼベルと言われるのなら、その家族のものをもっとひどくいわれることだろう。」（10：16-25）

引き続き、使徒たちを宣教の旅に出すに際しての注意を語っておられます。それは、迫害を伴うことが大いに考えられるからです。「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」とは、相手をよく見極め、賢く世の中を渡って行くことが必要なのです。迫害は、尋ねた町の中だけでなく、総督や王の前に、また異邦人に証しを迫られることになると予告されます。（後にこの通りにイエスは迫害を受けられることとなります）逃げることを躊躇する必要はないのです。しかし、ここで、希望も語られています。「あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る。」そのことを信じて宣教の日々を続けるよう、イエスは言われています。

【恐るべき者】（10：26-31）

「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものではなく、隠されているもので知られずに済

むものはないからである。わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。体は殺しても、魂を殺すことができないものどもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたはたくさんの雀よりもはるかにまさっている。」
(10:26-31)

いろんな苦しい目にあっても「人々を恐れてはならない」とイエスは言われます。人は、体を殺しても魂を殺すことはできない。本当に恐れるべきは「魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」つまり、神を畏怖せよと教えておられるのです。

【イエスの仲間であると言い表す】(10:32-33)

「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う。」(10:32-33)

使徒たちの宣教によって、自分をイエスの仲間であると言い表す者を得たら、わたしは天の父の前でその人を仲間であると言い表すとイエスは言われます。イエスの弟子の宣教によって、イエスを信じるようになることは、直接イエスの弟子になることなのです。

わたしを知らないという者は、イエスも神の前で知らないと言うとおっしゃっています。白黒をはっきりと付けることは必要なことです。しかし、私たち日本人は、白黒を曖昧にすることの方が多いのではないでしょうか。これは人種の考え方や感じ方の違いで、今までにも違和感を持った方もあるでしょう。どちらが間違っているかではなく、こう言う考え方もあるのだと、そのまま受け入れてみてはどうでしょうか。日本人の、白黒をつけないで進んでいく道を進むことは、決して間違っていないと思います。

【平和ではなく剣を】(10:34-39)

「私が来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。私は敵対させるために来たからである。

人をその父に、
娘を母に、
嫁をしゅうとめに。

こうして、自分の家族の者が敵となる。

わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにはふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。また、自分の十字架を担ってそれは、つまり神様をすべての第一とする考え方です。わたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」(10:34-39)

イエスは、平和をもたらすために来たと思われがちですが、そうではなく、剣ををもたらすために来たのだと言われています。ここで言われているのは、イエスへの絶対服従です。家族愛などどうでも良いと言われているわけではありませんが、家族よりもイエスを愛することを要求しているのです。「自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。」この言葉は、やがてやって来るイエスの十字架刑のことを指しています。そのように、あなたも自分の十字架を担ってイエスの後を従って行くのだとおっしゃっています。

ここを読むと、強い者しかクリスチャンに慣れないのかと考えてしまいます。でも、イエスは人間の弱さをよくご存知で、憐れんでくださる方です。むしろ、病気など弱い人のそばに寄り添うようにして歩まれる方です。使徒の出発に当たって、厳しい言葉を発していらっしゃいますが、どうか、ここでつまづかないで、先に進んでくださることを望みます。

11章

【受け入れる人の報い】（10：40－11：1）

「あなたがたを受け入れる人は、私を受け入れ、私を受け入れる人は、私を使わされた方を受け入れるのである。預言者を預言者として受け入れる人は、預言者と同じ報いを受け、正しい者を正しい者として受け入れる人は、正しい者と同じ報いを受ける。はっきり言うておく。私の弟子だという理由で、この小さな者のひとりに、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」イエスは十二人の弟子たちに指図を与え終わると、そこを去り、方々の町で教え、宣教された。（10：40－11：1）

十二使徒の出発を前に、イエスは、使徒を受け入れる人は、イエスを受け入れる人であり、そして、神様を受け入れるのだと、力強く語られます。そして、イエスの弟子だと理由で、少しでも良くしてくれる人は、必ずその報いを受けるのだと言われました。

こうして、十二使徒は宣教の旅に出発し、イエスの教えを宣べて、歩いたのです。移動するだけでも大変だったであろうと思われるこの時代に、宣教の旅は、どんなに恐ろしいことの連続になったのでしょうか。しかし、神様にまもられた彼らは、力強く進んで行くことでしょう。そして、イエス御自身も宣教の旅へと出発されたのです。

【洗礼者ヨハネとイエス】（11：2－19）

ヨハネは牢の中でキリストのなさったことを聞いた。そこで、自分の弟子を送って、尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」イエスはお答えになった。「言うて、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。私につまずかない人は幸いである。」ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話始められた。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。

『見よ、私はあなたより先に使者を遣わし、私の前に道を準備させよう』

と書いてあるのは、この人のことだ。はっきり言うておく。およそ女から生まれたもののうち、洗礼者ヨハネより偉大なのは現れなかった。しかし、天の国でもっとも小さな者でも、彼よりは偉大である。彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。あなたがたがあなたがたが認めようとするならば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである。

耳のある者は聞きなさい。

今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供に似ている。

『笛を吹いたのに、

踊ってくれなかった。

葬式の歌を歌ったのに、

悲しんでくれなかった。』

ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見る、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。』（11：2－19）

ここで、洗礼者ヨハネが先触れとなってやって来たと言ったのは、イエスだということがはっきりと宣べられています。イエスは、ヨハネについて「およそ女から生まれたもののうち、洗礼者ヨハネより偉大なのは現れなかった。」と宣べられています。御自身は聖霊による処女懐胎で産まれて来た方だからです。人々が言う悪口に関心を持つよりも、正しい行いによって、見極めるべきだと教えておられます。

【悔い改めない町を叱る】（11：20－24）

それからイエスは、数多くの奇蹟の行なわれた町々が悔い改めなかったので、叱り始められた。「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前の所で行なわれた奇蹟が、ティルスやシドンで行なわれていれば、これらの町はとうの昔に粗布をまとい、灰をかぶって悔い改めたに違いない。しかし、言うておく。裁きの日にはティルスやシドンの方がお前たちよりまだ軽い罰で済む。また、カファルナウム、お前は、

天まで上げられるとででも思っているのか。

陰府にまで落とされるのだ。

お前の所で行なわれた奇蹟が、ソドムで行なわれていれば、あの町は今日まで無事だったにちがいない。しかし、言うておく。裁きの日にはソドムの地の方が、お前よりまだ軽い罰で済むのである。

（11：20－24）

イエスが、悔い改めない町の名をひとつひとつあげて、叱り始められました。普段は、優しい顔を見せてく

ださっていると思っている私にはショックです。しかし、悔い改めない町を叱るということは、まだチャンスがあるということでしょうか。だからこそ、今、忠告していらっしゃるのかもしれませんが。本当に諦めた時は、なにも言わないのではないのでしょうか。

【わたしのもとに来なさい】（11：25－30）

その時、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢いものには隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです。父よ、これは御心に適うことでした。すべてのことは、父から私に任せられています。父のほか子を知る者はなく、父と子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。父のほか子を知る者はなく、父と子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。私は柔和で謙虚な者だから、私の軛（くびき）を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。私の軛は負いやすく、私の荷は軽いからである。」
（11：25－30）

この部分は、三つに分かれています。「そのとき、イエスはこう言われた。」から、「そうです。父よ、これは御心に適うことでした。」

までは、イエスが天の父である神に向かって祈っておられる言葉です。それは、天の父が、「知恵ある者や賢い者」よりも「幼子のような者」に呼びかけておられることが分かります。「幼子のような者」とは、純粹なという意味ではなく、この時代には、働く力もなく価値がない者という意味で使われています。現代の「幼子」というと純真などの言葉が出てきますが、この時代では、全く違う見方をされていたのです。

それに続く「すべてのことは、父から私に任せられています。父のほか子を知る者はなく、父と子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。」という言葉からは、イエスは人々に目を向けて話されています。少しややこしい文章ですが、父（神様）と子（イエス）と子が示そうと思う者（弟子、信者）の密接なつながりが語られています。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。」から最後まで、イエスの招きの言葉です。「軛」というのは、牛や馬を御するのに用いる物です。気ままに好き勝手に生きる者には軛は必要ありませんが、主人に従う者つまり神に従う者には、軛が必要なのです。イエスは、私に従い、学べば、私の軛は負いやすいから楽になるよと、私たちを招いてくださっているのです。この部分は、聖書の中でもとても有名な部分です。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。」人生に疲れ果てても、つぶされるような重荷を負うていても、安らげるところがあるのです。

12章

12章

【安息日に麦の穂を摘む】（12：1-8）

そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の穂を摘んで食べ始めた。ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに、「御覧なさい。あなたの弟子たちは安息日にはならないことをしている」と言った。そこで、イエスは言われた。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。安息日に神殿にいる祭司は、安息日の掟を破っても罪にならないと律法にあるのを読んだことがないのか。言うておくと、神殿よりも偉大なものがここに。もし、『私が求めるのは憐れみであって、いけにえではない』ということばの意味を知れば、あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう。人の子は安息日の主なのである。（12：1-8）

安息日に弟子たちが麦畑の穂を摘んで食べたことに、ファリサイ派が律法違反だと指摘してきます。律法の中でも安息日は神聖なものとされる日で、してもいいこと、いけないことが細かく規定されています。私たちの日曜日とは全く違うものなのです。それは、神様がこの世界をお作りになって、6日でその仕事を終えて、7日目に休まれたところからきています。それゆえ、安息日は神とイスラエルとの間に立てられた特別の契約のしるしなのです。これを破る者は死を持って罰せられるのです。もちろん、これはユダヤ教のことで、キリスト教では安息日を守らなければいけないということはありませんから、安心してください。

刈り入れの済んだ他人の麦畑から、刈り残した麦を摘んで食べることは、律法で認められていました。貧しい人や旅行者のために、わざと刈り残しをする者もいました。しかし、安息日にそれをやると、律法違反になってしまうのです。麦を摘んで（刈り入れをした）、手でもんで殻を取り（脱穀した）、もみがらを除いた（もみを吹き分けた）からであり、安息日の前日までにしておかなければならなかった食事の用意をしなかったことも違反なのです。

ファリサイ派の指摘について、イエスは旧約聖書のダビデ王が、神聖で食べてはいけなかったパンを食べた話をされました。イエスは、安息日について、何をしても良い、ないがしろにして良いと言われているのではありません。安息日の厳しい掟を守らなければいけないあまり、人々ががんじがらめになっているのを批判されているのです。そして、「人の子（イエス）は安息日の主なのである」と言われました。律法を否定するのではなく、よりよくするために、イエスは安息日の捉え方を見直してみるべきだと言われているのです。

【手の萎えた人をいやす】（12：9-14）

イエスはそこを去って、会堂にお入りになった。すると、片手の萎えた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って「安息日に病気を治すのは、律法で赦されていますか」と尋ねた。そこで、イエスは言われた。「あなたたちのうち、だれが羊を一匹もっていて、安息日に穴に落ちた場合、手で引き上げてやらない者がいるだろうか。人間は羊よりも遥かに大切なものだ。だから、安息日に善いことをするのは赦されている。」そしてその人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。のぼすと、もう一方の手のように元どおり良くなった。ファリサイ派の人々は出て行き、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。（12：9-14）

イエスの周りには、イエスを訴えようとするファリサイ派が、常につきまとっていました。ここでも彼らはイエスに言いがかりをつけ、言い負かされてしまいます。会堂からすすり出て行った彼らは、民衆の人気があるイエスを殺すための相談を始めたのでした。

【神が選んだ僕】（12：15-21）

イエスはそれを知って、そこを立ち去られた。大勢の群衆が従った。イエスは皆の病気をいやして、御自分のことを言いふらさないようにと戒められた。それは、預言者イザヤを通して言われていることが実現するためであった。

「見よ、私の選んだ僕。
私の心に適った愛する者。
この僕に私の霊を授ける。
彼は異邦人に正義を知らせる。
彼は争わず、叫ばず、
その声を聞く者は大通りにはいない。
正義を勝利に導くまで、
彼は傷ついた葦を折らず、
くすぶる灯心を消さない。
異邦人は彼の名に望みをかける。」

イエスはファリサイ派の行動を知っておられ、会堂を立ち去られた。イエスはまだ、逮捕される時が来ていないことを知っておられました。イエスは、旧約聖書のイザヤ書で語られていることを御自分が実現されることを知っておられたのです。

この引用で、「見よ、私の選んだ僕。私の心に適った愛する者。」という呼びかけは、イエスが洗礼者ヨハネに洗礼を受けられたとき、天から聞こえて来た声と同じです。その後、「彼は異邦人に正義を知らせる。」以下は、イエスが全世界（異邦人）に福音を知らせることが書かれています。キリスト教が現在、全世界に広がっているのは、この文章が実現したと言っても良いでしょう。

【ベルゼブル論争】（12：22-32）

その時、悪霊に取りつかれて目が見えず口の利けない人が、イエスの所に連れられて来て、イエスがいやされると、ものが言え、目が見えるようになった。群衆は皆驚いて、「この人はダビデの子ではないだろうか」と言った。しかし、ファリサイ派の人々はこれを聞き、「悪霊（サタン）の頭ベルゼブルの力によらなければ、この悪霊を追い出せはしない」と言った。イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。「どんな国でも内輪で争えば、荒れ果ててしまい、どんな町でも家でも、内輪で争えば成り立って行かない。サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんな風では、どうしてその国が成り立って行くだろうか私がベルゼブルの力で悪霊をおいだすのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁くものとなる。しかし、私が神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちの所に来ているのだ。また、まず強い人を縛り上げなければ、どうしてその家に押し入って家財道具を奪い取ることができるだろうか。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。私に味方しないものは私に敵対し、私と一緒に集めない者は散らしている。だから言うておく、人が犯す罪や冒瀆は、どんな者でも赦されるが“霊”に対する冒瀆は赦されない人の子に言い逆らう者は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、この世でも後の世でも赦されることがない。」（12：22-32）

人々は、イエスのすばらしい働きを見て、「ダビデの子ではないだろうか」と言いました。これは、イスラエルが待ち望んでいる救世主がダビデの子であるという言い伝えから言った言葉です。（最初の系図のところで、ダビデが出てきましたね）

イエスに権威を認めさせたくないファリサイ派は、そうではなく、これだけの悪霊を追い出す力を持っているのは、悪霊の頭ベルゼブルの力によっているのだと言い出します。

イエスは、そのファリサイ派の中で悪霊を追い出す人もベルゼブルの仲間なのかと言い返されます。そして、国を治めることと泥棒に入ることの二つのとえを用いて断言され「聖霊に逆らう者はこの世でも後の世でも赦されることがない」と言われるのです。

【木とその実】（12：33-37）

「木が良ければ実も良いとし、木が悪ければその実も悪しとしなさい。木の良し悪しは、その結ぶ実で分かる。蝮の子らよ、あなたたちは、悪い人間であるのに、そうして良いことが言えようか。人の口からは、心にあふれていることが出て来るのである。良い人は、良いものを入れた倉から良いものを取り出し、悪い人は、悪いものを入れた倉から悪いものを取り出してくる。言うておくが、人は自分の話したつまらない言葉についてもすべて、裁きの日には責任を問われる。あなたは、自分の言葉によって罪ある者とされる。」（12：33-37）

物事には必ず一貫性があります。人の言葉と行ないはその中にあるものを示しています。「蝮の子らよ」と言う呼びかけは、ここではファリサイ人のことを指した厳しい表現だと言えるでしょう。イエスは、木の善し悪し、そして、その人の倉の善し悪しをたとえを上げて話されます。

私たちは、「自分の話したつまらない言葉」つまり、不用意にあるいは軽率に口から出た言葉が、実は心に満ちている言葉であり、裁きの日には責任を問われるのです。ファリサイ人のイエスを滅ぼそうとする思いに満ちた言葉は、聖霊を冒瀆する発言であり、彼らはその言葉によって、裁かれるのです。

【人々はしるしを欲しがらる】（12：38-42）

すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。イエスはお答えになった。「よこしまで神に背いた時代の者はしるしを欲しがらるが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になる。ニネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさる者がある。また、南の国の女王は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。」（12：38-42）

律法学者とファリサイ派がイエスに「しるしを見せてください」と言うてきます。しるしとは目に見えるもの、また信じられないような異常なこととです。奇蹟です。そのようなものの中に、神や救いを求める彼らは、根本的に間違っているとと言えるでしょう。

「預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」とイエスは言われます。これは、旧約聖書にある話です。三日三晩、大きな魚の中で生き延びて、ニネベに着いたヨナは、その存在自体が神のしるしとなりました

。ニネベの人たちは、ヨナの説教を聞いて悔い改めたのです。また、南の国の女王シバが、ソロモンの知恵を聞くために地のはてから来たところにも、ソロモンにまさるものがあるのです。この中で、「人の子も三日三晩」というところがありますが、これは、イエスの死と復活を予告された言葉と同じです。イエスは死んだ三日三晩の後に復活をされると、ここで預言されているのです。

*シバの女王

ソロモンの知恵を試しにアラビアから上って来たが、噂以上の知恵と富に驚いて、多くの贈り物をして帰った南国の女王。旧約聖書に登場する。

【汚れた霊が戻ってくる】（12：43－45）

「汚れた霊は、人から出てくると、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来た我が家に戻ろう』と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。そこで、出かけて行き、自分より悪いほかの七つの霊と一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになる。」

この話は、ユダヤ人全体への批判としても受け取れますが、個人に対する警告とも取れます。ここでは、個人に対する者として、話を進めます。その方が身近に感じていただけるでしょう。

汚れた霊を追い出してもらったものの、その霊が出て来た家で神を信じることしないままにしていると、それを居心地の良いところと悪霊は思い、以前よりも多くの霊を誘って、そこに住み着いてしまうというのです。それは、汚れた霊を追い出してもらった人にだけ当てはまるのではなく、健康な人であっても、偶像礼拝など間違ったことに踏み込んで行くと、本当の信仰を忘れ、その人の家は悪霊の居心地の良い場所になってしまうという警告なのです。

【イエスの母、兄弟】（12：46－50）

イエスがなお群衆に話しておられる時、その母と兄弟たちが話したいことがあって外に立っていた。そこで、ある人がイエスに「ご覧なさい。母上とご兄弟たちが、お話ししたいと外で立っておられます」と言った。しかし、イエスはその人にお答えになった。「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか」そして、弟子たちの方を指して言われた。「見なさい、ここにはわたしの母、私の兄弟がいる。だれでも、わたしの天の父の御心を行なう人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」
(12：46－50)

イエスは、なぜこんな冷たい対応を家族に対してしたのでしょうか。「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか」とは、絶縁したということでしょうか。そうではありません。イエスは、血縁の親兄弟よりも、神の御心で結ばれた家族が真の親であり兄弟であると教えられたのです。神の国はそういうところだと言われたのです。冷淡ではなく、神の国の真理を説く者として毅然として、このような態度をされたのです。

13章

13章

さて、ここからのイエスは、今までの会堂ではなく、野外で人々に教えるようになります。会堂の中は、ファリサイ派が常に付け入る隙狙っているからです。人々はイエスに対して否定的な人々に囲まれて話を聞くことになってしまったからです。

【「種蒔く人」のたとえ】（13：1-9）

その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って、腰をおろされた。群衆はみな岸辺に立っていた。イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。「種蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけの土の少ない所に落ちた。そこは土が浅いのですぐ芽をだした。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の間に落ち、茨がのびてそれを塞いでしまった。ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、ある者は六十倍、ある者は三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい。」

このたとえの詳しい説明は、このふたつあとの「種蒔く人のたとえの説明」というところに書いてあります。イエスが弟子たちに教えていらっしやる場面です。

ところで、ここでは種を蒔いても、その中には実る種もあり、実らない種もあると書かれています。正しいところに蒔かなければ種は実らないのですが、ほかの種はこれで死んでおしまいなのではないでしょうか。ここには書いてありませんが、神様はそんな非情な方ではありません。神様は、実ることが難しいところに落ちてしまった種を救うようにと信じる人に求めていらっしやるのではないのでしょうか。あの種はダメだなと知らん顔をして通り過ぎるのではなく、なにかできないかと考える自分でありたいと思います。

【たとえを用いて話す理由】（13：10-17）

弟子たちはイエスに近寄って、「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになるのですか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが赦されているが、あの人たちには赦されていないからである。持っている人は更に与えられ豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。イザヤの預言は、彼らによって実現した。

『あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、

見るには見るが、決して認めない。

この民の心は鈍り、

耳は遠くなり、

目は閉じてしまった。

こうして、彼らは目で見ることなく

耳で聞くことなく、

心で理解せず、悔い改めない。

私は彼らをいやさない。』

しかし、あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。はっきり言うておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ている者を見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いている者を聞いたかったが聞けなかったのである。」

（13：10-17）

イエスがたとえを用いて話されたことについて、弟子たちは不思議に思い、どういうことなのかと尋ねます。イエスは、弟子たちは天の国の秘密を悟ることが赦されているが、他の人にはまだ赦されていないのだとおっしゃいます。その次に続く聖句は旧約聖書（イザヤ書6章9-10）です。この旧約聖書が現実になったのです。しかし、人々と違って、弟子たちに対しては、目も見えるし耳も聞こえるとイエスは祝福された立場にいることを明言なさっています。

【「種蒔く人のたとえの説明】（13：18-23）

「だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。だれでも異国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれた者を奪い取る。道端に蒔かれたものとは、こういう人である。石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人である。茨の中に蒔かれた者とは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。良い土地で蒔かれた者とは、御言葉を聞いて悟る人であり、ある者は百倍、ある者は六十倍、ある者は三十倍のみを結ぶのである。」

（12：18-23）

ここでは、弟子たちに対して、たとえの説明をされています。それぞれの地に落ちた種とはどういう人のことをさすのか、詳しく話されています。

【「毒麦」のたとえ】（13：24－30）

イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑にまいた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。芽が出て実ってみると、毒麦も現れた。僕たちが主人の所に来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったのではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか』主人は、「敵の仕業だ」と言った。そこで、僕たちが『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れのとき、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』（13：24－30）

ここで登場する「毒麦」は、食べると嘔吐、下痢、めまい、しびれを引き起こすような植物です。ある人が麦の種を蒔きました。するとある夜、悪者がやって来て、毒麦を蒔いて行きました。毒麦は育つと黒くなって区別しやすいのですが、それまでは麦と判別がつきにくいのです。それで、主人は毒麦によって、間違えて麦を刈ってはいけないので、刈り入れまでそのままにしておくことを命じるのです。

そして主人は、僕たちではなく「刈り取る者」に刈り取らせると言っています。これは、麦の収穫を、神の選びと置き換えて語られていたのです。また、「敵の仕業だ」という言葉は、初代のキリスト教会の経験を作者マタイが盛り込んだと考えられます。人が集まって組織を作れば、「どこから毒麦が入ったのでしょうか」ということが起こってきます。それは、現代のどんな組織でも言えることではないでしょうか。

【「からし種」と「パン種」のたとえ】（13：31－33）

イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天国はからし種に似ている。人がこれを取って畑にまけば、どんな粒よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」
また、別のたとえをお話になった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」（13：31－33）

二つのたとえが語られています。
「からし種」の話は、からし種を蒔けば、どんなに大きく成長するか語られています。天国の神様ははそれと同じで、小さな私たちも、大きく成長させてくださるのです。
次の「パン種」の話も同じことが語られています。「パン種」とはイースト菌のことです。それを適量小麦粉に混ぜると、発酵して全体が膨れて、パンを焼くことができます。それが天国を表すたとえになっています。どちらも小さくて目立たない者ですが（私たちもそうだと言えるでしょう）が、適所へ運ばれ、神の力が加われば、大きく成長出来るのです。
*サトン=約12、8リットル

【たとえを用いて語る】（13：34－35）

イエスはこれらのことを皆、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。それは、預言者を通して言われたことが実現するためであった。
「私は口を開いてたとえを用い、
天地創造の時から隠されていることを告げる。」（13：34－35）

イエスはずっとたとえを用いて、群衆に話されました。それは、文中にある旧訳聖書 詩編78編2節に記されている言葉があるからです。現在の聖書とは訳が異なるようですが、イエスが「天地創造の時から隠されていることを告げる」と言われるとき、隠されたこととはなんのでしょうか。私にはまだ、何のことかわかりません。

【「毒麦」のたとえの説明】（13：36－43）

それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると弟子たちがそばに寄って来て、「畑の毒麦の説明をしてください。」と言った。イエスはお答えになった。「良い種を蒔くものは人の子、畑は世界、よい種は御国の子ら、毒麦は悪いものの子ら、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れるものは天使たちである。だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。人の子は天使たちを使わし、つまずきとなるものすべてと不法に行なうもので主を自分の国から集めさせ、燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。彼らは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい。」（13：36－43）

少し前に話された「毒麦」のたとえについて、群衆がいないところで、弟子たちが説明を求めてきました。天の国について説明されたイエスの説明は、正しい人が太陽のように輝くようです。それに反してそうでない者が泣きわめき歯ぎしりをするという厳しいものです。「耳のある者は聞きなさい」とは、しっかりと聞いて心に止めるようにという意味です。

【「天の国」のたとえ】（13：44－50）

「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠れている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。
また、天の国は次のようにたとえられる。商人がよい真珠を捜している。高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。
また、天の国は次のようにもたとえられる。網が湖に投げ下ろされ、いろいろな魚を集める。網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、よいものは器にいれ、悪いものは投げ捨てる。天使たちが来て、正しい人々の中にある悪いものどもをより分け、燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪いものどもはそこで泣きわめいて歯ぎしりをするだろう。」（13：44－50）

ここには、三つのたとえが記されています。
この時代、人々は財宝を壺にいれ土の中に隠すことが一般的だったそうです。そのような財宝のひとつでしょう。ある人が財宝を偶然に見つけました。彼は、喜んで帰宅し、持ち物をすっかり売り払って、その土地の所有者となったのです。
ここで注目すべきなのは、彼が持ち物をすっかり売り払うと言う犠牲を払って、初めて財宝を手に入れたということです。
次の真珠の話でも、同じことが語られています。
そして、最後の話には、魚をより分ける漁夫たちが、天使が天国で人々をより分けるのと同じだと語っています。

【天の国のことを学んだ学者】（13：51－52）

「あなたがたは、これらのことがみな分かったか。」弟子たちは「分かりました」と言った、そこで、イエスは言われた。「だから、天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取りだす一家の主人に似ている。」（13：51－52）

ここでは、イエスが弟子たちに、話が理解できたかと聞いておられます。弟子たちが分かったと言ったので、イエスは、自分の知識の中から、旧約聖書にある知恵や、イエスが教えた新しい教えを巧みに取り出して、宣教をするように語っておられます。

【ナザレで受け入れられない】（13：53－58）

イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人はこのような知恵と奇蹟を行なう力をどこから得たのだろう。このひとは大工の息子ではないか。母親はマリアと言い、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちはみな、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、一体どこから得たのだろう。」このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、人々が不信仰だったので、そこではあまり奇蹟をなさらなかった。（13：53－58）

群衆たちにたとえ話で教えられたイエスは、そこを去り、新しい局面に向かわれます。それは故郷ナザレでの宣教です。会堂で教えておられましたが、ここにはイエスの両親や兄弟、あるいは大工のころのイエスを知った人たちがたくさんいて、イエスを信じることをしなかったのです。私たちも、昨日まで親しくしていた友人が、急に「私を信じなさい」と言って奇蹟を起こしたら信じるのは難しい気持ちになるのではないのでしょうか。何があったのかと根掘り葉掘り聞き出そうとするでしょう。こうして、「預言者がうやまわれない故郷」を悲しんで故郷を去られたのです。身近な人への宣教は、最も難しいことなのです。

14章

14章

【洗礼者ヨハネ、殺される】（14：1－12）

そのころ、領主ヘロデはイエスの評判を聞き、家来たちにこう言った。「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇蹟を行なう力が彼に働いている。」実はヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアのことでヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。ヨハネが、「あの女と結婚することは律法で赦されていない」とヘロデに言ったからである。ヘロデ派ヨハネを殺そうと思っていたが、民衆を恐れた。人々がヨハネを預言者と思っていたからである。ところがヘロディアの娘がみなの前で踊りを踊り、ヘロデを喜ばせた。それで彼は娘に「願うものは何でもやろう」と誓って約束した。すると、娘は母親のに唆されて、「洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、この場でください」と言った。王は心を痛めたが、誓ったことであるし、また、客の手前、それを与えるように命じ、人を使わして、牢の中でヨハネの首をはねさせた。その首は盆に載せて運ばれ、少女に渡り、少女はそれを母親に持って行った。それから、ヨハネの弟子たちが来て、遺体を引き取って葬り、イエスの所に言って報告した。（14：1－12）

ここには、イエスの先触れとして、この福音書の最初に登場する洗礼者ヨハネの死について書かれています。ヨハネは、結婚が違法であると指摘したことで、特にヘロディアの強い恨みをかい、投獄されていました。ヘロデ自身は、ヨハネの話を聞いたりしていたと、他の福音書には書かれています。ヘロデは、ヨハネを殺す意思はなかったのかもしれませんが、しかし、ヘロディアは、機会を見て、ヨハネを亡き者にしようとしていました。そして、宴会の席で幼い娘を使って、その思いを果たしたのです。この娘が、戯曲などに書かれているサロメです。

【五千人に食べ物を与える】（14：13－21）

イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、ひとり人里離れた所に退かれた。しかし、群衆はそのことを聞き、方々の町から歩いて後を追った。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、深く憐れみ、その中の病人をいやされた。夕暮れになったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、もう時間も立ちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買に行くでしょう」イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたが彼らの食べるものを与えなさい。」弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」イエスはそれをここに持って来なさい」と言い、群衆を草の上に座るようにお命じになった。そして、五つのパンと魚二匹を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。弟子たちはそのパンを群衆に与えた。すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった。食べた人は、女と子供をを別にして、男が五千人ほどであった。（14：13－21）

イエスは洗礼者ヨハネの死を深く悲しまれました。そこで静かな入り江に退かれて、祈りを捧げておられたのでしょう。しかし、群衆は容赦なくイエスの元に集まってきました。イエスは、あまりに大勢の群衆を見て、病人を癒されたのです。夕暮れ時になり、使徒たちは、群衆を解散させて食事をとれるようにした方が良いとイエスに進言しました。ところが、イエスはそこにあったパン五つと魚二匹で、集まった群衆たちが満腹するほどの食事を振る舞ったのです。ここには、男が五千人いたと記されています。それに女性と子どもたちを合わせると、相当な数になります。

この奇蹟を、群衆はイエスの話を聞いて幸せになり満足して帰っていったという意味だと、解釈する人たちもいます。しかし、私は、信じられないような話ですが、このまま、皆がパンと魚で満腹になったのだと信じたいと思います。イエスは「求めなさい。そうすればあたえられる。」（7：7）と教えられています。イエスには、本当に信じる力があつたのです。だからこそ、皆が満腹できたのです。祈りは叶うという大事なことをイエスは教えてくださっているのです。叶う力を下さるのは神様です。

【湖の上を歩く】（14：22－33）

それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、そこにおられた。ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。世が明けるとき、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声を上げた。イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。しかし、強い風に気がついて恐くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ「信仰の薄いものよ、なぜ疑ったのか」と言われた。そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。（14：22－33）

最初に「イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ」とあります。なぜイエスはそうされたのでしょうか。それは、弟

子たちやこの群衆のなかに政治的な集団としてイエスたちを考えている人がいたからです。彼らは、イエスを先頭にして、ローマの支配から解放する運動をすることを考えていました。しかし、イエスが見ておられるのはただ神様のみです。そのような野望は持ち合わせていません。それ故に、暴動が起きないように、弟子たちと自分が離れ、また群衆たちを解散するようにされたのです。

イエスが静かに祈っていらっしゃるとき、弟子たちの舟は逆風に翻弄されていました。9時間も漂っていたようです。イエスはそれを見て、湖上を歩いて弟子たちのところに行かれました。イスラエルでは、幽霊は水上を歩くと言われていたので、弟子たちは「幽霊だ」と大騒ぎになりました。しかし、そんな弟子たちを叱ることなく、イエスは「安心しなさい。恐れることはない。」とおっしゃいました。イエスだと分かったら、弟子の一人ペトロが私にも水の上を歩かせてくださいと頼みました。イエスはペトロが水に上を歩けるようにされました。しかし、途中で強風が吹いて恐くなり、沈みかけました。イエスに助け上げられて弟子たちは「本当に、あなたは神の子です」とイエスを拝んだのです。

しかし、イエスの奇蹟を弟子たちは何度も見えています。この前にも、五千人の人を満腹にするという奇蹟を見たばかりです。それなのに、イエスを「信じきる」ことができません。それは私たちも同じなのかもしれません。信じられる人しかクリスチャンになれない、救われない、天国に行けないということはないのです。それでも、イエスは諦めずに手を差し伸べてくださるのです。バークレーという有名な聖書学者は著書の中で「聖者とは、絶対に倒れない人でなくて、倒れても立ち上って前進する人である」と語っているそうです。疑わず強い人のためにイエスは来られたのではないのです。弱くて倒れそうな人がまた立ち上げられるよう助けるためにイエスは来られたのです。

【ゲネサレトで病人をいやす】（14：34－36）

こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地についた。土地の人々は、イエスだと知って、付近にくまなく触れ回った。それで、人々は病人をみなイエスのところに連れてきて、その服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者はみないやされた。
（14：34－36）

イエス一行は湖をわたり、新しい土地に着き、そこでたくさんの人を治しました。それも、服のすそにでも触れさせてほしいと願って、それでも皆癒されたのです。実は、この箇所は次の話へと続いて行く部分です。律法では、悪霊に取り憑かれた人（病気の人）に触れることは汚れることだと考えられていました。それは、たとえ服のすそに触れるだけでも汚れるのです。ですから、イエスの行為は律法に反しているとファリサイ派の人たちは考えたのです。

15章

15章

【昔の人の言い伝え】（15：1－20）

そのころ、ファリサイ派の人々と律法学者たちが、エルサレムからイエスのもとへ来て言った。「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言い伝えを破るのですか。彼らは食事の前に手を洗いません。」そこで、イエスはお答えになった。「なぜ、あなたたちも自分の言い伝えのために、神の掟を破っているのか。神は『父と母を敬え』と言い『父または母をのしる者は死刑に処されるべきである』と言っておられる。それなのに、あなたたちは言っている。『父または母に向かって「あなたに差し上げるべきものは、神への供え物にする」という者は、父を敬わなくてもよい』」と。こうして、あなたたちは、自分の言い伝えのために神の言葉を無にしている。偽善者たちよ、イザヤは、あなたたちのことを見事に預言したものだ。

『この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠くはなれている。人間の戒めを教えとして教えむなしくわたしをあがめている。』」（15：1－9）

ここでファリサイ派や律法学者たちが「昔の言い伝え」と言っているのは、律法とそれを守るための具体的な取り決めのことです。食事の前に手を洗わないことを非難していますが、どのようにすべきだと言っているか書いてみましょう。

- 1、まず、手に付いている砂などの異物を取り去り、その後、特別な水差しに異物が混入していないことを確認する。それによって、その水が他の目的のために使用されていないことを証明する。
- 2、そして、両手の指先を上に向けて水を注ぐ。少なくとも手首まで流れ落ちなければならない。
- 3、両手が濡れている間に、片方の手のこぶしでもう一方の掌や甲の表面を洗うという方法で、両手を洗う。
- 4、この状態では、手についている水は汚れた手に触れて不浄なので、今度は、指先を下に向けて水を注ぐ。

このように、細かいところまで決まりがあって、それをしなければ、汚れていると言ったのです。それに対して、イエスは「父と母を敬え」という律法を本当に守っているかと彼らに言われました。「父または母に向かって『あなたに差し上げるべきものは、神への供え物にしたからなくなった』という者は、父を敬わなくてもよい』」と言う解釈を彼らは行なっていたのです。彼らの偽善を指摘したイエスは、旧約聖書のイザヤ書を引用されています。

それから、イエスは群衆を呼び寄せて言われた。「聞いて悟りなさい。口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである。」そのとき、弟子たちは近寄って来て、「ファリサイ派の人々がお言葉を聞いて、つまづいたのをご存知ですか」といった。イエスはお答えになった。わたしの天の父がお植えにならなかったならなかった木は、すべて抜き取られてしまう。そのまましておきなさい。彼らは盲人の道案内をする盲人だ。盲人が盲人の道案内をすれば、二人とも穴におちてしまう。するとペトロが「そのたとえを説明してください」と言った。イエスは言われた。「あなたがたも、またさとらないのか。すべて口に入るものは、腹を通して外に出されることが分からないのか。しかし、口から出て来るものは、心から出て来るので、これこそ人を汚す。悪意、殺意、姦淫、淫らな行為、盗み、偽証、悪口などは、心から出てくるからである。これが人を汚す。しかし手を洗わずに食事をして、そのことは人を汚すものではない。」（15：10－20）

ファリサイ派や律法学者たちが去ってから、イエスは群衆を再び呼び寄せて言われました。「口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである。」この言葉については、最後のところで説明をされています。ファリサイ派たちがいう「手を洗わない」ということより、もっと気をつけるべきことがあるとおっしゃっているのです。心から出てくる汚れた思いの方に目を向けるべきだと教えておられます。

この話の間に、イエスの言葉で「つまづいた」ファリサイ派の人がいるという話が挿入されています。そしてそれに対してイエスは「わたしの天の父がお植えにならなかったならなかった木は、すべて抜き取られてしまう。そのまましておきなさい。」とおっしゃっています。天の神様によって植えられたのではなかった彼は、根がない木と同じで、やがて枯れてしまうでしょう。そのあとのことは、神様がお決めになることなのです。

最後に、口に入る物は体内を通して外に出るが、口から出る物は心からでるから、人を汚すのだと教えておられます。この言葉には、そうだなあと納得します。時代を問わず、私たちももっと言葉に配慮するべきなのだと思います。

【カナンの女の信仰】（15：21－28）

イエスはそこを立ち、ティルスとシドンの地方に行かれた。すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。しかしイエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子が近寄って来て願った。「この女を追

い払ってください。叫びながらついてきますので。」イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか使わされていない」とお答えになった。しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よどうかお助けください」と言った。イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやっては行けない」とお答えになると、女は言った。「主よ、ごもともです。しかし小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」そこで、イエスはお答えになった。「夫人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願い通りになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。(15:21-28)

イエス一行は、ティルスとシドンという異邦人の地へ行かれました。たくさんの群衆と、イエスを陥れようとするファリサイ派や律法学者からはなれ、静かに祈ることを望んでいる場所を求めてのことでしょう。

そこへ異邦人の女性が、娘が悪霊にひどく苦しめられています」とイエスに訴えました。しかし、イエスはお答えになりません。そして言われたのは、私にはイスラエルの民をまず救わなければ行けないのだという意味の言葉でした。しかし、諦めず訴えかける女性に、イエスは異邦人を小犬に見立てて断る言葉を言われました。すると女性は「小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」といったところ、イエスは彼女の信仰をほめ、娘をいやされたのです。ここで、なぜ、イエスはすぐに娘をいやされなかったのでしょうか。それは異邦人であるこの女性の信仰を知りたいと思われたのでしょうか。彼女の答えは機転の利いた言葉でした。と同時に、それは、異邦人でもいやしてもらえる。イエスならば、食卓から落ちるパン屑ほどの力でもいただければ、娘が救ってもらえるという信仰があったのです。

【大勢の病人をいやす】(15:29-31)

イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた。そして、山に登って座っておられた。大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、体の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた。群衆は、口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を賛美した。(15:29-31)

続いて、イエスはガリラヤ湖のほとりに行かれました。すると、大勢の病人や障がいのある人たちが連れて来られました。イエスはこの大勢の人をいやされました。その人たちは異邦人でしたが、イエスの行なわれたことを見て、イスラエルの神を賛美したのです。イエスは、イスラエルだけの神から異邦人へと、すでに世界宣教を見据えておられたのかもしれない。

【四千人に食べ物を与える】(15:32-39)

イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「群衆がかわいそうだ。もう三日も私一緒にいるのに、食べ物がない。空腹のまま解散させたくない。途中で疲れきってしまうかもしれない。」弟子たちは言った「この人里離れたところで、これほど大勢の人に十分食べさせるほどのパンが、どこから手に入るでしょうか。」イエスが「パンは幾つあるか」と言われると、弟子たちは、「七つあります。それに小さな魚が少しばかり」と答えた。そこで、イエスは地面に座るように群衆に命じ、七つのパンと魚を取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き弟子たちにお渡しになった。弟子たちは群衆に配った。人々はみな、食べて満腹した。残ったパンの屑を集めると、七つの籠がいっぱいになった。食べた人は、女と子供を別にして、男が四千人であった。イエスは群衆を解散させ、舟に乗ってマガダン地方に行かれた。

14章のはじめにあった「五千人に食べ物を与える」とよく似たイエスの奇蹟です。違うのは、今回はイエス御自身が群衆の心配をしていることです。それにたいして、弟子たちは、ここでは人里離れているので食べ物を調達できないと言います。イエスが五千人に食べ物を与えたことを弟子たちはすっかり忘れていたのです。すこしさみしいものがあります。イエスは前回同様にパンと魚をすべての人が満腹するほど与えられました。これで、帰りに疲れて倒れてしまうようなことはないでしょう。

もうひとつ違う点は、ここでは異邦人の人たちに食べ物を与えられたことです。イエスの宣教は異邦人(イコル非ユダヤ教徒)へと向けられているのです。私たちが考える「外国人」という感覚からはほど遠く、イスラエル人は異邦人を「汚れている」とさえ考えていたのです。ユダヤ教の神様はイスラエル人を選んでくださったという「選民意識」がとても強かったのです。しかし、イエスはそんな垣根を飛び越えて、求める人に与えるため、旅を続けておられるのです。

16章

16章

【人はしるしを欲しが】（16：1-4）

ファリサイ派とサドカイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを見せてほしいと願った。イエスはお答えになった。「あなたたちは、夕方には『夕焼けだから、晴れだ』と言い、朝には『朝焼けで雲が低いから、今日は嵐だ』と言う。このように空模様を見分けることを知っているのに、時代のしるしは見る事ができないのか。よこしまで神に背いた時代の者たちにはしるしをほしがるが、ヨナのしるしのほかに、しるしを与えられない。そして、イエスは彼らを後にして立ち去られた。（16：1-4）

マガダン地方でイエスを待っていたのは、ファリサイ派とサドカイ派でした。彼らは「天からのしるしを見せてほしい」と言ったのです。つまり、奇蹟を見せろというのです。イエスは、天気のことなら見分け方を知っているのに、時代のしるしは見る事ができないのかと言われます。「時代のしるし」とは、イエスの到来したこと自体が天のしるしだということです。そして、旧約聖書の「ヨナのしるし」以外は与えられないとおっしゃいます。ヨナというのは、ヨナという人が三日三晩大魚の腹の中において無事だったという話です。ここでヨナが登場するのは、イエスが十字架にかかったときに三日後に復活したことを想起させているのです。

*サドカイ派

当時ファリサイ派と勢力を張り合っていた一派。貴族や富裕な者が多く、議会でも大きな力を持っていた。

【ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種】
（16：5-12）

弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れていた。イエスは彼らに、「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種によく注意しなさい。」と言われた。弟子たちは、「これはパンを持ってこなかったからだ」と論じていた。イエスはそれに気づいて言われた。「信仰の薄いものたちよ、まだ分からないのか。覚えていないのか。パン五つを五千人に分けたとき、残りを幾籠に集めたか。また、パン七つを四千人に分けた時は、残りを幾籠に集めたか。パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか。ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に注意しなさい。」そのときようやく、弟子たちは、イエスが注意を促されたのは、パン種のことではなく、ファリサイ派とサドカイ派の人々の教えのことだと悟った。（16：5-12）

イエス一行は舟に乗ってガリラヤ湖の向こう岸へ移動しました。その中で、イエスは「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種（パンを作るためのイースト菌）によく注意しなさい。」と弟子たちに言われます。ところが、弟子たちは出発のとき、パンを持って来るのを忘れてしまい、そのことばかり気にしているのです。イエスの言葉もパンを持って来なかったから叱られたと思っています。

イエスは、二度も経験した五千人と四千人の群衆を満腹にした出来事を忘れたのかといさめられます。イエスの言葉は、ファリサイ派やサドカイ派の教えに影響されると、それがパン種のように心に膨らんで、イエスの教えを見失ってしまうという警告だったのです。

【ペトロ、信仰を言い表す】（16：13-20）

イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は人の子のことを何者だと思っているか」とお尋ねになった。弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』という言う人も、『エリアだ』という人もいます。ほかに、『エレミアだ』とか、『預言者の一人だ』という人もいます。」イエスは言われた「それでは、あなたがたはわたしを何者だというのか。」シモン・ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です。」と答えた。すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたはあなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」それから、イエスは、御自分がメシアであることを誰にも話さないように、弟子たちに命じられた。（16：13-20）

次にイエス一行が向かったのは、ヨルダン川の水源近くのフィリポ・カイサリア地方。その時、イエスは弟子たちに「人々は人の子のことを何者だと思っているか」と言われました。（「人の子」という呼び方はメシア（救世主）の称号です）最初は「洗礼者ヨハネ」という答えです。しかし、洗礼者ヨハネはイエスがやって来る道を準備する者ではありませんでした。次は「エリア」です。旧約時代の預言者の中でも最も偉大な者です。次は「エレミア」これも旧約時代の預言者で、苦難の預言者として、「苦難のしもべ」と後に呼ばれるイエスに最も似た人物です。それから「預言者の一人」はこれまでに出現した預言者エリアやエレミアなどのような預言者という思いでの発言でしょう。

次にイエスは、弟子たちがイエスを何だと思っているかを尋ねられました。するとシモン・ペトロが「メシア、

生ける神の子」と答えました。イエスは、シモンを「シモン・バルヨナ（漁夫ヨナの子シモン）」と彼を呼び、今のメシアであるとの発言は天の父によって与えられたと言われました。そして、ペトロが今後教会を築いていくことを預言され、イエスがメシアであることは誰にも話さないようにと弟子たちに命じられたのです。ここで、「イエスはメシア」であるという弟子たちの共通認識が生まれたのですが、実際は、ユダヤをローマから取り返す軍事的メシアだと考えている者たちがほとんどだったのです。

【イエス、死と復活を予告する】（16：21-28）

このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始めた。すると、ペトロはイエスを脇にお連れして、諫め始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をするもの、神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、弟子たちに言われた。「わたしについてきたいものは、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思うものは、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。人の子は、父の栄光に輝いて天使たちとともに来るが、そのとき、それぞれの行ないに応じて報いるのである。はっきりしておく。ここに一緒にいる人の中には、人の子がその国とともに来るのを見るまでには、決して死なないものがある。」

弟子たちに、御自分がメシアだと話されたイエスは、今後の苦しい道のりを打ち明けられるようになりました。弟子たちは驚き、ペトロは「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」とイエスを諫めます。メシアであり、神の子であるイエスがユダヤ教の指導者たちに殺されるわけがないとペトロは思ったのでしょうか。しかも、三日目に復活するという荒唐無稽な出来事があるわけがないとイエスを諫めたのです。すると、イエスは「サタン、引き下がれ」と強い口調でペトロを叱責されました。そして、弟子たちに、自分中心の生活を棄て、イエスについて行くように。もし全世界を手に入れても、自分の命を失ったら意味がない。イエスは死んで、三日目に復活するが天に帰る。そして、今度は父の栄光に輝いて天使たちと一緒に戻ってくる。そのときには、それぞれの行ないに応じて最後の審判を受ける。そして、この中には、イエスの再来を見るまで、決して死なない者がいると語られました。

17章

17章

【イエスの姿が変わる】（17：1-13）

六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨセフだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。ペトロが口を挟んでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、もう一つはエリヤのためです。」ペトロがこう話しているうちに、光輝く雲が彼らを覆った。すると「これはわたしの愛する子、わたしの心に適うもの。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。イエスは近づき、彼らの手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」彼らが顔を上げてみると、イエスのほかには誰もいなかった。

「一同が山を下りるとき、イエスは「人の子が死者の中から復活するときまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。彼らはイエスに、「なぜ律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。イエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを元どおりにする。言うておくが、エリヤは既に来たのだ。人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、そのように人々から苦しめられることになる。」そのとき、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。（17：1-13）

その六日後、イエスは弟子の中で中心的な三人を伴って高い山に登られました。そこで、イエスの姿が輝き、さらにモーセとエリヤが現れてイエスと語り合いました。それを見ていたペトロは感激して「ここに三人のために小屋（仮小屋とあるが、ちゃんとした住まいのこと）を建てましょう」と言います。ペトロはそこに自分たちもずっといることが出来たら幸せだと考えたのです。しかし、これは永遠に続くことではなく、弟子たちは地上の暮らしへと帰っていかなくてはなりません。そこへ雲の中から「これは私の愛する子」という神の声が聞こえました。弟子たちは、イエスが神の子であることを改めて知らされ、確認したのです。

山を下りるとき、イエスはこのことを復活するまで話してはならないと命じられました。今はこのような幻想的、非日常的なことを語るのではなく、共に日常を過ごしながら宣教することが求められるからでしょう。

そのあとのエリヤについての質問で、イエスは、エリヤは既に来たとおっしゃっています。それを聞いて、弟子たちは洗礼者ヨハネがエリヤ（の生まれ変わり）であり、イエスの先触れとしてやって来たのだとわかったのです。

【悪霊に取りつかれた子をいやす】（17：14-20）

一同が群衆のところへ行くと、ある人がイエスに近寄り、ひざまずいて、言った。「主よ、息子を憐れんでください。てんかんでひどく苦しんでいます。度々火の中や水の中に倒れるのです。お弟子たちのところに連れてきましたが、治すことができませんでした。イエスはお答えになった。「何と信仰のない、よこしまな時代なのか。いつまでわたしはあなたがたとともにいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をここに、わたしのところに連れて来なさい。」そのとき子供はいやされた。弟子たちは密かにイエスのところに来て、「なぜ、わたしたちは悪霊を追い出せなかったのでしょうか」と言った。イエスは言われた。「信仰が薄いからだ。はっきり言うておく。もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって『ここから、あそこに移れ』と命じても、その通りになる。あなたがたにできないことは何もない。」（17：14-20）

山へ登っていたイエスと三人の弟子が群衆のところへ戻って行くと、てんかんで苦しんでいる息子を持った母親がいて、イエスに弟子たちでは治せなかったことを話し、憐れんでくださいと訴えました。先ほど体験した神々しい場面とは反対側にあるような人々の苦しみがそこにはありました。イエスは御自身でその子をいやされました。

イエスは、この世に対して、信仰のない、よこしまな時代かとなげかれ、いつまでも私がいるわけではないのとおっしゃいます。「いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか」という言葉は、決して人々を嫌っている言葉ではありません。弟子たちに対して、弟子たちでさえ信仰が薄いことを嘆いておられるのです。一粒で大きく成長するからし種一粒の信仰があれば、信仰が成長して、どんなこともできるようになるのだと諭されています。十分に信じる事ができれば、山を移すことさえ可能なのだと、イエスは言われます。信仰によってそのようなことができるのか。信じてさえいれば力のないどんな者にも山を移すことができるのだと教えられるとき、困った時の神頼みであっても、一心に信じる時、神はそれを叶えてくださるのだと忘れずにいたいと思います。心に一枚の絵を描くように、あなたの希望が叶った時を、心の目で見て信じてみませんか。それこそが、祈りを叶える第一歩だと私は思っています。

【再び自分の死と復活を予告する】（17：22-23）

一行がガリラヤに集まったとき、イエスは言われた。「人の子は人々の手に引き渡されようとしている。そして殺されるが、三日目に復活する。」弟子たちは非常に悲しんだ。(17:22-23)

イエスから、二度目の死と復活の予告がされました。もう、イエスを諷める者はいません。弟子たちはただ悲しむばかりでした。

【神殿税を納める】(17:24-27)

一行がカファルナウムに来たとき、神殿税を集める者たちがペトロのところに来て、「あなたたちの先生は神殿税を納めないのか」と言った。ペトロは、納めますと言った。そして家に入るとイエスの方から言い出された。「シモン、あなたはどうか。地上の王は、税や貢ぎ物を誰かから取り立てるか。自分のこどもたちからか、それともほかの人々からか。」ペトロが「ほかの人々からです」と答えると、イエスは言われた。「では、子供たちは納めなくてよいわけだ。しかし、彼らをつまづかせないようにしよう。湖に行って釣りをしなさい。最初に釣れた魚を取って口を開けると、銀貨が一枚見つかるはずだ。それを取って、わたしとあなたの分として納めなさい。」(17:24-27)

神殿税とは、エルサレムの神殿維持にかかる多額の経費のために集められる税金です。二十歳以上の男性から納めることになっていました。納税はアダルの月(今の2、3月ごろ)の十五日にエルサレム以外の地ではじまります。それはちょうど過越祭が近づいたところになります。

この神殿税について、イエスは、「彼らをつまづかせない」ために支払おうとおっしゃっています。これは、神殿を重んじるユダヤ人が信仰につまづく(信仰を失う、疑うようになる)ことのないようにと考慮されているのです。イエスは、神殿を絶対的なものとは見ておらず、その意味でも払う必要はないと考えておられました。また、ペトロに税や貢ぎ物は誰かから取り立てるかと質問して、子どもは納めなくてよいと話しておられますが、それは、神殿が神がいらっしゃるところならば、神の子であるイエスは払う必要はないはずだという意味です。

釣りに行って魚から銀貨が出て来る話は、次のような話をもとにしていると言われています。「あるお金持ちが全財産を宝石に変えて船旅に出たところ、嵐にあつて宝石を海中に落としてしまった。しかし、その後市場で魚を買うと、その口中からなくなった宝石が出て来た」という話です。また、「ある貧しい仕立て屋が贖罪日の断食の後、一番高価な魚を買ったところ、その中から宝石が見つかり、以後幸福に暮らした」という話もあります。このような様々な地方の話がイエスの話と結びついて聖書に書かれているのです。

18章

18章

【天国でいちばん偉い者】（18：1－5）

そのとき、弟子たちがイエスのところにきて、「一体誰が天国で一番偉いのでしょうか」と言った。そこでイエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、言われた。「はっきり言うておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天国で一番偉いのだ。わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れるものは、わたしを受け入れるのである。」（18：1－5）

「そのとき」と話が始まっていますが、それは、前項の神殿税の件に続いてということでしょう。このとき、役人がペトロに神殿税を請求しました。ペトロが一行の頭であると見たからです。そこから、「一体誰が天国で一番偉いのでしょうか」という問いがイエスに向けて放たれたのです。

イエスは、天国へ入る条件として「子供のようにならなければ、決して天国に入ることはできない」と説明します。では、「子供のように」とはどういう意味でしょうか。それは、現代で考えられるような子どもの無邪気さや素直さを言っているのではなく、当時は生産性がない無価値な存在として考えられていました。子供は社会的地位を持たず、また求めず、自らが無力ゆえにかえって他者（親などへの100%の信頼を持って生きていますと考えられていたのです。天国へは、社会的地位や財産は持っていけないのです。では、子供しか天国へ行けないのでしょうか。それは違います。子どもは無自覚にそのような存在であるのです。大人は「自分を低くして」へりくだり、子どものようにになれる者だけが天国に入ることができるのです。イエスを信じて子供のように神への信頼を持って生きる道が天国への道であり、天国で一番偉い者は、そこでへりくだって、神を信じて生きる人なのです。

【罪の誘惑】（18：6－9）

「しかし、わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまづかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである。世は人をつまづかせるから不幸だ。つまづきは避けられない。だが、つまづきをもたらす者は不幸である。もし片方の手が足があなたをつまづかせるなら、それを切ってしまうなさい。両手両足がそろったまま永遠の火に投げ込まれるよりは、片手片足になっても命にあずかる方がよい。もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出してしまいなさい。両方の目がそろったまま火の地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になって命にあずかる方がよい。」

他人をつまづかせる者について語られています。「つまづかせる」とは「イエスのもたらした福音の信仰から脱落させること」「神を信じられなくすること」を指します。前項の「受け入れる」の反対ということなのです。そのような行為に対して、イエスは、鋭く激しい通告を送っています。溺死をする刑が書かれています。これはユダヤの刑ではなく、ローマの刑でした。それだけ重い刑に値すると語っています。人をつまづかせた肢体を持って生きるより、そこを切り落とせという厳しい勧告です。こんなことを言われたら、恐ろしくなります。こんな宗教はごめんだと思うかもしれませんね。他人をつまづかせることがどれだけ罪になるかを知り、神にまっすぐ目を向けていくことが教えられているのです。

【「迷い出た羊」のたとえ】（18：10－16）

「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言うておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出たその一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言うておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」（18：10－16）

この「迷い出た羊」のたとえは、古くからあった「イエス言行録」にあったもので、マタイがそれを土台にしてここに書いています。小さな者を軽んじないという話から、たとえ話は始まっています。つまり、たとえで言いたいことを先に語っています。百匹の羊を率いている羊飼いが、迷い出た一匹の羊を探しに出かけます。羊の群れには、2、3人の羊飼いがついていたので、残りの九十九匹は立ち往生したわけではありません。羊は私たちに実感できませんが、当時は大切な持ち物でした。羊が死んでしまい持ち帰れない場合は、毛や骨を持って帰って、死んだことを証明しなければいけなかったほどです。雇い主に報告をするためです。当時の羊飼いは羊の頭一頭に名前を付けるほど、大事にしていたそうです。

迷い出た羊、百匹のうちの一匹は、百分の一ではなく、やはり一匹の価値があるのです。「一匹くらいいなくてもいい」とは考えないのです。個人の尊厳と価値を知ることがここで語られています。

【兄弟の忠告】（18：15－20）

兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら

、兄弟を得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人が徴税人と同様に見なさない。

はっきり言うておく、あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなぐらば、わたしの天の父がそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（18：15-20）

ここでは、罪を犯した者に対して忠告すべきこと、そして赦してやるべきことを勧め、こうして人は互いに励まし寛容を保ちつつ生きることを教えられています。罪を犯した兄弟（全人類）を見捨てず、兄弟に接していき、最後に教会へ連れて行っても言うことを聞き入れなければ「異邦人が徴税人と同様に見なさない。」とありますが、それはまた努力すれば罪を犯す前の状態に戻れることを書いています。そして、戻ることを拒否することも人間には出来ることも語られます。神様は、その前の羊の話のように、一人一人を大事にされるのです。

後半は、どんな願い事（ここでは、まず罪の償いですが、すべてのことにも言えることです）も二人が共に祈るなら叶うこと、そして、私の名（イエスの名）で集まることには、神はそこにおられることが書かれています。これが、もっと大人数になることで、教会がうまれるのです。そこには、イエス（神）がおられるのです。教会は、イエスを慕う人の集まりなのです。

【「仲間を赦さない家来」のたとえ】（18：21-35）

そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ兄弟がわたしに対して罪をおかしたなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」イエスは言われた。「あなたに行っておく。七回どころか七十倍までも赦しなさい。そこで、天国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。決済し始めたところ、一万タラント借金をしている家来が、王の前に連れて来られた。しかし、決済できないので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待って下さい。きっと全部お返しします』としきりに頼んだ。その家来の主君は憐れみを、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。しかし、承知せず、その仲間を引っ張って行き、借金を返すまで牢に入れた。仲間たちは、この事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。そこで、主君はその家来を呼びつけて行った。『不屈きな家来だ。お前がたのんだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではないか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を老役人に引き渡した。あなたがたの一人一人が心から兄弟を赦さないのなら、わたしの天の父もわたしの同じようになるためであろう。」（18：21-35）

ペトロが「罪を何度まで赦したらいいのでしょうか」とイエスのところ来て聞きました。当時、ユダヤ教のラビたちは、赦すのは三度までと教えていたようです。ペトロはそれより多い「七度までですか。」と言うと、イエスは「七十倍までも赦しなさい」とおっしゃいました。

それから、たとえ話を始められます。一万タラントは、当時の労働者の一日の賃金が一タラントでしたから、途方もなく大きな金額です。比較的豊かなガリラヤの総収入ですら三百タラントでした。百デナリオンは一万タラントの六十万の一です。数字を見てこの家来のひどさがよくわかると思います。

七十倍赦すとは何度でも心から赦すことを現した数字です。回数や嫌々赦すのではなく、自分が赦されたゆえ、相手を赦すことが書かれています。そして、この家来のように、自分は赦されたのに他人を赦さない人は天からの怒りをかうことになるのです。

19章

19章

【離縁について教える】（19：1－12）

イエスはこれらの言葉を語り終えると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こう側のユダヤ地方に行かれた。大勢の群衆が従った。イエスはそこで人々の病気をいやされた。ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは律法に敵っているのでしょうか」と言った。イエスはおこたえになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女にお造りになった。」そして、こうも言われた。「それゆえ、父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださった者を、人は離してはならない。」すると彼らはイエスに言った。「では、なぜモーセは、離縁状を渡して離縁するように命じたのですか。」イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁すると赦したのであって、初めからそうだったわけではない。言うておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる。」弟子たちは「夫婦の間柄がそんな者なら、妻を迎えない方がましです。」と言った。イエスは言われた。「誰もがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者がいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」（19：1－12）

イエス一行は、ヨルダン川の向こう側のユダヤ地方にいかれました。そこで、多くの群衆がいる前で、ファリサイ派の人たちから問答を吹かけられました。洗礼者ヨハネは、領主ヘロデ・アンティパスの離婚と再婚を非難したために捕まって亡くなりました。ここでも、ファリサイ派は、イエスを非難する口実となる発言を期待していたのです。紀元二世紀の有名なラビ・アキバは、人が妻を「気に入らなくなった場合」今の妻より好きな女、美しい女を見つけた場合には離婚できると教えていたそうです。女性は本当に弱い存在でした。

さて、イエスは、人間が神により創造された時までさかのぼり、神が結び合わせてくださったものを、人は話し手はならない。と説明されました。しかし、ファリサイ派は、それならばモーセの教えに離縁状があるのはなぜかと食い下がってきます。

イエスは、この離縁状は、のちに離婚を許したのであって、最初からある者ではないこと、人々の心が頑固だったため、不法な結婚以外は本来離婚してはならないのだと言われました。付け加えて、「結婚できないように生まれついた者（生まれつき障がいがあって、結婚できない者）」「人から結婚できないようにされた者」（宮廷の寢室に仕える宦官など）「天の国のために結婚しないもの」（聖職者として結婚をしない者）、このような者は独身で生きていくことを話されていました。そして、結婚を受け入れることの出来る人は、受け入れなさいとおっしゃっています。

【子どもを祝福する】（19：13－15）

そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくため、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。（19：13－15）

当時、高名なラビのところへ行って子どもの祝福を頼むことは、しばしばありました。それで、イエスのところにも、子どもを連れてきた母親たちがあつまってきたのでしょうか。うまれたばかりの赤ん坊から幼児くらいの小さな子どもたちだったと思われます。弟子たちは、イエスが疲れているのではと気遣って、その人たちを遠ざけようとしていました。しかし、イエスは、「天の国はこのような者たちのものである」と子どもに祝福を与えて、そこを立ち去られたのです。

子どもへの祝福とは、頭などに手を置き、今後の成長と幸福を祈ることです。

【金持ちの青年】（19：16－30）

さて、一人の男がイエスにちかよってきていった。「先生、永遠の命を得るには、どんなころをすればよいのでしょうか」イエスは言われた。「なぜ、善いことについて、わたしにたずねるのか。よい方はお一人である。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」男が「どの掟ですか」と尋ねると、イエスは言われた。「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。」そこで、この青年は言った。「そういうことはみな守ってきました。まだ何かかけているのでしょうか。」イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさん財産を持っていたからである。

イエスは弟子たちに言われた。「はっきり言うておく、金持ちが天の国に入るのは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」弟子たちはこれを聞いて非常に驚き、「それでは、誰が救われるのだろうか」イエスは彼らを見つめて、「それは人間には出来ることではないが、神は何でも出来る」と言われた。すると、ペトロがイエスに言った。「この通り、私たちは何もかも捨ててあなたに従って参りました。では、わたしたちは何をいただけるのでしょうか。」イエス

は一同に言われた。「はっきり言うておく。あなたがたも、わたしに従って来たのだから、十二の座に座ってイスラエル十二部族をおさめることになる。わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者はみな、その百倍もの報いを受ける。しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」（19：16－30）

イエスのところへ一人の青年がやってきました。どうしたら永遠の命を得ることができるのかを聞きに来たのです。青年に、イエスはモーセの十戒から、日々守るべきことを教えられました。それは青年が小さなころから教えられ、今まで守ってきたことででした。青年は「まだ何かが欠けているのでしょうか」と言いました。その青年に、イエスは、完全になりたいなら財産を売り払い、貧しい人々に施しなさい。それから私に従いなさいと言われました。青年は富への執着を棄てることができず、イエスのもとから去っていったのでした。
*モーセの十戒 旧約聖書に書かれている神様からいただいたユダヤ人の根本的な掟。

イエスは、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」と弟子たちに教えられました。「らくだが針の穴を通る」とは、特に慣用句があったのではなく、イエスが御自分でおっしゃった言葉のようです。ユーモアがありますが、どれだけ難しいことか、らくだの大きさをよく知る弟子たちは実感したでしょう。

「それでは、誰が救われるのだろうか」「それは人間には出来ることではないが、神は何でも出来る」という会話は、神様は全能であること、そして神の国に入るには、人間的な視点による区別ではないことを語っています。

さて、そこでペトロが、自分たちはすべてを棄てて従ってきたのですが、一体何をいただけるのでしょうかとイエスに聞きました。イエスは「わたしに従ってきたのだから、天の国では優遇されると話されます。最後に「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」とおっしゃっています。」水戸黄門の歌のような言葉ですが、順番を決められるのは神様であり、神様のお考えは私たちには分からないものなのです。

20章

20章

【「ぶどう園の労働者」のたとえ】（20：1-16）

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると何もしないで広場に立っている人がいたので、『あなたもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と行った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにもまた出かけて行き、同じようにした。五時頃にも行ってみると、ほかの人々が立っていたので『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると彼らは『誰も雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者を順に呼んで、最後に来た者からはじめて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時頃に雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は一時間しか働きませんでした。丸一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと、この連中とを同じ扱いをするのとは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたのではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたたちと同じように支払ってやりたいのだ。自分の者を自分のしたいようにしては、いけないのか。それともわたしの気前のよさをねたむのか。』（20：1-16）

ぶどう園で働く労働者の賃金をめぐる話。雨期をすぐ後に控えた、忙しい収穫期には毎年、このようにたくさんの労働者を必要とされたそうです。日雇いの労働をしていたものには、おなじみの光景だったようです。

さて、労働が終わって賃金を渡す時間になりました。本文に書いてあるように、主人は朝から働いた者も、五時から働いた者へも一律に1デナリオンを渡しました。早くから働いた者が文句を言うのは当たり前でしょう。しかし、よく考えると、朝からの労働者は、1日1デナリオンという約束をして働きました。9時頃に雇った労働者には「ふさわしい賃金を払ってやろう」と言っています。そのあと、12時ごろと3時頃も同じように言われています。最後に雇った者には賃金のことは言っていない。だから、一律に賃金が払われたことに対しては、異議の申し立てる権利はないのです。

もし私が、朝から働いていたら、やっぱり文句を言うでしょう。そして損をした気分になるでしょう。しかし、これはたとえ話です。このぶどう園は神の国なのです。神様からの報酬は人間の行為によって左右されるものではないのです。

私は、このたとえをこのように解釈してみました。この主人は優しい人でした。遅くからいっても立っていた人は「誰も雇ってくれないのです」と言います。働かなければ当然お金はもらえません。もしかしたら、妻と子どもたちが彼を待っているかもしれませぬ。ほかの者も、朝一番の仕事を得ることができなくて、がっかりしていたところに声をかけられたのではないのでしょうか。そのような不安な気持ちを考えて、主人は一律に賃金を払ったのです。神様は、こんな労働者の悲しみに敏感な方だと思います。

このたとえも、前項と同じ「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」という教えなのです。

【イエス、三度の復活を予告する】（20：17-19）

イエスはエルサレムへ上って行く途中、十二人の弟子だけを呼び寄せて言われた。「今、私たちはエルサレムへ上って行く。人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告し、異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架に付けるためである。そして、人の子は三日目に復活する。」（20：17-19）

イエス一行はエルサレムへ向かっていました。その途上で、イエスは十二弟子だけに三度目の受難と復活の予告をなさいました。エルサレムに行けばイエスの話すようなことが起きると、弟子たちの何人が思っていたでしょうか。私は、十二人全員がまだ、その予告が現実になると思っていなかったと想像します。まだ、この時期は多くの人がイエスに従っていたし、奇蹟もたくさん起こしてきたのですから。

【ヤコブとヨハネの母の願い】（20：20-28）

そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。イエスが「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座におつきになるとき、この二人の息子がひとりあなたの右に、もう一人は左にすわれるとおっしゃってください。」イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何をねがっているか、わかっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かにあなた

がたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に赦されるのだ。」ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人が権力をふるって言う。しかし、あなたがたの中でえらくなりたいものは、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が、支えられるためではなく支えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を捧げるためにきたのと同じように。」
(20:20-28)

エルサレムへの途上に、弟子の母がイエスに頼み事をする場面です。イエス一行は、十二使徒以外にもついてくる信徒たちがいて、その中には女性も含まれていました。弟子の母親が一緒にいてもおかしくなかったのです。母は二人の息子がよい地位になるように、イエスに頼みました。その弟子たちは、イエスから私と同じ杯（これから起こる苦難をさしています）を飲むことができるかという、それが受難を現すと知らず、「出来ます」と答えています。これに対して、イエスはあなたがたは確かに杯を飲むことになる、イエスの死後の弟子たちの受難を思い、言われます。しかし、周りの者たちは、何のことか分からなかったのです。それから、天の国では、すべては神様によって定められていると教えます。

それを知って、ほかの使徒が抜け駆けだと腹をたてたので、イエスは天の国では、この世の支配とは違う基準があることを、話されます。そして、イエス（＝人の子）は仕えられるためではなく仕えるために来たのだと言われます。多く人の身代金として、自分自身の命を捧げるために来たのだと言われたのです。これは、前項で受難について教えられたのと同じことです。弟子たちには、これから何があるか、全く理解していませんでした。

【二人の盲人をいやす】(20:29-34)

一行がエリコの町を出ると、大勢の群衆がイエスに従った。その時、二人の盲人が道端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて、「主よ、ダビデの子よ、私たちに憐れんでください」と叫んだ。群衆は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます「主よ、ダビデの子よ、私たちに憐れんでください」と叫んだ。イエスは立ち止まり、二人を呼んで「なにをしてほしいか」と言われた。二人は、「主よ、目を開けていただきたいのです」と行った。イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、盲人たちはすぐ見えるようになり、イエスに従った。」
(20:29-34)

エルサレムへの途上、エリコの町を通られたイエスに大勢の群衆が従ってきました。この当時、ラビたちは歩きながら教える習慣があったので、道を歩きながら、イエスも教えられていたのかもしれませんが。そんな大勢に群衆から、イエスが通られると知った二人の盲人が大声でイエスに目を治してほしいと叫んでいました。こんなに大勢に人がいて、必死に訴える盲人に気づき、イエスのところへ連れて行く者は一人もいませんでした。イエスは二人呼んで見えるようにしてくださいました。その盲人たちも、イエスに従っていきました。これが、イエスに求める時の正しい姿勢だと言えるでしょう。イエスだからお願いする。きっと願いが叶うと信じて大声を上げる。イエスに対して願うときは、シンプルに、実現を信じて声を上げればいいのです。

21章

21章

【エルサレムに迎えられる】（21：1－11）

一行がエルサレムに近づいて、オリーブ畑沿いのベトファゲに来たとき、イエスは弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばが見つからないであり、一緒に子ロバのいるのが見つかる。それをほどこいて、わたしのところに引いて来なさい。もし、誰かが何か言ったら『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してくれる。」それは、預言者を通して言われているいたことが実現するためであった。

「シオンの娘に告げよ。

『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、』

柔和な方で、ろばに乗り、

荷を負うろばの子、子ロバに乗って。」

弟子たちは行って、イエスが命じられた通りにし、ろばと子ロバを引いて来て、その上に服をかけると、イエスがそれにお乗りになった。大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。

「ダビデの子にホサナ。

主の名によって来られる方に、祝福があるように。

いと高きところにホサナ。

イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、「一体、これはどういう人だ」と言って騒いだ。そこで群衆は、「このかたはガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言った。（21：1－11）

とうとう、イエス一行はエルサレムの近くまでやってきました。イスラエル人の大切なお祭り、過越祭が間近に迫っているので、エルサレムはたくさんの人でにぎやかでした。

エルサレムに入る前に、イエスは弟子にロバと子ロバを連れて来るように言われました。イエスは、ロバに乗ってエルサレムに入ることを決めておられたのです。それは、救世主として颯爽と馬に乗ってエルサレムに入るのではなく、性格も穏やかで小さいロバに乗って入ろうというのです。かっこよくではなく、ロバを選ばれたのは、これから起こることを暗示しているのでしょうか。

「シオンの娘」とありますが、これは神の民としてのイスラエル、またはエルサレムの町を指しています。この部分には旧約聖書のゼカリヤ書が引用されています。

祭りの熱気とともに、多くの人がイエスを歓迎しました。自分の服や木の枝を道に敷くというのは敬意を表した行動です。そして、旧約聖書の詩編からの引用がされています。ダビデの子というのは、救い主はダビデの家系から出ると古くから信じられていたからです。ホサナは「今お救いください」という意味でありイエスが話しておられたアラム語の言葉です。

ここで、群衆はイエスを歓迎しているように見えますが、彼らはローマの支配から救ってくれる救世主を求めたのであって、イエスが考えるような神様の愛を伝えるということは全く考えていなかったと言っていいでしょう。特に過越祭はイスラエル人が民族意識を昂揚させるお祭りなので、このように大騒ぎになったのです。しかし、祭司たちにはイエスの評判が高まるにつれ、イエス殺害の計画を進めるようになったのです。

*過越祭（すぎこしさい）は、イスラエルの民がエジプトで奴隷になっていた時代、神に従ってエジプトを逃れて新しい土地を目指したことに由来する祭り。旧約聖書の出エジプト記に書かれている。

【神殿から商人を追い出す】（21：12－17）

それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。そして言われた。こう書いてある『わたしの家は祈りの家と呼ばれるべきである。』ところがあなたたちはそれを強盗の巣にしている。」境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた。他方、祭司長たちや律法学者たちはイエスがなさった不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで「ダビデの子にホサナ」というのを聞いて腹を立て、イエスに言った。「子供たちが何と言っているか。」イエスは言われた。「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉はまだ読んだことがないのか。」それから、イエスは彼らと別れ、都を出てベタニアに行き、そこにお泊まりになった。（21：12－17）

エルサレム神殿の境内へ入られたイエスは、そこで商売をしている人たちを御覧になります。それは、供え物のための動物を売る店（犠牲にする動物には規定があって、祭司に見てもらう必要があった。その手間を省くために、既にお墨付きの動物を境内で売っていた）、両替商（神殿へは半シケルを捧げなければならない、それは一般には流通していない硬貨なので、両替する必要があった）が神殿当局、そしてローマ総督の承認のもとで商売をしていたのです。彼らは境内での商売で、多くの利益を上げていたのです。

その商人たちを見て、イエスは心からの叫び「わたしの家は祈りの家と呼ばれるべきである。ところがあなたたちはそれを強盗の巣にしている。」と発しながら、商人たちの店を壊し、彼らを追い出してしまわれました。この部分は古くから「宮清め」という呼び方をします。イエスにとって（ユダヤ教徒にとっても）聖なる場所であるはずの境内が、お金を稼ぐ場所になっていたのです。イエスの深い怒りと悲しみを読み取れる箇所です。また、私たちは、イエスのこのような激しいお姿を見て、驚いてしまいます。優しく愛情に満ちた今までのイエスの様子とは、ずいぶん違います。それだけに、ここでの怒りがどんなに強いものだったかが想像されます。

その騒ぎから解放されると、イエスは境内にいる障がい者達をいやされました。その奇蹟を見て、大人から子供までが「ダビデの子にホサナ」と叫びました。その歓喜の声に、祭司長や律法学者たちは腹を立てました。イエスは、彼らと別れ、都を出てベタニアにお帰りになりました。過越祭で宿泊所は人がいっぱいなので、すぐ近くのベタニヤに宿を取られていたのです。

【いちじくの木を呪う】（21：18-22）

朝早く、都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。道端にいちじくの木があるのを見て、近寄られたが、葉のほかは何もなかった。そこで「今から後いつまでも、おまえには実がならないように」と言われると、いちじくの木はたちまち枯れてしまった。弟子たちはこれを見て驚き、「なぜ、たちまち枯れてしまったのですか」と言った。イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことが出来るばかりでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言っても、その通りになる。信じて祈るならば、求める者は何でも得られる」
(21：18-22)

この物語は、イエスの奇蹟が破壊的に用いられた、福音書中唯一の例です。それだけに、読者には戸惑う気持ちかわいて来るのではないのでしょうか。

イエスがいちじくを欲せられた季節は、いちじくの実のなる季節ではありませんでした。それなのに、葉だけを茂らせていかにも実があるように見えるいちじくに、イエスは腹を立てられます。ここでは、いちじくの実がイスラエルへの強い非難に例えられています。つまり、一見正しい道を歩んでいるように見えるイスラエルの信仰が、実際は実のない空虚な者になっているということを語っているのです。

いちじくの話から派生して、イエスは山をも動かす信仰について語られます。「信じて祈るならば、求める者は何でも得られる」逆に言えば、だめだろうけどと最初から諦めて祈っても何も叶わないのです。積極邸に求め信じてこそ、祈りはひとりごとではなく、力あるものとなるのです。

【権威についての問答】（21：23-27）

イエスが神殿の境内に入って教えておられると、祭司長や民の長老たちが近寄って来て言った。「何の権威でこのようなことをしているのか。誰がその権威を与えたのか。」イエスはお答えになった。「では、わたしも一つ尋ねる。それに答えるなら、わたしも、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。ヨハネの洗礼はどこからのものだったか。天からのものか、それとも人からのものか。」彼らは論じ合った。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と我々に言うだろう。『人からのものだ』と言えば、群衆が恐い。皆ヨハネを預言者だと思っているから。」そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。するとイエスも言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」
(21：23-27)

イエスが境内で教えていること、前日の宮清めの騒動をみて、イエスのもとへ「サンヘドリン」（祭司長や長老達のユダヤ教の中央会議）の者達がやってきます。この時代は、エルサレムで説教をするなどの行為は、すべてサンヘドリンのもとに行なわれていたのに、イエスはそのような許可を取っていないばかりか、騒動を起こしたからです。彼らは「何の権威でこのようなことをするのか」とイエスに迫ります。

それに対して、イエスは先に質問をされます。「洗礼者ヨハネの洗礼は天からのものか人からのものか」サンヘドリンの人たちは、どちらに答えても自分たちに禍いが起こることを恐れ「分からない」と答えるのです。情けない答えです。結局、彼らは本当の信仰から生きているのではなく、いつも自分の保身を考えて生きていることが明らかになったのでした。

【「二人の息子」のたとえ】（21：28-32）

「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄の所へ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。兄は『いやです』と答えたが、後で考え直してでかけた。弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、でかけなかった。この二人のうち、どちらが父親の望み通りにしたか。」彼らが「兄の方です」と言うとイエスは言われた。「はっきり言うておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人は娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見て後で考え直して彼を信じようとしなかった。」
(21：28-32)

イエスは、たとえで皆を教えられます。父親が息子達にぶどう園へ行って働くように言います。兄は拒否するも、考え直して出かけます。これは、洗礼者ヨハネが来たけれど、すぐには出かけなかった人です。弟は父に対して、承知しましたと言いながら出かけませんでした。彼は、前に登場したいちじくの木と同じで、見せかけだけです。

徴税人や娼婦達（当時差別されていた人たち）の方が、洗礼者ヨハネを信じたが、あなたがたはそこで信じなかった。このままでは、枯れたいちじくと同じようになるとイエスは警告されているのです。

【「ぶどう園と農夫」のたとえ】（21：33-46）

もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、それを農夫たちに貸して旅に出た。さて、収穫の 때가近づいたとき、収穫を受け取るために、僕たちを農夫の所へ送った。だが、農夫たちはこの僕たちを捕まえ、一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。また、他の僕を前よりも多く送ったが、農夫たちは同じ目に遭わせた。そこで最後に、『わたしの息子ならば敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を送った。農夫たちは、その息子を見て話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしてしよう』そして、息子を捕まえ、ぶどう園にほうり出して殺してしまった。さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするだろうか。」彼らが言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は季節ごとに収穫を納めるほかの農夫に貸すにちがいない」イエスは言われた。聖書にこう書いてあるのを、読んだことがないのか。

「家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった。
これは、主がなされたことで、
あなたたちの目には不思議に見える。」

だから、言うておくと、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石が誰かの上に落ちれば押しつぶされてしまう。」
祭司長やファリサイ派の人々はこのたとえを聞いて、イエスが自分たちのことを言うておられると気づき、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と思っていたからである。
(21：33-46)

このたとえが、具体的に何を言っているのか、かんがえてみましょう。ここに出てくる「ぶどう園の主人」は神様を表します。「ぶどう園」はイスラエルの民です。「農夫たち」はイスラエルの宗教的指導者たち（サンヘドリン）。「主人が送り出す僕たち」は預言者たち。「主人の息子」は救世主であるイエスです。ひどい目にあって殺されてしまう息子の死は、そのままイエスがこれから受ける受難を表しているのです。

「家を建てる者の捨てた石、それが隅の親石になった」とは、受難をへて死んで、復活するイエスが教会の土台になることを言っているのです。祭司長たちは、たとえを聞いてすぐに自分たちのことを言っていると感じたようです。

22章

22章

【「婚宴」のたとえ】（22：1-14）

イエスは、また、たとえを用いて語られた。天の国には、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。王たちは家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。そこでまた、次のように言って、別の家来たちを遣いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においで下さい」』しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また他の人々は王の家来を捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。そして、家来たちに言った。『婚礼の用意はできているが、招いておいた人々はふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけたものは誰でも婚宴に連れて来なさい。』そこで、家来たちは大通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚礼は客でいっぱいになった。王が客を見ようと入ってくると、婚礼の礼服を着ていないものが一人いた。王は『友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか』と言った。この者が黙っていると、王は側近の人たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう』招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。』（22：1-14）

今度のたとえの場面は、婚礼の宴です。婚礼に来ようとしないう人々は、イエスの言葉を真剣に聞こうせずに、日常生活（畑、商売に行ったり、招きを無視したり）に埋没して、自分の計画や都合を優先させる人に対する警告だと思われます。招待した人々が来ないので、王は通りにいる人たちを連れて来るように言います。そこには、異邦人も含まれるでしょう。しかし、一人の客が礼服を着ていないと指摘されます。通りを歩いていて入ってきたのだから、仕方ないことだと思うのですが、王は彼を縛って外へほうり出してしまいます。これは、呼び止められ列席した人（救いがあると入ってきた人）が必ずしも救われるとは限らないということを示しているそうです。でも、私は納得できない気持ちになります。どう思われますか。

また、ここではこのようなことも考えられます。招かれた人たちは、「善人も悪人も皆集めて来たので」とあります。これは、教会というものをよく表していると思います。教会へ行くのは偉い人、ちゃんとした人という誤解が一般的にあるようですが、決してそうではありません。教会も人の集まりなのだから、いろんな人がいて、どんなことでも起きうるのです。（ただし、教会で礼服を着て来ないと注意されることはありませんから、安心してください。）

【皇帝への税金】（22：15-22）

それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談した。そして、その弟子をヘロデ派の人々と一緒にイエスの所に遣わして尋ねさせた。「先生、私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、誰もばばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。ところで、どうお思いでしょうか、教えてください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、敵っていないでしょうか。」イエスは彼らの悪意に気づいて言われた。「偽善者たち、なぜ、わたしを試そうとするのか。税金に納めるお金を見せなさい。」イエスは「これは、誰の肖像と銘か」と言われた。彼らは、「皇帝のものです」と言った。するとイエスは言われた。「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らはこれを聞いて、驚き、イエスをその場に残留して立ち去った。（22：15-22）

たとえ話が一段落ついたところへ、こりないファリサイ派の人々がやってきました。心にもないお世辞を言った後に尋ねたのは「皇帝に税金を納めるのは律法に適っていますか」というものでした。当時のユダヤはローマに支配されていたので、憎いローマへの税金を払うまいとする運動も広がっていました。イエスが払うと言っても、払わないと言っても、群衆たちを敵に回すように仕組まれた質問でした。しかし、イエスはそれをすんなりと乗り越えました。彼らは帰っていくしかありませんでした。

【復活についての問答】（22：23-33）

その同じ日、復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスに近寄って来て尋ねた。「先生、モーセは言っています。『ある人が子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけなければならない』と。さて、私たちのところに、七人の兄弟がいました。長男は妻を迎えましたが死に、跡継ぎがなかったのでその妻は弟に残しました。次男も三男も、次いで七人と同じようになりました。最後にその女も死にました。すると復活のとき、その女は七人のうちの誰の妻になるのでしょうか。皆その女を妻にしたのです」イエスはお答えになった。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている。復活のときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。死者の復活については、神があなたたちに言われた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚いた。（22：23-33）

さて、今度はサドカイ派がやってきました。そして、次々に七人の兄弟の妻になった女性は、復活のとき誰の妻になるのか？と尋ねました。

イエスはサドカイ派に対して「聖書も神の力も知らない」と厳しい批判をされます。そして、復活のときはもはや結婚、出産、死亡などとは無縁の存在になり、天使のようになると教えられました。これは天国では、単にこの世の延長でなく、人々は時間に限られた肉体を超越した、新しい人間関係を生きるということです。更に、神が言われた言葉を旧約聖書から引用されます。ここに出てくる人々の名は、ずっと昔に、ユダヤ民族の中心にいた人々です。神はその人たちと今もつながっていることをこのように先祖の名前をあげ、生きている者に正しい神であることを示しておられるのです。

【もっとも重要な掟】（22：34－40）

ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。そのうちの一人、律法の専門家がイエスを試そうとして訪ねた。「先生、律法の中で、どの掟がもっとも重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい』これがもっとも重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者はこの二つの掟に基づいている。」（22：34－40）

サドカイ派が問答に負けたと聞いて、またファリサイ派の人たちが集まってきました。そして「律法の掟の中でどれが一番重要か」と尋ねてきました。最も重要なことをと、ファリサイ派は聞いたのですが、イエスは二つの聖句（聖書の言葉）をあげられました。これは、神への愛と隣人への愛は切り離して考えることが出来ないからです。私たちは神によって愛を浴びるように受け、その愛を持って隣人を愛することが出来るのです。ゆえに、重要な掟は二つなければだめなのだと教えられたのです。

【ダビデの子についての問答】（22：41－46）

ファリサイ派の人々が集まって来たとき、イエスはお尋ねになった。「あなたたちはメシアのことをどう思うか。誰の子だろうか。」「彼らがダビデの子です」と言うとイエスは言われた。「では、どうしてダビデは、霊を受けて、メシアを主と呼んでいるのだろうか。『主は、わたしの主にお告げになった。』
「わたしの右の座に着きなさい、わたしがあなたの敵を、あなたの足もとに屈服させるときまで」と。」』
このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのであれば、どうしてメシアがダビデの子なのか。」これには誰一人、ひと言も言い返すことが出来ず、その日からは、もはやあえて質問する者はなかった。（22：41－46）

ファリサイ派やサドカイ派の問答の最後に、イエスは逆に彼らに質問をされました。「メシアとは誰の子だろうか。」というイエスに対して「ダビデの子です」という答えが返ってきました。ここでいうメシアとは、ローマを武力的に制圧してローマの支配下から自由になるリーダーを期待して言っています。イエスの話を聞く多くの人もそう思っていました。

すると、イエスは旧約聖書の詩編を引用して「どうしてダビデはメシアを主と呼んでいるのか」と質問されます。」人々は、ダビデの人間としての子孫がやってきて、対ローマの先頭に立つことを考えていました。

しかし、人々はイエスが御自身のことを言われていることに気がつかず、イエスが神の子であり、メシアであり、ダビデの子でもあるということはまだ分かることが出来ないのでした。

23章

23章

【律法学者とファリサイ派の人々を非難する】
(23:1-36)

*この単元は長いので、本文を小分けにして掲載し、解説します。

それから、イエスは群衆と弟子たちにお話しになった。「律法学者やファリサイ派の人々は、モーセの座についている。だから、彼が言うことは、すべて行ない、また守りなさい。しかし、彼らの行ないは見習ってはならない。言うだけで実行しないからである。彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが自分ではそれを動かすために、指一本貸そうとしない。そのすることは、すべて人に見せるためである。聖句の入った小箱を大きくしたり、衣装の房を長くしたりする。宴会では、上座、会堂では上席に座ることを好み、また、広場で挨拶されたり、『先生』と呼ばれたりすることを好む。だが、あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで後は皆兄弟なのだ。また、地上のものを『父』と呼んではならない。あなたがたの父は天の父お一人だけだ。『教師』と呼ばれても行けない。あなたがたの教師はキリスト一人だけである。あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだるものは高められる。(23:1-12)

イエスは周りの群衆や弟子たちに、律法学者やファリサイ派の批判を口にされます。モーセの教えだと言いながら、自分たちは何も行いをしない。そういう者達を信頼しなくてもいい、まねてはいけなとおっしゃっています。彼らのしたいことは、目立つことや「先生」と人々から呼ばれること、その程度のことなのです。

律法学者とファリサイ派の人々、あなたたちの偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入らせない。(23:13)

律法学者たちは、偽善者で不幸だとイエスはおっしゃいます。彼らは自分で天の国の扉を閉めるばかりか、ほかの人が入ろうとしても、その邪魔をしているような存在だということです。

律法学者とファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。改宗者を一人作ろうとして、海と陸を渡り歩くが、改宗者が出来ると、自分より倍も悪い地獄の子にしてしまうからだ。(23:15)

ここから、イエスは律法学者やファリサイ派のことを「彼ら」と呼んでいたのを、「あなたたち」と周りに語りかけるように話しておられます。それは、律法学者たちと同じように、教会で振る舞っている人に対しても注意を喚起しているからです。その人たちも、偽善者で不幸なのです。

ものの見えない案内人、あなたたちは不幸だ。あなたたちは、『神殿にかけて誓えば、その誓いは無効である。だが、神殿に黄金をかけて誓えば、それは果たされねばならない』と言う。愚かで者の見えない者たち、黄金と、黄金を清める神殿と、どちらが尊いか。また、『祭壇にかけて誓えば、その誓いは無効である。その上の供え物にかけて誓えば、それは果たされねばならない』と言う。ものの見えない者たち、供え物と、供え物を清くする祭壇と、どちらが尊いか。祭壇にかけて誓う者は、神殿とその中に住んでおられる方にかけて誓うのだ、天にかけて誓う者は、神の玉座とそれに座っておられる方にかけて誓うのだ。(23:16-22)

「ものの見えない案内人」とは、律法学者やファリサイ派、そして教会で律法学者たちのように、間違った導き方をする人々を指しています。彼らは、神殿より黄金を、祭壇より供え物を重視するように周りの人たちを導こうとします。しかし、イエスは、黄金より神殿をさらに黄金を清める神殿を、また供え物よりは神殿の祭壇を尊ばれるのです。そして先ず、それらよりも神様に対して誓うことが重要なのだと教えていらっしやいます。

律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。薄荷、いのんど、茴香の十分の一は捧げるが、律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実はないがしろにしているからだ。これこそ行なうべきことである。もとより、十分の一の捧げ物もないがしろにしてはならないが、物の見えない案内人、あなたたちはぶよ一匹さえも漉して除くが、らくだは飲み込んでいます。(23:23-24)

イエスは律法学者とファリサイ派の人に、偽善者で不幸だと言う言葉を投げつけられました。なぜならば、香料のような少量のものまで十分の一を量って捧げるが、「正義、慈悲、誠実」を実行していないからです。「十分の一」とは、自分の収穫の十分の一を神様に捧げる(神殿に差し出す)という捧げ物の決まりのことです。それは旧約時代から行なわれています。

「ぶよとらくだ」の話。これは、律法学者やファリサイ派が、汚れている(律法で汚れていると決まっている)虫を体内に入らないようにするために、布で漉してぶどう酒を飲むのに、同じ汚れたらくだは飲み込んでいますというイエスのたとえです。大小も分からない、つまり、「ものの見えない案内人」とは、律法学者やファリサイ派にのことを言っているのです。本末転倒だという指摘です。

*「薄荷」はイスラエルのいたるところに自生していた。イスラエル人には過越祭りの苦菜の一つとされた。ギ

リシアやローマの人々には、食料の調味料や、風邪を引いた時の薬としても用いられた

*「いのんど」は薬剤として及び調味料として使用されていた。

*『茴香（くみん）』パレスチナ周辺で多く栽培されていた。種子はピリリとした辛みをもち、副食物の薬味、また風邪薬としても用いられた。

律法学者とファリサイ派の人々あなたたち偽善者は不幸だ。杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強欲と放縦で満ちているからだ、物の見えないファリサイ派の人々、まず、杯の内側をきれいにせよ。そうすれば、外側もきれいになる。（23：25-26）

イエスは、律法学者とファリサイ派の本質＝偽善を指摘しておられます。儀式的な浄め（律法に書いてある）に基づいて、彼らは神への供え物の器の外側をきれいにするように主張します。もともと祭司たちは、神に仕える身が汚れないように、手に触れる器などの外側を清めるように気を配ったのですが、それは見栄を張っているだけで、内側は清められていないことを指摘されているのです。

律法学者とファリサイ派の人々、あなたたちは偽善者で不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている。（23：27-28）

イエスは「白く塗った墓」をたとえとして上げられています。それは、過越祭の前に、地方から来た巡礼たちが墓に触れて汚れないように、白く塗り直したということからきています。白く塗った墓は、夜目にも鮮やかに見えますが、中は汚れている（死は汚れていると律法にある）のです。今の律法学者やファリサイ派は、そのように中は汚れているのだとイエスは指摘していらっしゃるのです。

律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしているからだ。そして、『もし先祖の時代に生きていても、預言者の血を流す側にはつかなかったであろう』などと言う。こうして、自分が預言者を殺した者たちの子孫であることを自ら証明している。先祖が始めた悪事の仕上げをしたらどうだ。蛇よ、蝮の子らよ、どうしてあなたたちは地獄のバツを免れることが出来ようか。だからわたしは預言者、知者、学者をあなたたちに遣わすが、あなたたちはその中にある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと追い回して迫害する。こうして、正しい人アベルの血から、あなたたちが聖女と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血に至るまで、地上に流された正しい人の血はすべて、あなたたちに降り掛かって来る。はっきり言うておく。（23：29-36）

イエスはまた律法学者とファリサイ派に「あなたたち偽善者は不幸だ」と宣言されます。正しい顔をして歩いても、実は先祖は預言者を殺していると言われるのです。「蛇よ、蝮の子らよ」と言われるイエスの激しい口調は、イエス（神様）がこれまで預言者や知者、学者を送っても、皆殺してきたではないかと言われる。「アベルの血」とは、旧約聖書に書かれている、人類最初の殺人の被害者であるアベルのことを言っています。正しかったアベルを殺したのは、律法学者やファリサイ派の先祖だと言っておられるのです。「バラキアの子ゼカルヤ」もやはり、旧約の時代に正しいのに殺されてしまった人です。これらの過去の血もすべて、律法学者やファリサイ派にふりかかってくるのです。記念碑などを建てたところで、この罪は消えないからです。
*「バラキアの子ゼカルヤ」ヘブル語旧約聖書の最後にある殺人事件。

【エルサレムのために嘆く】（23：37-39）

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち壊すものよ、雌鳥がひなを羽の下に集まるように、わたしはおまえの子らを何度ある集めようとしたことか、だが。お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる。言うておくが、お前たちは『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時まで、今から後、決してわたしを見ることがない。」

（23：37-39）

ここで、墮落しているユダヤ教に対して、イエスは「エルサレム、エルサレム」と嘆きの声を上げておられます。そして、イエスは、すべての人（律法学者やファリサイ派も含めて）を集めて救おうとしたのに、あなたたちは救われることを拒否してきたと言われる。イエス自身雌鳥がひなの羽の下に集まり、あたたかく安全な日々を送れるようにと願われたのに、応じることがなかったのです。「今から後、決して私を見ることがない」という言葉に、イエスの十字架刑が迫っていることを感じさせます。

24章

24章

【神殿の崩壊を予告する】（24：1-2）

イエスが神殿の境内を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに神殿の建物を指差した。そこで、イエスは言われた。「これらすべてのものを見ないのか。はっきり言うておく。一つの石もここで残らず他の石の上に残ることはない。」（24：1-2）

「イエスが神殿の境内を出て行かれると」と始まっていますが、これは、ただ出て行ったという行為をさすだけでなく、神様がこの神殿を見捨てられたということを物語っています。いままでに読んだように、ユダヤ教は退廃していました。

弟子たちは皆、地方から出てきているので、すばらしい神殿の建物を見て、思わず感嘆の声を上げました。しかしイエスは、この永遠を誇るように見える神殿も滅ぶ時が来ると弟子たちに言われたのでした。

この預言は、紀元70年に成就することになります。ユダヤ人の頑強な反抗に業を煮やしたローマ軍が神殿を破壊してしまうのです。その後、廃墟になったエルサレム神殿は二度と建てられることはありませんでした。現在はイスラム教の会堂となっています。

【終末の徴】（24：3-14）

イエスがオリーブ山で座っておられると弟子たちがやって来て、ひそかに言った。「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られて世の終わるときには、どんな徴があるのですか。」イエスはお答えになった。「人に惑わされないように気をつけなさい。『わたしがメシアだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。戦争の騒ぎや戦争の噂を聞くだろうが、慌てないように気をつけなさい。そういうことには起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。しかし、これらはすべて産みの苦しみの始まりである。そのとき、あなたがたは苦しみを受け、殺される。また、わたしの名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる。そのとき、多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合うようになる。偽預言者も大勢現れ、多くの人を惑わす。不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷える。しかし、最後まで耐え忍ぶものは救われる。そして、御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る。」（24：3-14）

エルサレム神殿を出たイエス一行は、宿泊地に帰る途中のオリーブ山で座って休まっていたのでしょう。イエスのところへ弟子たちがやってきて終末のときにはどんなことが起こるのか「ひそかに」尋ねました。ひそかにというのは、きっと周りの人に聞こえてはいけないうことだと考えたのでしょう。

イエスは二つの前兆があると教えられます。まず、第一に一般的な前兆です。偽メシアの出現、戦争の勃発とそのうわさ、各地での飢饉や地震です。第二は信仰者に直接ふりかかる災難で、外からの迫害、内からの離脱者、裏切り者、偽預言者の出現、相互不信と信仰の衰退です。その中で、最後まで耐え忍ぶものは救われると言われています。

終末という考えは、何度も言いますが、私たち日本人には分かりづらいというか、実感を伴うことが難しいです。しかし、ユダヤ教や、やがて生まれる初期のキリスト教では、最後の審判の日が来て、この世が終わるという考え方が一般的です。

【大きな苦難を予告する】（24：15-28）

預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら一読者は悟れ一、そのとき、ユダヤにいたる人々は山に逃げなさい。屋上にいる者は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはならない。畑にいる物は、上着を取りに帰ってはならない。それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。そのときには、世界の初めから今までなく、今後も決していないほどの大きな苦難が来るからである。神がその期間を縮めてくださらなければ、誰一人救われない。しかし、神は選ばれた人たちのために、その期間を縮めて下さるのである。そのとき、『見よ、ここにはメシアがいる。』『いや、ここだ』と言う者がいても、信じてはならない。偽メシアや偽預言者が現れて、大きな徴や不思議な業を行ない、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとするからである。あなたがたには前もって言うておく。だから人が『見よ、メシアは荒れ野にいる』と言っても、行つてはならない。また、『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはならない。稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来るからである。死体のある所には、はげ鷹が集まるものだ」（24：15-28）

冒頭の「預言者ダニエル」は旧約聖書の「ダニエル書」に出てくる人物です。そのダニエルが預言している災難が起きたら、何も振り返らず一目散に逃げなさいと教えています。「一読者は悟れ一」とは、実は紀元前168

年にシリアのアンティオコス四世ピファネスがエルサレムの神殿の祭壇を除去し、代わりに異教の祭壇をおいたことを述べています。つまり、過去のことを述べて、将来の備えをするように、語っておられるのです。不幸はさらに疑心暗鬼をうみ、間違った指示を鵜呑みにしてはいけない、本当の終末はそれでもまだ来ないのです。終末とは、稲妻が光ると一瞬に東の人も西の人もすべてがその光を見るように起こるはずなのです。

【人の子が来る】（24：29－31）

「その苦難の日々の後、たちまち
太陽は暗くなり、
月は光を放たず、
天体は揺り動かされる。

そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。（24：29－31）

「人の子が来る」とは、イエスが再来してくる時、つまり終末の裁きの時が来ることを表しています。「人の子」とは、神から永遠の主権を受ける神の国の王なる「メシア」を指しています。そのメシア（イエス）が、地上での十字架刑にあい、天に帰り、またこの世に下ってくるのです。前項の苦しみが終わる「たちまち」メシアの登場が起こると書いてあります。人々が苦難にみち、さらに異常気象の中で恐れおののいていると「たちまち」すなわち、すぐにメシアは現れると語られています。

一体どんなことが起こるのでしょうか。前項も含めて日本人の私たちには縁遠いことに思われます。こんなことが起こる分けない。こんなことを話す人を信じると言っても無理だと思うのです。やっぱり、キリスト教は外国の宗教だと突き放したくなるのです。でも、どうかこの本だけでも読んでみてください。全部は好きになれなくても、心に響く言葉がきっとあると思うのです。

【いちじくの木教え】（24：32－35）

「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらすべてのことを見たなら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。はっきり言うておく。これらのことが皆起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」
（24：32－35）

ここからは、今までイエスが話された再臨と終末の前兆に加えて、七つのたとえ話を語られます。第一のたとえはいちじくの木の変化を見て、夏の近づいたことを知るように、今まで話した徴があったら、その時が終末だと悟るようにと話されます。いちじくの木はパレスチナにおいてポピュラーな木です。イエスは、いつでも分かりやすいように、このように誰でもが知っている物や事を用いて話されるのです。

【目を覚ましていなさい】（24：36－44）

「その日、そのときは、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存知である。人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。洪水になる前は、ノアが箱船に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何にも気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。だから、目を覚ましていなさい。いつの日自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るか知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入れさせはしないだろう。だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」（24：36－44）

ここに出てくる「ノア」とは、有名な「ノアの箱船」（旧約聖書）のノアです。当時は、ユダヤ教徒はみな、旧約聖書を暗記していたので、「ノアの箱船」を知らない人はいなかったでしょう。そのノアがいきなり箱船を作るようにと神様から言われたように、終末の時が、一体いつなのかは、誰も知らないと書いてあります。もし分かっていたら、偽預言者たちが山のように出現したことでしょう。わからないから、目を覚まして用意をしておきなさいとイエスは言われています。「目を覚ます」とは単に寝ないでいるということではなく、しっかりと信仰を守ってまよわぬように毎日を過ごさなさいということなのです。

【忠実な僕と悪い僕】（24：45－51）

「主人がその家の使用人たちの上に立てて、時間どおり彼らに食事を与えさせることにした忠実で賢い僕は、いったい誰であろうか。主人が帰って来たとき、言われたとおりになっているのを見られる僕は幸いである。はっきり言うておくが、主人は彼らに全財産を管理させるに違いない。しかし、それが悪い僕で、主人は遅いと思い、仲間を殴り始め、酒飲みどもと一緒に食べたり飲んだりしているとす。もしそう

なら、その僕の主人は予想しない日、思いがけないときに帰って来て、彼を激しく罰し、偽善者たちと同じ目に遭わせる。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」（24：45－51）

主人に仕えているよい僕と悪い僕がたとえ話が語られています。よい僕は、忠実で思慮深く、これはすべての信徒に当てはまります。つまり、信徒たちは、神様（主）からの賜物を与えられてその管理を任されているからです。賜物とは、食事や服などの実際の物から、才能や腕力など、私たちも含めて人間に与えられている物やことを指します。

悪い僕は、主人がいつ帰ってくるか知らないのに、「まだ帰っては来ないだろうと」暴力をふるったり、仲間を呼んで酒を飲んだりして、自分の役目を果たさずに過ごす僕です。これは「イエスの再臨」などないと目を覚ましていない人たちのことを指しています。

25章

25章

【「十人のおとめ」のたとえ】（25：1－13）

そこで「天の国は次のようにたとえられる。十人の乙女がそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちはそれぞれのともし火と一緒に、つぼに油を入れて持っていた。ところが花婿の来るのが遅れたので、皆眠気が差して眠り込んでしまった。真夜中に『花婿だ、迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで乙女たちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。私たちのともし火は消えそうです。』賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。その後で、ほかのおとめたちも来て『ご主人様、ご主人様、開けてください』と言った。しかし主人は『はっきりしておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。だから、目を覚ましていなさい。あなたがたはその日、その時を知らないのだから。（25：1－13）

ここで語られているのも、終末の時が遅いからと、準備を怠っては行けないということです。（災害荷対する準備では、私たちも同じように言いますね）終末の時に準備をしていなければ、ここに出てくる愚かなおとめたちのように、闇の中に閉め出されることになるということです。

では、この時代の婚礼の様子を見てみましょう。ユダヤの婚礼は、婚約して約一年後、法的に既に夫婦となっていた花嫁・花婿の夫婦生活が始まることを祝う喜びの祝宴です。その祝宴は、花婿の家で開かれるのが普通で、花婿は夕方になってから花婿の友人と一緒に花嫁の家に花嫁を迎えにいきます。花嫁の友人が音頭を取って、花嫁の友が美しく着飾り、二人を婚宴に導き、盛大な祝宴が開かれるのです。

ここで登場するおとめたちは、花嫁の友人ということになります。今回は、花婿の家ではなく、花嫁の家で婚宴が催されたようです。花嫁の友人であるおとめたちが花婿とその友人たちを待っているからです。おとめたちは、花婿たちを迎えるために出かけますが、もしもに備えて灯火の油を余分に用意していたおとめが五人、用意していなかったおとめが五人いました。花婿たちはなかなかおとずれません。花婿が到着すると、灯火を持って迎へに出た五人だけが中に入り、扉は閉まりました。彼女たちはみな、周到な用意をするべきでした。

花婿たちが、おとめたちが眠っているときに、急に現れるというのは、終末は不意にやって来ること、私たちはそれがいつか、分からないと教えているのです。

私はへそ曲がりなので、愚かと言われた五人のおとめに、だれか助言してくれなかったのだろうか。一緒にいる賢いおとめたちも「余分の油があった方がいいですよ」と早く教えてあげればいいのに、などと思います。しかし、終末の時は、どんな者も、助けるヒマなどなく、自分が準備するだけでも十分大変なことが起こるのだと思うのです。

【「タラント」のたとえ】（25：14－30）

「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けて旅に出かけた。早速、五タラントを預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。同じように、二タラント預かった者も、ほかに二タラントをもうけた。しかし、一タラント預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。

さて、かなり日が経ってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラント預かった者が進み出て、ほかの五タラントを差し出して行った。『ご主人様、五タラントお預けになりましたが、ご覧下さい。ほかに五タラントもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しの者に忠実であったから、多くの者を管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』次に二タラント預かった者も進み出て行った。『ご主人様、二タラントお預けになりましたが、ご覧下さい。ほかに二タラントもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しもの忠実であったから、多くの者を管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』ところで、一タラント預かった者も進み出て言った。『ご主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。これがあなたのお金です』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たときに利息つきで返してもらえたのに。さあ、そのタラントをこの男から取り上げて、十タラントもっている者に与えよ。誰でも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人はもっている者までも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう』（25：14－30）

ここで語られているたとえ話は、一体何を表しているのでしょうか。話の中身は読んでわかると思います。ここで出てくる主人が僕に渡す「タラントン」とは、ただお金の額を表しているのではありません。それは、一人一人の僕に与えた「タラントン」は実際にある金額を表す単位ですが、そうでなくて「タラント性（個性・性格）」と考えていいでしょう。つまり、彼らに、与えられたそれぞれの能力を表しているのです。

それが分かったら、主人が神様を表していることが分かります。神様は、私たち一人一人に様々な能力を下さっています。私たちには、能力を授けてくださった神様（主人）の能力を発揮するようにと求められています。そこで、何もせずお金を土に埋めてしまった僕は、神様が与えてくださったもの（賜物＝たまもの）を活用せず、むしろ無にしてしまったと言えるでしょう。

神様は、優しく愛に満ちたお方です。そして、私たち一人一人全員に、さまざまな能力（タラントン）を与えられています。賜物を受けていない人間はいません。しかし、それに気づかない人、土に埋めてしまう人、悪用する人は「外の闇へ追い出せ」とおっしゃるのも神様なのです。

【すべての民族を裁く】（25：31-46）

「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来る時、その栄光の座につく。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊とヤギを分けるように、彼らをより分け、羊を右に、ヤギを左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造のときからお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちには、わたしが飢えたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときには見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか、いつ旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこのもっとも小さいもの一人にしてくれたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしからはなれ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちはわたしが飢えているときに食べさせず、のどが渇いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気の時、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ』すると彼らも答える。『主よ、いつ私たちは、あなたが飢えたり、渇いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。このもっとも小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちには永遠の命を預かるのである。」

（25：31-46）

人の子が栄光の座につくときのことを話しておられます。そのとき、すべての民は、人の子によって右と左に分けられるです。右に分けられた正しいことをした人たちに中には、何もした覚えがない人が何人もいました。そこで、彼らは、主によいことをした覚えはありませんがと正直に言いました。すると、それは、直接ではないが、わたしの兄弟である一人、このもっとも小さい人にしたことは、（すべての人ということですが）主であるわたしにしてくれたのと同じことなのだとされます。たとえどんな人に対しても、一生懸命にまごころを持って接するなら、それはすべて、天の神にしたのと同じ意味を持つのです。そして、永遠の命を手に入れることになるのです。

正しいことをした人と違う群れになった人たちは、そんな小さな一人への思いがなかったので永遠の罰を受けることになるです。神様にあつたら、あるいは人々に目立つときにいいことをすればいいのだろうなどと考える人には、永遠の命ではなく、永遠の罰がくだることを覚えておきたいものです。

26章

26章

【イエスを殺す計略】（26：1-5）

イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると、弟子たちに言われた。「あなた方も知っている通り、二日後は過越祭である、人の子は、十字架につけられるために引き渡される。」そのころ、祭司長や民の長老たちは、カイアファと言う大祭司の屋敷に集まり、計略を用いてイエスを捕らえ、殺そうと相談した。しかし彼らは「民衆の中に騒ぎが起こると行けないから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。（26：1-5）

祭司長や長老たちは臆病でした。もし、過越祭の最中にイエスを殺したら、祭りで昂揚している人々がイエスの処刑反対の暴動を起こし、それがローマの統治に対する不満と一緒に大混乱になるでしょう。そうなれば、群衆の矛先は大祭司たちに向いてしまいます。彼らが祭司長たちに向かって来るだけではありません。ユダヤを征服しているローマに対して、暴動の責任を取らなければならないのです。そうなれば、ユダヤ教はこの国とともに歴史の波に消えて行くことになるかもしれない予測さえ考えられたのです。

【ベタニアで香油を注がれる】（26：6-13）

さて、イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンのおられたとき、一人の女が、きわめて高価な香油の入った石膏のつぼを持って近寄り、食事の席についておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた。弟子たちはこれを見て、憤慨して言った「なぜ、こんな無駄遣いをするのか。高く売って、貧しい人々に施すことができたのに」イエスはこれを知って言われた。「なぜ、この人を困らせるのか。わたしによいことをしてくれたのだ。貧しい人はいつもあなた方と一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はわたしの体に香油を注いでわたしを葬る準備をしてくれたのだ。はっきりしておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所ではこの人のしたことも記念して語り伝えられるだろう。」（26：6-13）

エルサレムに到着したあと、イエスはベタニア（エルサレムにほど近い場所）の信者の家に宿泊されていました。そこで集まった人たちと過ごして祈られたのです。過越の食事の前に、名も分からぬ一人の女性が忍込んで来て、イエスの頭に高価な香油を注ぎました。当時の食事の仕方は、長椅子に横になって行なわれていたので、女性でもイエスの頭から香油を注ぐことが出来たのです。それは、彼女自身も分からなかったでしょうが、イエスの巾の準備だったのです。なにかで、助けてもらったことのある女かもしれません。あるいは家族や友人が助けてもらったのかもしれません。どちらにせよ、弟子たちや周りの人々には、それはもったいない行為としか映らなかったのです。

イエスは、エルサレムに入られるとき、この高価な香油の香りを漂わせて人々を振り返らせたことでしょう。そして、イエスの言われたとおり二千年後の私たちは、聖書を通じてこの女性のことが現代も世界中に知れ渡っていることを知っています。
【ユダ、裏切りを企てる】（26：14-16）

その時、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長のところへ行き、「あの男をあなたたちに引き渡せば幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした。そのときから、ユダはイエスを引き渡そうと、よい機会をねらっていた。（26：14-16）

イスカリオテというのは土地の名前だろうと推察されていますが、まだ、はっきりとはわかっていません。過越の食事が始まる前に、イエスカリオテのユダは、祭司長の所へ行き、イエスを裏切って引き渡す約束をしたと書いてあります。イエスを深く愛していたユダは、それ故に、イエスが群衆の思うように、反ローマを掲げて蜂起し、まさに「ユダヤ人の王」となることを夢見ていたのではないのでしょうか。祭司長らに捕まることになれば、イエスは動くと思っていたに違いないありません。反ローマの暴動は、常に一触即発の状況でした。

【過越の食事をする】（26：17-25）

除酵祭の第一日に、弟子たちがイエスのところに来て、「どこに、過越の食事をなさる用意をいたしましょうか」と言った。イエスは言われた。「都のあの人のところに行ってこう言いなさい『先生が、「わたしの時が近づいた。お宅で弟子たちと一緒に過越の食事をする」と言っています』」弟子たちは、イエスに命じられたとおりにして、過越の食事の準備をした。夕方になると、イエスは十二人と一緒に食事の席に着かれた。一同が食事をしている時、イエスは言われた。「はっきりしておくが、あなた方のうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」弟子たちは非常に心を痛めて、「主よ、まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。イエスはお答えになった。「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者がわたしを裏切る。ひとの子は、聖書に書いてある通りに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」イエスを裏切ろうとしていたユダが口を挟んで、「先生、まさかわたしのことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ」（26：17-25）

過越の食事の準備について、弟子たちに行くべきところを話すイエス。イエスはこのような、最後の時まで「既に用意されている」と言われているのを、弟子たちは何度か経験しているのに不思議に思わなかったのでしょうか。（例えばエルサレム入城の時のロバのことなど）現在の私たちでも、不思議です。イエスは、このとき、「一人が裏切ろうとしている」と使徒たちを不安に陥れます。そして、それはユダだと明かされます。「生まれなかった方が、その者のためによかった」と言われるということは、既に生まれたときから、裏切り者の役をするようになると、決まっていたのでしょうか。それでは、裏切り者に祝福されることはないのでしょうか。イエス自身はユダを深く憐れんでいらっしゃるのです。

【主の晩餐】（26：26-30）

一同が食事をしている時、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流れるわたしの血、契約の血である。言うておくが、わたしの父の国であなた方とともに新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作った者を飲むことは決してあるまい。」一同は賛美の歌をうたってから、オリブ山へ出かけた。（26：26-30）

イエスは、過越の食事を食べながら、パンを取り、祈りを唱えてそれを裂き、わたしの体だと言われました。そして杯を取り、これも祈りを唱えてこれはわたしの血、契約の血だとおっしゃいました。「この杯から」とあることから、回し飲みをしたのではないのでしょうか。この行為は、二千年位以上たった今も、教会で行なわれています。キリスト教徒は、イエスの体を食べ、血を飲んで、イエスの後を追って歩いていくのです。余談ですが、茶道での濃い茶のお手前は、この回し飲みから来ているという説があるそうです。

【ペトロの離反を予告する】（26：31-35）

その時、イエスは弟子たちに言われた。「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく。

『わたしは羊飼いを打つ。

すると、羊の群れは散ってしまう』

と書いてあるからだ。しかし、わたしは復活した後、あなた方より先にガリラヤへ行く。」するとペトロが、「たとえ、みんながあなたにつまづいても、わたしは決してつまづきません」と言った。イエスは言われた。「はっきり言うておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」ペトロは、「たとえ、御一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と言った。弟子たちも皆、同じように言った。

（26：31-35）

「つまづく」というのは、何か物に引っかかるという意味もありますが、ここでは宗教上のことで、挫折する、絶望するの意味で使われています。

イエスはペトロに三度イエスを否定すると予告されました。これは、すぐに現実になります。しかし、今はまだ、ペトロは心を燃やし「イエスに付いて行きます、一緒に死にます」と言っています。それは、嘘ではなかったのでしょうか。本当に心のなかで、そう思っていたのです。イエスを裏切ることなど絶対にないと考えていたに違いありません。

【ゲツセマネで祈る】（26：36-46）

それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネというところに来て、「わたしがむこうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、その時、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、出来ることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願い通りではなく、御心のままに。」それから、弟子たちのところへ戻ってご覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まない限りこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行なわれますように。」再び戻ってご覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。そこで、彼らを離れ、またむこうへ行って、三度目も同じ言葉で祈られた。それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。あなた方はまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」（26：36-46）

逮捕される前夜、イエスは苦しみもだえるほどの祈りを神様に捧げておられました。「死ぬばかりに悲しい」というイエスの悲しみはどんなものだったのでしょうか。逮捕されて十字架に架けられることでしょうか。それだけではなく、誰よりも弟子たちのことをイエスは思っておられたのではないのでしょうか。聖書の中では、何気ない生活の中の会話などはありませんが、イエスは弟子たちを心から大切に思っておられたのです。今のままで自分が去ってしまったら、彼らや周りの信者たちはどうになってしまうのか、それを考えて「死ぬほどに悲しい」思っていたのではないのでしょうか。

しかし一方、弟子たちは起きておくように言われたのに、皆、眠っています。そばにずっといた弟子たちは、イエスに何が迫っているのか分からないのです。先のことが見えるイエスだからこそ、その苦しみは堪え難かったのです。その中で、「自分の祈りの通りでなく、神の御心のままに」と神様に祈っておられます。神様にすべてを委ねるこの祈りの言葉は、苦しみ、悲しみ抜いた後に、イエスの口から出た言葉なのです。

【裏切られ、逮捕される】（26：47－56）

イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダがやって来た、祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは「わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ」と前もって合図を決めていた。ユダはすぐイエスに近寄り、「先生、こんばんは」と言って接吻をした。イエスは「友よ、しようとしていることをするがよい」と言われた。すると人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕らえた。その時、イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。わたしが父にお願いできないとも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう。」またその時、群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内に座って教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。このすべてのことが起こったのは預言者たちの書いたことが実現するためである。」その時、弟子は皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。（26：47－56）

キスをすることで、誰がイエスかを示す。それが裏切り者になったユダの役割でした。キスによってというのは、本当に残酷です。それは、師として敬愛していると言う気持ちを伝える行為だったに違いありません。この時代、写真などない上に、暗い時間です。誰がイエスであり、どこにいるかを示めし、騒動にならないうちにイエスの身柄を拘束することがユダの役割だったのです。弟子たちは、あっという間にイエスを見捨てて逃げてしまいました。イエスは、反抗することなく、あっけなく捕まりました。

イエスは捕縛に来た人たちに、毎日あなたたちの前にいたのに捕まえることをせず、大人数で強盗にでも向かうように逮捕しにきたことを指摘されます。つまり、人々の前で捕まえるのは、暴動が起こる恐れがあることと、イエスにどんな罪があるかを見いだすことが出来なかったからだったのです。

【最高法院で裁判を受ける】（26：57－67）

人々はイエスを捕らえると、大祭司カイアファのところへ連れて行った。そこには、憲法学者や長老たちが集まっていた。ペトロは遠くはなれてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで行き、この成り行きを見ようと、中に入って、下役たちと一緒に座っていた。さて、祭司長と最高法院の全員は、死刑にしようとするイエスに取って不利な偽証を求めた。偽証人は何人も現れたが、証拠は得られなかった。最後に二人の者が来て、「この男は『神の神殿を打ち粉倒し、三日あれば建てることのできる』と言いました。」と告げた。そこで、大祭司は立ち上がり、イエスに言った。「何も答えないのか、この者がお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」イエスは黙り続けておられた。大祭司は言った。「生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか」イエスは言われた。「それは、あなたが言ったことです。しかし、わたしは言うておく。
あなたたちはやがて
人の子が全能の神の右に座り、
天の雲に乗って来るのを見る。」

そこで、大祭司は服を引き裂きながら言った。「神を冒瀆した。これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は今、冒瀆の言葉を聞いた。そう思うか。」人々は「死罪になすべきだ」と答えた。そしてイエスの顔に唾を吐きかけ、拳で殴り、ある者は平手で打ちながら「メシア、お前を殴ったのは誰か、言い当ててみる」と言った。（26：57－67）

「わたしは神の子である」というイエスのひと言を、祭司長たちは待っていました。そのひと言で、神への冒瀆の罪をきせることができるからです。しかし、イエスはその言葉を避けておられます。自分が、ローマ総督のところまで連れていかれて、十字架刑になることは、すべてご存知だったからです。それは逃れようのない神様の意志でした。何もかも知っているなら、どうしてユダに裏切り行為をさせたのか、わたしはイエスに聞いてみたいと思います。

文中、「あなたたちはやがて、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗って来るのを見る」と言われます。これは、旧約聖書、詩編110編の冒頭の言葉です。これを引用することで、これからの十字架につけられ、一見敗北したかに見えるかもしれないが、それは復活の勝利となり、メシアは昇天して神の右の座に着き、神の敵を足もとに従わせることになると言っておられるのです。

ここで、神への侮辱を認めた大祭司が服を引き裂きながら発言しています。これは、驚愕と恐れを表す行為です。

【ペトロ、イエスを知らないと言う】（26：69－75）

ペトロは外にいて中庭に座っていた。そこへ一人の女中が近寄って来て、「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」と言った。ペトロは皆の前でそれを打ち消して、「何のことを言っているのか、わたしには分からない」と言った。ペトロが門の方に行くと、ほかの女中が目を留め、居合わせた人々に、「この人はナザレのイエスと一緒にいました」と言った。そこでペトロは再び、「そんな人は知らない」と誓って打ち消した。しばらくして、そこにいた人々が近寄って来てペトロに言った。「確かに、お前もあの連中の仲間だ言葉遣いでそれが分かる」そのとき、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「そんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が鳴いた。ペトロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。（26：69－75）

イエスが逮捕されるときに、逃げ出したペトロでしたが、集まってくる人ごみにまぎれて、大祭司邸へイエスを追って行きました。彼は、最後の晚餐の時、イエスに「捕まってから鶏が鳴くまでの間に三度イエスを知らないと言う」と予告されていました。十二使徒のリーダー格であったペトロにとって、そんなことが起こるわけはないと思っていました。しかし、現実になってしまったのです。イエスがおっしゃった通りのことが起こりました。ペトロは外に出て「激しく泣いた」とかかれています。この言葉は、ギリシア語では「苦汁を伴った嘆き」を指す言葉です。

しかし、ペトロはこの後に、もう一度悔い改めをして、イエスの教えを継ぐ者となっていくのです。強い人には弱い人の心は分からないものです。ペトロは弱い自分をしっかりと自覚したとき、本当の信仰を知ることになるのです。

27章

27章

【ピラトに引渡される】（27：1-2）

夜が明けると、祭司長たちと民の長老たち一同は、イエスを殺そうと相談した。そして、イエスを縛って引いて行き、総督ピラトに渡した。
（27：1-2）

イエスを宗教上の罪で罰するなら、祭司長たち（サンヘドリン）だけでできることでした。しかし、はっきりした罪状が見当たらないので、政治犯に仕立てて、ローマ総督のピラトに殺させようと考えたのです。しかも、ローマの統治下で祭司長たちには死刑を言い渡す権利がなかったのです。

誰も傷つけていないイエスが、政治犯として十字架につけられるということは、大きな屈辱でした。彼は、決してローマと対抗しようとは思っていなかったのです。

【ユダ、自殺する】（27：3-10）

そのころ、イエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って、後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちや長老たちに返そうとして、「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言った。しかし彼らは、「我々の知ったことではない。お前の問題だ」と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首につけて死んだ。祭司長たちは銀貨を拾い上げて、「これは血の代金だから神殿の収入にするわけにはいかない。」相談の上、その金で「陶器職人の畑」を買い、外国人の墓地にすることにした。このため、この畑は今日まで「血の畑」と言われている。こうして預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。「彼らは銀貨三十枚を取った。それは値踏みされた者、すなわち、イスラエルの子らが値踏みした者の価である。主がわたしにお命じになったように、彼らはこの金で陶器職人の畑を買い取った。」（27：3-10）

冒頭の「そのころ」はイエスがピラトに引渡されるころを示しています。ユダの最期については、共観福音書（マタイ・マルコ・ルカ）の中では、マタイだけが取り上げています。ユダは、イエスの有罪判決を知り、移動して行く途中で、そのみじめな姿をかいま見たのでしょうか。まさか死刑になるとは思っていなかったのです。牢に入りしばらくすれば、熱狂している信者たちも落ち着き、本当にイエスについて行きたいと思う者だけで、また、福音を伝える旅に出られると思っていたに違いありません。そのきっかけを作るつもりだったのです。決してイエスを十字架にかけるのなど、望んでいなかったのです。後悔をして、イエスの居場所に導くためにももらった銀貨三十枚を、祭司長たちや長老たちに返そうとしました。しかし、取り合ってくれません。そこで、金貨を神殿に投げ込んで、首を吊って死んでしまったのです。銀貨三十枚で祭司長たちが畑を買うなど、夢にも思っていなかったでしょう。

ユダの裏切りも、苦しみも死も、神様が預言されていたというなら、わたしは、どう考えていいのか分かりません。

ユダに渡したお金の方ですが、これは「神殿の金庫」から出たものでしょう。出庫するときには平気なのに、祭司長たちは、ユダが置いて行った金を「神殿の金庫」には戻せないと話し合いました。そして、これで土地を買って、外国人用の墓地にしたのです。これには、汚れている外国人（旅人などの異教徒）のためだという説とユダヤ教に帰依した外国人のためだったという説もあります。

【ピラトから尋問される】（27：11-14）

さて、イエスは総督の前に立たされた。総督がイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは「それは、あなたが言っていることです。」と言われた。祭司長や長老たちから訴えられている間、これには何もお答えにならなかった。するとピラトは、「あのようにお前に不利な証言をしているのに、聞こえないのか」と言った。それでも、どんな訴えにもお答えにならなかったため、総督は非常に不思議に思った。（27：11-14）

ローマ総督であるピラトのところに連れて来られたイエスは、ピラトの前に立たされ、「お前がユダヤ人の王なのか」という問いに「あなたが言っていることです」とこたえ、自分のことを全く弁明しようとしなかったのです。総督は、罪状を聞いても、特に悪いことはしていないのになぜか、不思議に思えたのです。少なくとも、彼は有罪とは思えなかったのです。しかし、民衆や祭司長たちの力を侮ることは、ピラトの失脚に通じます。この囚人を、再び群衆の前にたたせ、死刑を言い渡す以外になかったのです。

【死刑の判決を受ける】（27：15-26）

ところで祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することになっていた。」そのころバラバ・イエスという評判の囚人がいた。ピラトは人々が集まっていたときに言った。「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアと言われるイエスか。人々がイエスを引渡したのは、ねたみのためだと分かったいたからだ。一方ピラトが裁判の席についているときに、妻から伝言があった。「あの正しい人に関係しないでください。その人とのことで、わたしは昨夜、夢でずいぶん苦しめられました。」しかし祭司長や長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようにと群衆を説

得した。そこで、総督が「二人のうちどちらを釈放してほしいのか」と言うと、人々は「バラバを」と言った。ピラトが「では、メシアいわれているイエスのほうは、どうしたらよいか」と言うと、皆は「十字架に付けろ」と叫び続けた。ピラトは、これ以上言っても無駄なばかりか、帰って騒動が起こりそうなを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしは責任がない。お前たちの問題だ。」民はこぞって答えた「その地の責任は、我々と子孫にある。」そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架に付けるために引渡した。
(27:15-26)

「イエス」という名前は、この地方でよくある名前だったそうです。日本だったら「太郎」という所というところでしょうか。その「イエス」と言う名前の持ち主が、二人、ここにいます。一方は「評判の」と言われていますが、強盗だったとか、民族指導者（ローマとの対立を考えている）などと言われています。ピラトは人々に「どちらを釈放してほしいのか」と問うと、群衆は「バラバを」と叫びます。そして、メシアと言われるイエスの方には「十字架につけろ」と叫ぶのでした。それは、祭司長たちが彼らを煽動したからです。実はピラトの官邸に来る前に、人々はイエスの逮捕を知って集まり始め、かなり興奮状態だったと考えられます。そこへ祭司長たちが、煽り立てたのでしょう。この群衆の大半はイエスの話を聞いたことがある人、イエスの奇蹟に目を見張った人、いや、奇蹟で治された人たちもいたかもしれません。今は群衆の一人となって皆とともに叫んでいるのでした。人間の弱さを感じます。この大群衆、しかも祭司長たちがいるところで、ナザレ人のイエスの十字架に反対できる人など、いなかったでしょう。ピラト夫人のイエスと関わらないでほしいという夢のお告げは役に立たなかったのです。

【兵士から侮辱される】(27:27-31)

それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した。また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせてもとの服を着せ、十字架に付けるために引いて行った。(27:27-31)

十字架刑にかかることになったイエスは、自分の十字架の横木を背負うことが決まりでした。その前に皆の前で鞭打たれ、さらに兵士たちから、こんな侮辱を受けていたのです。人間は、どっちが強いかで、こんなに心ないことが出来るものなのでしょうか。彼ら兵士は、残酷な気持ちで「ユダヤ人の王」をからかいました。たたいたりもしました。今、彼らは、誰にもとがめられることなく、イエスを侮辱できるのです。本当は、自分のうさをはらしているだけでしょう。人間は、弱い。だから、少しでも強い立場になったとき、残酷な仕打ちをしてしまうのです。

【十字架につけられる】(27:21-44)

兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。そして、ゴルゴダという所、すなわち「されこうべの場所」につくと、苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。彼らはイエスを十字架に付けると、くじを引いてその服を分け合い、そこに座って見張りをしていた。イエスの頭の上には「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。折から、イエスと一緒に二人の強盗が一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、行った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」同じように、祭司長たちや律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架からおろるがいい。そうすれば、信じてやろう、神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから」一緒に十字架に付けられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。
(27:21-44)

亡くなる前、イエスは死ぬまでの肉体の苦しみをすべて体験なさいました。それだけでなく、心の痛みも体験なさいました。死刑が言い渡されたピラトの公邸から、処刑の場所であるゴルゴダの丘まで、受刑者は、十字架を背負って行かなければなりません。縦木は、既に建ててあるので、横木を担ぐのです。予想もつきませんが、一人の人間が吊るされても大丈夫なほどの木材と聞くと、かなり太く重い物だったでしょう。この項の最初に出てくるキレネ人のシモンは、全く運が悪い人です。イエスが憔悴しきって横木を持ち上げられないので、代わりに運ぶように言われたのです。それは、事前に言われたのでもなく、ただ、そのそばを通りかかってしまったからなのです。それくらい、ローマ兵は絶対でした。

さて、ゴルゴダの丘につくと、執行人たちはイエスに、苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。しかし、イエスは飲まれません。なぜなら、最後の晩餐のときに、「言っておくが、わたしの父の国であなた方と共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作った物を飲むことは決してあるまい」(26:29)と弟子たちに約束したからです。多分、十字架での苦しみを少なくするための何かを混ぜたぶどう酒だったのでしょう。イエスは、それを拒否され、最後の最後まで、人間の苦しみを味わい尽くされることを選ばれたのです。そして、十字架の上では、多くの人の侮蔑の言葉を聞かなければならなかったのです。

なぜ、これほどまでに心身の痛みを受けなければならないのでしょうか。それは、イエスが今後、すべての人の痛み、悲しみを一緒に負って歩く存在となられるためなのです。そんな痛みを知っている方だからこそ、わたしたちは、イエスに痛みを打ち明け、慰められ、次の日を生きて行けるのではないのでしょうか。

【イエスの死】（27：45－56）

さて、昼の十二時に全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時頃イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう湯を含ませて、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。ほかの人々は「待て、エリヤが彼を救いにくるかどうか見てみよう」と言った。しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。その時、神殿の垂れ幕が上から下までまっぶたつに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りにっていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。百人隊長と一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。（27：45－56）

イエスの十字架上の死について書かれた部分です。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」という言葉が最後の言葉になっています。「エリアを呼んでいる」と言っている人がいますが、これは「エリ、エリ」と言うイエスの言葉を聞いて、エリアを呼んでいると勘違いしたのではないのでしょうか。解釈としてはこれは、旧約聖書の詩編22編の言葉全体であり、当時の人は詩編は暗記していたので、最初の所を聞けばどの詩編であるか、分かったのだそうです。そして、この詩編は最後は神を賛美して終わっているので、そこまで意味をすべて込めて言われたのではないかとされています。つまり「なぜわたしをお見捨てになったのですか」だと絶望の言葉になります。そうではないと言えるのです。また、神仏に見捨てられたと考えると、私たちの生活とずっと身近になります。イエスの死は、そこでは終わらないことを物語っているのです。

空が暗くなり、息を引き取られた時には神殿の垂れ幕が裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いた。イエスの死にはこんなにもたくさんのことが起こったのです。いや、起こったほどの衝撃が走る死だったのです。

そして、聖なる者たちの体が生き返り、イエスの復活の後に、墓から出て来て、エルサレムで多くの人に現れた。とありますが、これは、正直、言葉通りのこととは思えません。しかし、それくらいに周りの人にも衝撃だったということでしょう。処刑されたゴルゴダの丘は、エルサレムに近い場所だったので、死刑を見物しようという人も多かったでしょう。それぞれが、イエスを慕っていたころを思い出し、考えるところがあったでしょう。「イエスを十字架に」と残酷に叫んだ人々のほとんどは、イエスの話を聞いていた庶民ではないかと思えます。

【墓に葬られる】（27：57－61）

夕方になると、アリマタヤ出身の金持ちでヨセフという人が来た。この人もイエスの弟子であった。この人がピラトのところへ行って、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。そこでピラトは、渡すように命じた。ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、きれいな亜麻布に包み、岩に掘った自分の新しい墓の中に納め、墓の入り口には大きな石を転がしておいてから立ち去った。マグダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた。（27：57－61）

イエスが墓に葬られました。アリマタヤ出身のヨセフがピラトに願いで出ると死体をどうしたものかと困っていたであろう彼らは簡単にイエスの遺体を任せてくれました。まだ、イエスが復活したと言う番兵の報告の前だったからです。復活など、もちろんあり得ないと思っていたのでしょう。

アリマタヤのヨセフはイエスを新しい墓の中に納め、入り口を大きな石で塞ぎました。「岩に掘った自分の新しい墓」というのは、自分が亡くなったときのために掘られたのでしょうか。それとも、墓を作って売るといふ商売がそのころはあったのでしょうか。詳しいことは分かりません。イエスが存命中にそうだったように、先の準備がすでにされていたのかもしれませんが、最後になって二人のマリアが登場しますが、これはもちろん、ヨセフと連絡を取っていたからでしょう。

女性二人は、遺体を譲り受けて帰って来るのを、墓の近くで待っていたのかもしれませんが、二人が「墓の方を向いて座っていた」というのが、どんなにかイエスを思っていたかを教えてください。彼女たちは、重い石を動かすことも出来ないから、ここでイエスを見守ろうと座っていたのでしょう。

【番兵、墓を見張る】（27：62－66）

明るる日、すなわち、準備の翌日、祭司長たちとファリサイ派の人々はピラトの所に集まって、こう言った「閣下、人を惑わすあの者がまだ生きていた時『自分は三日後に復活する』と言っていたのを、わたしは思い出しました。ですから三日目までは墓を見張るように命令してください。そうでないと、弟子たちが来て死体を盗み出し、『イエスは死者の中から復活した』などと民衆に言いふらすかもしれません。そうすると、人々は前よりもひどく惑わすこととなります。ピラトは行った。「あなたたちには、番兵がいるはずだ。行って、しっかり見張らせるがよい。そこで、彼らは行って墓の石に封印して、番兵をおいた。（27：62－66）

準備の翌日とは安息日の前日です。安息日は、厳しい掟で行なっていたいいこと、悪いことが決まっていた。そこで、アリマタヤのヨセフはイエスを急いで埋葬したのです。

ここでは、復活すると言ったイエスの言葉を、祭司長たちが総督ピラトに告げ、三日目までイエスの墓を見張ってくれるように頼んでいます。どれくらい、イエスの復活を信じていたのでしょうか。この恐れ方を見ると、かなり復活を信じていたのではないのでしょうか。それよりも弟子が遺体を盗み再びイエスの信者の心を集めることを恐れていたのでしょうか。

そして、復活によるイエス信者の増加だけが彼らの関心事だったと思えます。なぜなら、それは、彼らの信者が減ることでもあるからです。もし、復活したイエスを取り押さえたら、どうなっていたのでしょうか。神様はまた、イエスに命を授け、復活させたのでしょうか。

28章

28章

【復活する】（28：1-10）

さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架にかけられたイエスを捜しているだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体を置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなた方より先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる』確かに、あなたがたに伝えました。」婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立って、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた「恐れることはない。行って、私の兄弟にガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに出会うことになる。」（28-1：10）

祭司長にイエスの復活を語った番兵たちとマグダラのマリアともう一人のマリアが体験したのは、イエスの墓のなかで、大きな地震が起こり、天使が現れるという衝撃的なことでした。天使は見たことのないような白い衣で、輝いていました。しかし、マリアたちは、天使の声を聞き、すぐに弟子たちにガリラヤへ行くよう伝えるために飛び出して行きました。彼女らは、瞬時にやるべきことを、悟ったのです。

その途中、イエスが「おはよう」と言って彼女らに近づいてきました。「おはよう」こんな天地がひっくり返るかというようななかで、この「おはよう」という挨拶は、すこし滑稽な気がします。でも、その「おはよう」は、これから生きて行く彼女たちの生活の中にとけ込んでいる言葉です。「おはよう」を聞いたときに、彼女たちはイエスのお姿を思い出すことでしょ。

また、この「おはよう」は、復活もイエスの愛も、私たちが「おはよう」と挨拶を交わす日常生活の中にあるのだと語っているのです。イエスは決しておとぎ話ではないのです。

【番兵、報告する】（28：1-15）

婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長に報告した。そこで、『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。もしこのことが総督の耳に入っても、うまく総督を説得して、あなた方には心配をかけないようにしよう。」兵士たちは金を受け取って、教えられた通りにした。その話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。（28：1-15）

「婦人たちが行き着かないうちに」ここで言う「婦人たち」は、イエス一行にイエスの復活を見た女性たちです。彼らは、イエスがガリラヤに行くと言ったので、それを弟子たちに知らせるために急いでいました。しかし、その婦人たちが通るよりも早く、都（エルサレム）に着いて、番兵たちが祭司長にイエスの遺体が、復活したことを報告したのです。ことが大きくなるのを恐れた祭司長たちは、番兵に金を与え、寝ている間に弟子たちに盗まれたことにしようとしたのです。番兵の報告をすぐに信じたのは、イエスがただの人間ではないと思う人が、祭司長やファリサイ派にいたということでしょう。

イエスは復活し、当然ですが、墓からいなくなりました。イエスの処刑には、そのずっと前から、イエス自身が死んで三日目に復活すると弟子たちに宣言していました。本当に復活して、またイエスが出て来たということになったら、祭司長たちは失脚してしまうでしょう。そこで、番兵が寝ている間に弟子に遺体を盗まれたと言ったほうが、番兵のミスだということ丸く収まると考えたのでしょ。

*復活と日本人

日本人には、仏教などから来る「輪廻転生」の考えを持っている人が多くいます。もちろん、すべての人が信じているわけではありませんが。「輪廻転生」ならば、違うものに生まれ変わり、転生しないですむように、ステージを踏んで行きます。そこで、復活は、復活した後どうなるのだろう。と考えてしましまうのです。昇天され天に帰られる、イエス様に限った処置なのでしょう。

【弟子たちを派遣する】（28：16-20）

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは近寄って来て言われた「私は天と地の一切の権能授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にいなさい。彼らは父と子と聖霊の名によって洗礼を受け、あなた方に命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなた方とともにいる。」（28：16-20）

このイエスは、既に十字架にかかり地上では死んでしまったイエスです。そこからまた、命を受けたので、かつて語っていたように、復活されたのです。そして、約束通り十一人の弟子（ユダは裏切りの後、自殺した）たち

と会われ「すべての民を私の弟子にしてください」と命じられました。イエスは「すべての民をわたしの弟子にする、つまり、全世界をイエスの教えたユダヤ教徒にするということを弟子たちに言われたのです。しかし、民族宗教であるユダヤ人のためのユダヤ教を全世界に広めるとは、ものすごい野望です。ユダヤ教から世界へ広まる時、イエスを中心としたキリスト教になっていきました。個々の国や地域には、そこに合った宗教がたくさんあります。それらは、この当時はみな、民族宗教だったと言えるのではないのでしょうか。現代と違って、舟か徒歩や動物にのって移動することしかなかった時代に、考えられないことのような気がします。しかし、イエスの意思通り、少なくとも遠くはなれた日本にも、少ないけれど、今、キリスト教を信じる人がいます。

よくある疑問に、「イエスはキリスト教徒だったのか？」というのがあります。イエスは生きておられる間は、ユダヤ教徒でした。死後、弟子たちは、最初はユダヤ教イエス派とされていたようです。それが、イエスの死の意味や話された言葉を再検証することで、キリスト教という、ユダヤ教ではない宗教にと発展して行くのです。ですから、イエスはユダヤ教徒だったといえるでしょう。

キリスト教は、イエスの死後、ユダヤ教の分派と見られている時代を通過し、のちに、法王をいただきカトリックとなって一致します。しかし、宗教革命で一部の教徒はバチカン（カトリック）から別れていきます。それが、プロテスタントです。その他、東方教会、西方教会など、様々なキリスト教が生まれて来るのです。日々の教えには違ったものがあるでしょうが、イエス様を信仰することにおいては一致していると信じたいです。イエスは、「世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」とおっしゃいました。イエスが、後にキリスト教となるために、スタートを切られたのです。そして、その精神が今、生きているからこそ、世界にキリスト教徒がいるのです。

しかし、現代のわたしたちはどうでしょうか。この大きな構想を立てられたイエスの意思が実在したと思われませんか？日本人には、キリスト教は外国の宗教だし、合わないと思っている人が大半なのではないでしょうか。（ちなみに日本人のキリスト教徒は人口の1割だそうです）自分には関係ないと、思っていないませんか。何しろ、風土が違うので、日本人は、聖書を読む上で、たくさんの説明を必要とします。教会は心が傷ついた人が行く所だと思っているかもしれません。しかし、例えば、わたしの知っている範囲ですが、長崎、山陰地方などには、キリスト教を代々引き継いで来た家もあるのです。決して、日本人はキリスト教の眼中になかったわけではないのです。

「私はこの世の終わりまで、いつもあなた方とともにいる」とおっしゃった中には、わたしたち日本人も入っているのです。